

龍谷大学文学部考古学実習
調査報告書 第1冊

上中城跡の研究

2021年

龍谷大学文学部考古学実習室



巻頭写真 上中城跡直上写真（ドローン撮影、2018年10月28日（株）文化財サービス撮影）

序

京都盆地の北西部、丹波山系の一角に京都市右京区京北町がある。京北の地は、山深い地にありながら、古代より王權の舞台となった京都と陸や川の道を通じて繋がる。当地は山陰、丹後など日本海ルートに繋がる交通の要所であることや杣と呼ばれる木材原産地を有することから政治的・経済的に発展してきた土地柄であった。そのため、原始・古代以降、現代に至るまでの特色ある多数の遺跡が残されている。

ここに紹介する上中城跡も平安時代末頃に成立した中世初期の城館跡として早くから注目され保護されてきたのである。ただし、これらの遺跡は考古学的な資料化と統合化が充分に進められているとは言えず、地域史を解明する上での課題が残されていると考えられた。本学では、1998年度の仏教文化研究所の共同研究「北近畿地方の古代寺院の研究」（代表岡崎晋明）によって、周山廃寺を取り上げたことが嚆矢となる。

それから二十数年を経ることとなってしまったが、京北町に残された遺跡の重要性に改めて注目し、考古学実習のフィールドとして取り組むことになったのである。まず、2012年から2箇年にわたり、中期の方墳で構成される周山古墳群の測量を実施し、成果を初めて公表することができた。

そして、2014年度からは本冊で報告する市指定史跡上中城跡の調査に着手した。まず、測量調査を行って現況確認を行い、2015年度から2018年度にかけて遺跡内容の確認のための発掘調査を実施して、年代、規模、構造についての新たな知見を得ることができたのである。

毎夏の京北町での調査は、高原ゆえに心地よさがある。素晴らしい自然環境と豊かな歴史に囲まれた城館跡の調査が無事に軌道に乗って進められたのは、地元の方々の協力があったからに他ならない。また、京都市文化財保護課、京都市埋蔵文化財研究所、京都府教育委員会文化財保護課の助言と協力、宿泊所とした京都ゼミナールハウスのご協力も不可欠であった。ここに関係各位に対し深甚なる御礼を申し上げたい。

2021年3月

龍谷大学文学部教授 國下 多美樹

例　言

- 1 本報告は、京都市右京区京北町城下町 37-1, 37-2 に所在する京都市指定史跡・上中城跡（跡）（上中太田遺跡含む）の測量・電磁探査、及び発掘調査に関するものである。
- 2 当大学による過去の測量・発掘調査の概要報告については、『龍谷大学考古学実習』No.11（2015）・12（2016）、『龍谷大学考古学実習・文化財実習報告書』第1集（2018）・第2集（2019）において既に公表している。本報告はその正式見解を示したものであり、関連する研究成果を含めた総合報告書、『上中城跡の研究』（『龍谷大学文学部考古学実習調査報告書第1冊』2021）である。
- 3 調査は、龍谷大学文学部考古学実習室・考古学研究室が学術調査として行った。
- 4 調査期間及び調査面積は、表1に示す通りである。
- 5 調査は、第4～6次を國下多美樹（龍谷大学文学部教授）、第7次を國下多美樹、木許 守（同教授）が担当し、下記の学生の主たる調査援助を得た。
花熊祐基（文学研究科修士課程当時、現同博士課程）、神所尚暉（文学研究科修士課程当時、現加西市教育委員会）、廣富亮太（文学研究科修士課程当時、現綾部市教育委員会）、市川勇樹（文学研究科修士課程当時、現宮崎市教育委員会）、芦塚晶太（文学研究科修士課程当時、現野洲市教育委員会）、吉兼千陽（文学研究科修士課程当時、現京田辺市教育委員会）
- 6 城館跡の地中レーダー探査は、金田明大氏（奈良文化財研究所）のご協力で実施し、その成果を本報告に収載いただいた。深く感謝申し上げたい。
- 7 調査に際して下記の方々、機関からご協力、ご教示を得た。記して感謝申し上げる。
京都市文化財保護課、（公財）京都市埋蔵文化財研究所、京都府教育委員会文化財保護課、奈良文化財研究所、ふるさと京北財團、京北の文化財を守る会、弓削自治会、（株）文化財サービス、（公財）辰馬考古資料館
石井敏雄（京北の文化財を守る会）、馬瀬智光・堀 大輔・家原圭太・熊井亮介（京都市文化財保護課）、小東武夫（故人）、青木政幸（辰馬考古資料館）、高乘政廣（弓削自治会）、人魯 亨（元京北町教育委員会）、福島克彦（大山崎町歴史資料館）、藤井 整（京都府教育委員会）、中塚 良（向日市埋蔵文化財センター）、宮原健吾・加納敬二（京都市埋蔵文化財研究所）、辻純一（文化財サービス）、菱田哲郎（京都府立大学）、山本浩樹・吉田賛司（龍谷大学）
- 8 調査参加者は下記の通りである。所属は当時である。
 - ・第4次（2014年度）
花熊祐基（修士2回生）、長谷屋楨（修士1回生）、朝井琢也、浅田洋輔、渡辺悠希（以上、国史学4回生）、清水真好（国史学3回生）、市川勇樹、井上亮一、浦上奈緒美、鳥越柚子、葉山一輝、廣富亮太、村山笑香、吉岡裕貴、吉田隆郁、渡辺健斗（以上、日本史学3回生）、赤尾隆彰（日本史学2回生）、末木香織（東洋史学3回生）、加藤雅徳、谷脇 匠、繩手希実子（以上、仏教史学3回生）、宇多直輝（日本語日本文学3回生）
 - ・第5次（2015年度）
神所尚暉（修士1回生）、清水真好（国史学4回生）、井上良一、廣富亮太（以上、日本史学4回生）、赤尾隆彰、上原 敏、大畑和紀、木村 歩、沢元義貴、田ノ岡 悠太、林 夏乃、堀川雄大（以上、日本史学3回生）、中畠夕衣、吉兼千陽（以上、日本史学2回生）、峯森有紀、村上奏衣（以上、日本史学1回生）
 - ・第6次（2017年度）
清水真好、廣富亮太、市川勇樹（以上、修士2回生）、吉兼千陽（日本史学4回生）、安地孝幸、板垣大嗣、今西啓介、大畑貴亮、尾崎愛斗、金子勇太、小尾成輝、鎌田朱音、後藤 琢、山村かの子、切東孝史、安武郁美、楠本里歌、斎間美奈、小西里歩、佐々木直緒、繁山あかり、下城友祐、吉田晴香、石川純歌、末次優衣、滝 祐也、竹中 大、谷口 萌乃香、田和秀一、近本 陽、津久井 啓太、中岡翔太、中島健人、中村有希、萩野愛梨、堀ひなの、三田 雅之、森岡志音、柳原未歩、山本瑞姫（以上、文化遺産学2回生）、出井和真、村上奏衣、山田 翔太郎、山田雄浩、吉川智也（以上、日本史学3回生）、速水千晶、大池美沙、山本未久（以上、日本史学2回）、西本拓朗（真宗学2回生）

・第7次（2018年度）

芦塚亮太、吉兼千陽（以上、修士1回生）青山桃子、綾井唯、石井紗代乃、大栗卓太郎、大橋恵莉、織田有弥子、加藤和花、加藤勇太、木股玖水、古賀礼華、小山智輝、榎原蓮乃、佐藤碩、志垣菜由、島村萌、善坊早翠、高野彩也夏、高橋さつき高橋直子、竹村美里、遠山茉以、徳田克毅、豊福隼也、中西彩果、中村有里、中山紗幸、永田丈一郎、難波優佳、西澤和真、西村早織、長谷川穂香、前田詞子、前田裕人、松井柚主梨、皆川陽奈、宮尾李、吉田美穂（以上、文化遺産学2回生）、

中島愛果、クルーズマティウ真（以上、日本史学3回生）、市場琢己（3回生）、竹田陽、田上あかり、高田智弘（以上、東洋史学3回生）

・電磁探査参加者（2019年度）

國下多美樹、木許守、清水真好、吉兼千陽、芦塚晶太、山田雄浩、永田丈一郎、西澤和真

9 整理作業は、龍谷大学考古学実習室で行った。なお、本報告書作成のためワーキンググループにおいて、下記の検討会を行った。なお、図面作成では前田詞子（文化遺産学専攻4回生）の協力があった。

9月26日 國下多美樹「下弓削鋼鐸について」

11月28日 宮尾李「上中城の活用と課題」

永田丈一郎「上中城跡の出土遺物」

12月5日 木許守・西村早織・加藤勇太「上中城の活用と課題ー2ー」

12月19日 熊井亮介「資料提示 上中城成立以前の歴史的環境」

1月23日 伊野近富「中世瓦器椀消費の地域性について」

10 本冊の執筆は、調査、整理担当者が行い、分担は下記に示す通りである。

國下多美樹：I部1章ー（1）、2章、II部1章 木許守：II部4章 伊野近富：I部1章（2）B、II部3章
花熊祐基：I部3章1 神所尚暉：I部3章2（1）-A 清水真好：I部3章2（1）-C

廣富亮太：I部3章2（1）-D 市川勇樹：I部3章2（1）-E 吉兼千陽：I部3章2（1）-B・G

芦塚晶太：I部3章2（1）-F 永田丈一郎：I部1章（2）A 加藤勇太・西村早織・宮尾李：II部4章
<寄稿>

金田明大（奈良文化財研究所）：I部4章 熊井亮介（京都市文化財保護課）：II部2章

福島克彦（大山崎町歴史資料館）：II部5章 中塚 良（向日市埋蔵文化財センター）：II部6章

11 本冊の編集は、木許守、花熊祐基の協力を得て國下多美樹が担当した。

表1 上中城跡調査次数一覧表

次数	調査期間	推定地	調査原因	内容	調査距離 (平米)	調査担当	調査補助	出土遺物	文献
第1次	1993.11～1994.1	郭1・Ⅱ・土塁・堀 内	範囲確認調査	試掘調査 測量調査	-	人魯亨			京北町1994
第2次	1994.11～1995.1	周辺	範囲確認調査	試掘調査	-	人魯亨			京北町1995
		北隣接地				奥村清一郎・石井清司・ 竹下士郎			
第3次	1995.10.19～12.22 (上中・太田遺跡)	全城	範囲整備	発掘調査	-				京都府センター1996
第4次	2014.8.6～8.12	全城	学術調査	測量調査	國下 多美樹	花熊祐基	-		龍谷大学2015
第5次	2015.8.6～8.12	郭1a	学術調査	発掘調査 測量調査	7	國下 多美樹	神所尚暉	1箱	龍谷大学2016
第6次	2017.8.14～8.22	郭1a	学術調査	発掘調査	27	國下 多美樹	市川勇樹 廣富亮太	1箱	龍谷大学2018
第7次	2018.8.20～30	郭1a・b	学術調査	発掘調査	16	國下 多美樹 木許守	芦塚晶太 吉兼千陽	1箱	龍谷大学2019

本文目次

I 部 上中城跡測量・発掘 調査報告	
1 位置と環境	1
(1) 地理的環境	
(2) 歴史的環境	
A 京北地域	
B 上中城跡周辺—弓削庄を中心に—	
(3) 周辺の遺跡と既往の調査	
2 調査に至る経緯	10
(1) 調査の経過	
(2) 調査の方法	
(3) 遺跡情報の公開	
3 測量・発掘調査の成果	12
1. 測量調査の成果	12
(1) 調査の方法	
(2) 測量調査の成果	
2. 発掘調査の成果	12
(1) 検出遺構	
A 郭Ⅰ中央部の調査（第5次トレンチ）	
B 郭Ⅰ北部の調査（第6次第3トレンチ）	
C 郭Ⅰ南部の調査（第6次第2トレンチ）	
D 郭Ⅰ西縁の調査（第6次第1トレンチ）	
E 郭Ⅰ土塁の調査（第6次第4トレンチ）	
F 郭Ⅱ A中央部の調査（第7次第1トレンチ）	
G 郭Ⅱ B中央部の調査（第7次第2トレンチ）	
(2) 出土遺物	
4 上中城跡の地中レーダー探査について	27
5 まとめ	31
(1) 上中城跡・上中太田遺跡との比較	
(2) 測量・発掘調査の総括	
II 部 上中城跡と京北の文化遺産	
1 下弓削銅鐸と京北の地域的特性	45
2 京北の古墳時代	51
3 京北町出土中世遺物と丹波型瓦器椀	59
4 京都市指定史跡 上中城跡の活用を考える	67
5 中世前期城館研究の問題点と上中城跡	79
6 図説 周山盆地西部・弓削川低地の地形と上中城跡の立地条件	93
抄録	
奥付	

図版目次

図版 1	(1) 上中城跡上空から北西を望む（ドローン撮影）	36
	(2) 上中城跡上空から北を望む（ドローン撮影）	
	(3) 上中城跡上空から南西を望む（ドローン撮影）	
図版 2	(1) 第4次測量調査風景	37
	(2) 郭Ⅰ中央部土壙調査前風景	
	(3) 郭Ⅰ中央部土壙調査前風景（北東から）	
図版 3	(1) 郭Ⅰ調査前風景（北西から）	38
	(2) 第5次郭Ⅰ中央部掘り下げ状況（北東から）	
	(3) 第5次郭Ⅰ中央部掘り下げ後（南西から）	
図版 4	(1) 第5次郭Ⅰ中央部トレーンチ遺構掘り下げ後（西から）	39
	(2) 第6次1トレーンチ郭Ⅰ土壙郭内裾部	
図版 5	(1) 第6次2トレーンチ郭Ⅰ南部（北西から）	40
	(2) 第6次3トレーンチ郭Ⅰ北部（北西から）	
図版 6	(1) 第6次4トレーンチ郭Ⅰ土壙断面（南東から）	41
	(2) 第7次1トレーンチ郭Ⅱa中央（北西から）	
	(3) 第7次2トレーンチ郭Ⅱb中央（北から）	
図版 7	(1) 出土遺物1（古代および以前、外面）	42
	(2) 出土遺物2（古代および以前、内面）	
図版 8	(1) 出土遺物3（中近世、外面）	43
	(2) 出土遺物4（中近世、内面）	

挿図目次

図 1	上中城跡の位置	1
図 2	上中城跡周辺の表層微地形（前田作成）	2
図 3	京北町域の遺跡分布図（永田作成）	4
図 4	周山古墳群（龍谷大学 2014）	5
図 5	周山庵寺の伽藍配置（李銀眞 2020）	6
図 6	丹波の中世城館分布図（永田作成）	6
図 7	既往の調査地（清水作成）	8
図 8	調査区配図	10
図 9	第5～7次調査・現地説明会風景	11
図 10	上中城跡測量図（第4次調査、花熊製図）	13
図 11	検出遺構分布図（清水調整）	14
図 12	郭Ⅰ・第5次トレーンチ平・断面図	15
図 13	郭Ⅰ・第6次第3トレーンチ平・断面図	16
図 14	郭Ⅰ・第6次第2トレーンチ平・断面図	17
図 15	郭Ⅰ・第6次第1トレーンチ平・断面図	18
図 16	郭Ⅰ・第6次第1トレーンチ土壙断面	19
図 17	郭Ⅱa・第7次第1トレーンチ平・断面図	20
図 18	郭Ⅱb・第7次第2トレーンチ平・断面図	21
図 19	上中城跡第5～7次遺物実測図	22
図 20	上中城跡地中レーダー探査 Profile 図	29

図 21	上中城跡地中レーダー探査 Time-Slice 図	30
図 22	繩文～弥生時代の上中城跡周辺の調査成果 S=1/800 (遺物 S=1/8)	32
図 23	奈良時代の上中城跡周辺の調査成果 S=1/800 (遺物 S=1/8)	33
図 24	中世の上中城跡周辺の調査成果 S=1/800 (遺物 S=1/8)	34
図 25	下弓削銅鐸実測図	45
図 26	下弓削銅鐸	46
図 27	下弓削銅鐸箱書	46
図 28	塔遺跡の弥生土器	47
図 29	近畿の弥生時代遺跡分布図	48
図 30	京北町の古墳分布図	52
図 31	京北地域及び周辺地域の主要古墳編年図	53
図 32	旧丹波国と主要遺跡	59
図 33	京北町出土の中世遺物	61
図 34	各種瓦器椀	63
図 35	口径・底径の対比	63
図 36	丹波型瓦器椀編年図	64
図 37	主要遺跡の丹波型瓦器椀・皿	64
図 38	草刈り作業直後の状況	69
図 39	周山城址特別展の様子	70
図 40	上中城跡環境整備イメージ図	72
図 41	大阪府池上曾根遺跡の環濠の復元	72
図 42	奈良県唐古・鍵遺跡の環濠の復元	72
図 43	史跡長岡宮朝堂院公園で配布されている簡易ゴーグル	73
図 44	文化財情報マップ	76
図 45	中世武士の所領支配の構造	80
図 46	革嶋城跡周辺地籍図(明治 31 年)	82
図 47	新見莊地頭方百姓谷内家指図(『東寺百合文書サ 399 寛正 4 年』)	83
図 48	勝龍寺近隣指図(『九条家文書』)	83
図 49	丹波大内城跡概要図	84
図 50	上ヶ市遺跡概要図	85
図 51	丹波上中城跡周辺地籍図(昭和前期)	87
図 52	犬飼遺跡概要図	88
図 53	下海印寺遺跡概要図	89
図 54	楠葉中之芝遺跡概要図	90
図 55	日置莊遺跡概要図	90
図 56	周山盆地周辺地域概観図	94
図 57	周山盆地西部、弓削川水系地形図・空中写真展開図	95
図 58	周山盆地西部、弓削川水系地形図地形条件図	97
図 59	周山盆地の景観と堆積物・断層露頭	98
図 60	上中城跡周辺地形条件図	99

表目次

表 1	上中城跡調査次数一覧表	Ⅲ
表 2	上中城遺物一覧表	24
表 3	京北町の古墳一覧(熊井論考)	53

I部 上中城跡測量・発掘調査報告

1 位置と環境

(1) 地理的環境

京北町の位置と地形条件 上中城跡の所在する京北町は、京都市の北西方、丹波山地を抜けて日本海につながる周山街道（国道162号線）を市内から車で1時間ほど走ったところにある。京北町は、もとは北桑田郡京北町であり、2005年（平成17年）3月に1町5村（周山町・細野村・宇津村・黒田村・山国村・弓削村）が京都市右京区に合併されて今日に至る。面積は 217.68km^2 である。

京北地域は、京都盆地の北西、600m～900mの定高性の丹波山地内にある。特に京北町周辺山地は、500m程度の一段低い尾根を持ち、周山盆地と呼ばれる谷底小盆地が形成されている。

2013年（平成25）に周山トンネルが開通したが、それまで京北町に向かう道は険しい山道を抜けていた。そして栗尾峠まで抜けた時に眼下に京北の小盆地がよく見えた。坂道を下りきってしばらく北に走ると、大堰川水系の弓削川を左にみながら周山の地に至る。ここには道の駅があつて休息をとることができる。ベンチに座って北東を見上げると周山中学校（現京都京北小学校）の校舎や運動場のある台地がよく見える。

この周山の台地が京北町の二つの小盆地を分けるランドマークとなっている。西側の小盆地は、蛇行する弓削川沿いに廻り、五本松の橋を渡ったあたりから東西400mほどの沖積平野が広がる田園風景となる。そして、周山から5km進むと亀岡につながる下中の交差点に至る。上中城跡はこの交差点の北西に位置している。

今一度、周山に戻り北東の桂川沿いに進んでみよう。小盆地は北東向きに連なるが、3kmほど進んだあたりから最大幅800mほどの沖積平野が広がり、川を挟んで田園地帯となる。さらに川沿いに道を東方に進めば左京区花背を経て滋賀県の湖西に至ることになる。この小盆地の中央付近には、山国村があつたが、1955年の京北町合併で消滅した。山国村の名は、平安京の袖に由来し、中世の山国荘に引き継がれた歴史的名であり、現在は山国神社に名を引き継ぐのみとなった。

上中城跡周辺の微地形 次に、上中城跡周辺の地形をみておく。上中城跡の西方は標高470mの山地から派生した低丘陵が迫り、以東は段丘地形で比較的平板な地割の乱れもほとんど見られない。一方、北方は標高370mの山地から派生した丘陵と同じ地形配列があるが、以南は各所で地形の乱れがあり、段丘面にやや複雑な地形が伴った

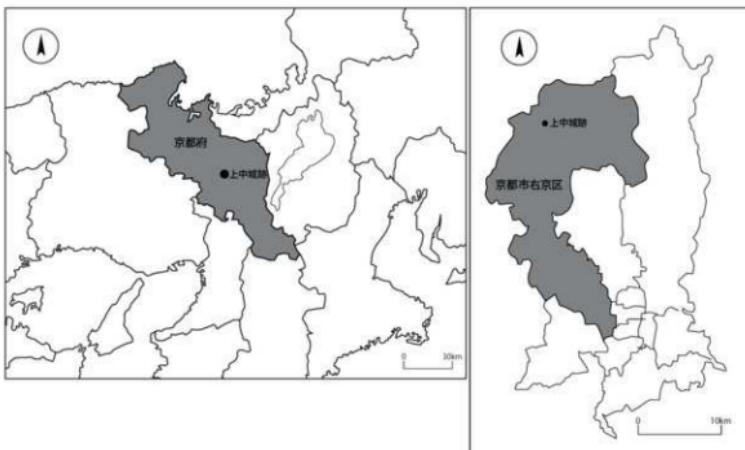


図1 上中城跡の位置



図2 上中城跡周辺の表層微地形（縮尺 1/7,500、京北町整備基本図 1/2,500 No.4-8に加筆、前田作成）

ものと推測できる。

まず、京都市部計画図(1/2500)をみると、一辺100m強の北東ー南西方位の方格地割が連続しており、地割方位が北で東に12度傾く古代の条里地割が現存していると推定される。一方、上中城跡は城館の長軸が北西ー南東方位で、周辺古代地割とは45度西傾斜した向きとなる。以上のやや複雑な地形の歴史を読み取る足掛かりとして、上中城のある弓削川上流右岸域の地形図から1mセンター図を作成してみた(図2)。まず、城館の北西側に谷があることが知られ、小さな扇状地が南東に向けて形成されているとみられる。さらに、城館北東には弓削川の埋没河川の存在は推測できる。明瞭ではないが、城館の東に小さな谷があり、この埋没河川とつながる可能性を推測できる。一方、城館の南方は、南西に向け緩傾斜しており地形変化はみられない。これを反映して、現行の水田用水は、城館の西側水田で北西の谷水から用水を確保し、東側水田は北東から用水を引いて確保している。すなわち、城館一帯は、水みちを考慮すると、概ね北西側と東西側に供給源があり、現代まで引き継がれていることが知られる。条里の斜向地割も水みちの影響を受けたものであろう。このように見ると、城館の主軸方位は、北西の谷地形と水みちを反映しているのかもしれない。(國下)

(2) 歴史的環境

A 京北地域

京北地域で最も古い可能性のものに、周山瓦窯跡の埋土から出土した後期旧石器時代に遡る可能性のあるチャート製片石器があり、1万年以前から京北地域での人の営みがあったことを示している。

縄文時代の明確な遺構は確認されていないが、愛宕山古墳から出土したサヌカイト剥片や土器片が縄文時代の可能性がある。また、東山遺跡で早中期から前期初頭の土器片、高梨遺跡で草創期の石槍が出土している。

弥生時代中期になると京北町においても、桂川や弓削川流域の平坦部に水稻耕作を行う集落が形成したと考えられており、1995年に発掘調査が行われた上中太田遺跡では方形の竪穴住居3棟や石庖丁が発見され、弥生時代後期から古墳時代にかけて存続したとされる。また、この時代の遺跡や遺物として、6次にわたって調査が行われている上中遺跡や1994年に発掘調査が行われた塔遺跡、下弓削出土とされる扁平鉢式四区架裟襷文の銅鐸などがある。

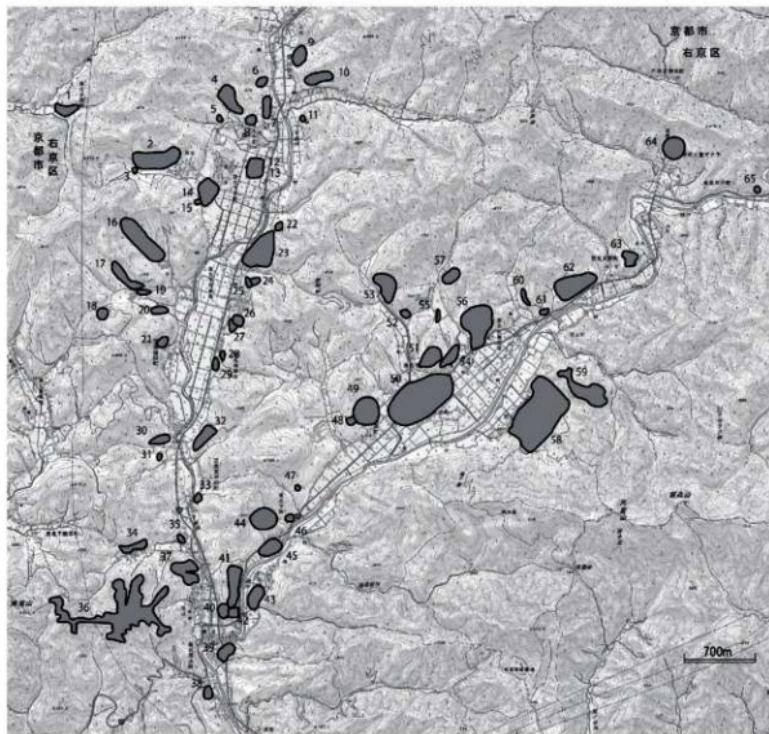
古墳時代には、京北町内に130基以上の古墳が確認され、その多くはのぼりお古墳など横穴式石室をもつ後期古墳である。後期以外と考えられている古墳として、古墳時代前期後半と推定されている周山1号墳(図4)や、割竹木棺直葬であることや3面の銅鏡や鉄製品などの副葬品から古墳時代前期後半～中期とされる愛宕山1号墳がある。

奈良時代の遺跡として1958年に石田茂作氏によって発掘調査が行われ、最近再調査された周山庵寺がある(図5)。東堂・塔・中堂・北堂・南門・西堂などから特異な伽藍配置が明らかになった。さらに、「□田部連君足」の銘文が施された平瓦や川原寺式の軒丸瓦が発見されており、中央政権との関係も注目される。さらに、周山瓦窯跡、祇園谷遺跡が発掘されており、周山瓦窯跡で作られた須恵器や周山庵寺で使用された瓦片などから、これらは同時代に機能していたとされている。さらに寺院・瓦窯・集落がセットで見つかることが珍しいことも注目される。

平安時代には弓削庄と山国庄が形成され、都へ木材を供給していた。特に山国庄は、明治2(1869)年に至るまで、禁裏御料として支配されたため天皇との繋がりが深い。このため光厳天皇陵や多くの経塚が残っている。また、塔遺跡から出土した近江系の縁釉陶器は、当該地域と近江国との繋がりを示すものとされる。

中世初頭の遺跡として今回調査を行った上中城跡がある。1993年と翌1994年の2次にわたり京北町による発掘調査が行われている。1次調査では城内の調査が行われ、城に関係する遺構として、北西に残る長さ20m、幅5m、最高所1.8mの土壘が掻き揚げ土壘であることや、箱型状の壠により囲まれていることなどが判明した。さらに、下層から古墳時代の住居が検出されるなど、前代からの土地利用があつたことも指摘されている。2次調査では、城外の調査が行われている。遺物は細片が多いながら弥生時代後期と考えられるものから連続的に中世まで出土している。

中世後期には宇津城を拠点とする宇津氏が権力を強め、遼乱など山国庄への影響を与えていたことが「御府記録」や「大納言山科時継卿記」など多くの文献に残っている。永禄十一年(1568)織田信長が上洛すると、明智光秀が丹波攻略を命じられた。これに宇津氏ら丹波衆は抵抗するも敗れ、天正七年(1579)に丹波攻略を果たした後に光秀が支配の拠点として築いた周山城がある。当城は石垣で斜面を囲い込むなど特異な縦張りをもっていることが注目されている。(永田)



1 九門塚跡群 2 馬古塚群 3 ふくながる塚群 4 宮の谷古塚群 5 上中塚群 6 間江夏路古墳群 7 保正古墳群 8 八幡宮裏山古墳群 9 ツバキ古墳群 10 阿江遺跡 11 中道寺跡 12 上中田遺跡
13 上中門跡 14 上中道跡 15 下川道跡 16 矢石遺跡 17 吉塚群 18 矢谷南吉塚群 19 天川南道跡 20 堀田口吉塚群 21 永林寺跡 22 福徳寺跡 23 下町御園跡 24 裕徳谷吉塚群 25 朝
谷門遺跡 26 じの谷古塚群 27 井崎道跡 28 井崎寺跡 29 大原遺跡 30 出石古墳群 31 五本松西遺跡 32 五本松遺跡 33 南空道跡 34 阿湧古道跡 35 大年塚群 36 高山城跡 37 八津良城跡 38 間江山家跡
39 東山遺跡 40 門脇道跡 41 鹿山古塚群 42 鹿山寺跡 43 国坂街道 44 斎谷古墳群 45 齋藤遺跡 46 斎谷奈古墳群 47 下町道跡 48 鳥居八幡道跡 49 鳥居吉塚群 50 鳥居山跡 51 塔城 52 塔村吉塚群 53
三宅谷古墳群 54 爰治山古墳群 55 阿佐山古墳群 56 北川江古道跡 57 阿佐古塚群 58 中江寺跡 59 中江城 60 麻衣寺跡 61 六ヶ道跡 62 大野古塚群 63 長池古塚群 64 岩照寺跡 65 金願寺跡

図3 京北町域の遺跡分布図（永田作成）

B 上中城跡周辺一弓削庄を中心の一

上中城のある京都市右京区京北町域下町の地は、平安時代中期の『和名類聚抄』によれば、丹波国桑田郡弓削郷の範囲であった。『続日本紀』元正天皇養老六年(722)三月十日条には、多くの人名が記されたなかに、丹波国韓鍛治首法麻呂に続けて、弓削部名麻呂がある。これら七一戸の姓は雑工のようだが、調べると関わりがないことがわかったので、公戸に入れたという。弓削部とは弓を製作する集団のことであるが、この実体の有無は別として、奈良時代の弓削郷に名麻呂なる者がいたようである。さて、次に弓削が文献にみえるのは、『某寺資材帳』天元三年(980)二月二日条(「金毘羅宮文書」「平安遺文」315)である。丹波国山国庄などとともに弓削一町との記載がある。鎌倉時代初期には弓削庄がみえる。一つ目は『吾妻鏡』文治二年(1186)二月二一日条である。要約すると「弓削庄への兵糧米の徵收を止めるようにと中納言が後白河法皇から命じられて、北条時政に言ったところ、時政は事情を聞いてから報告しますと返事をしたのであるが、この返答では法皇が怒るだろうと、しばらく保留にした」というのである。すなわち、前年の地頭の設置によって鎌倉幕府による米の徵收が始まることに対して、後白河法皇が反発した記事なのである。おそらく、この頃には弓削庄は長講堂領となっていたことが推定できる。長講堂領とは後白河法皇が院御所六条殿に営んだ持仏堂長講堂の所領で、建久二年(1191)には全国88箇所に及んだという。二つ目は『長講堂所領注文』建久二年十月条(「島田文書」「鎌倉遺文」556)によれば、弓削庄は元三雜事として御簾、豊、垂布など、

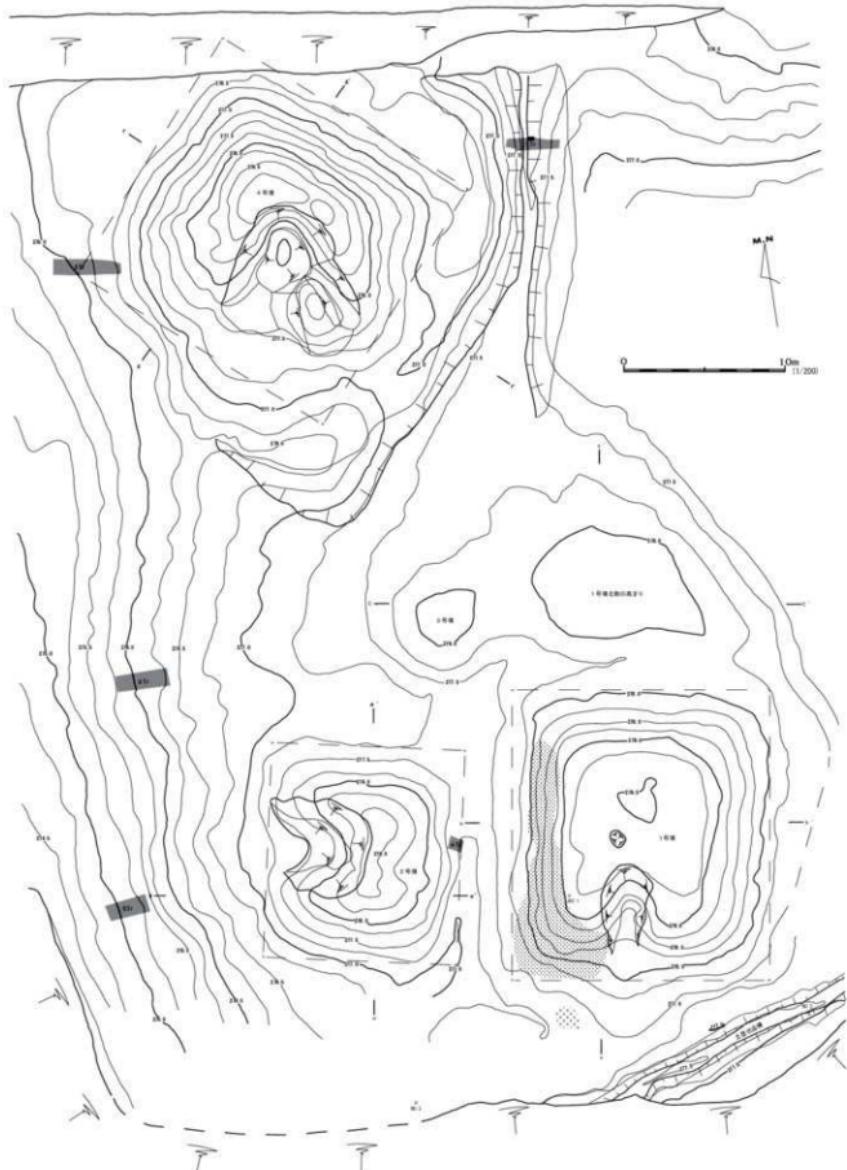


図4 周山古墳群（龍谷大学 2014）

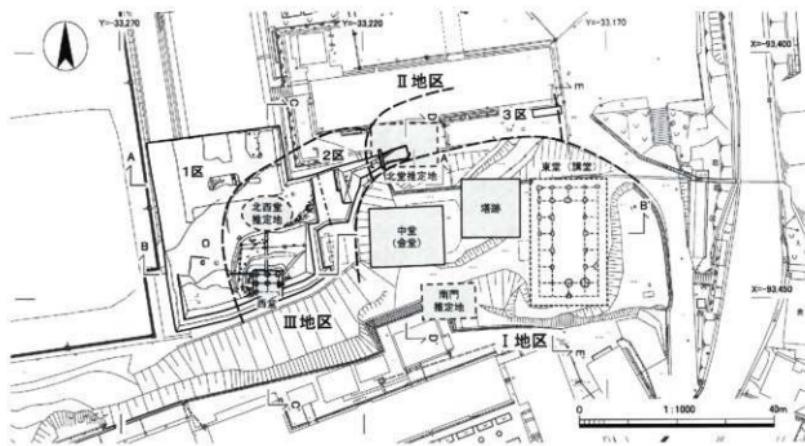


図5 周山庵寺の伽藍配置（李銀眞 2019・2020）

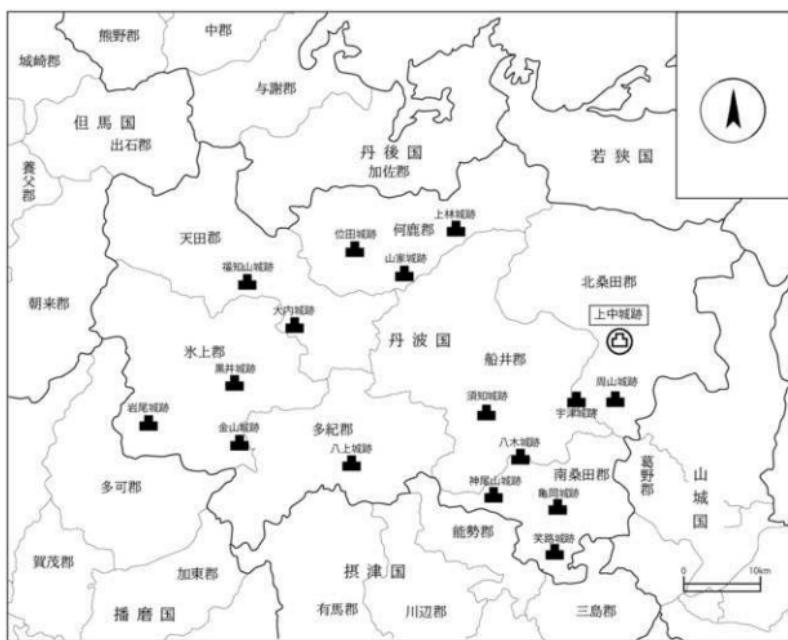


図6 丹波の中世城館分布図（永田作成）

節器物として布、続松（松明）、御菴のほか、門兵士、仕丁などを負担している。とくに兵士は5月下旬に5日、楊梅（小路）面と油小路面を警備しており、後白河法皇の信頼が厚かったことが窺われる。

以下、「日本荘園史大辞典」（吉川弘文館 2003）の弓削莊の項を参照して荘園の変遷をみてみよう。延元元年（北朝建武三、1336）に、後醍醐天皇は神護寺へ同庄を御祈禱料所として寄進した。同年、北朝側から公領とされたが、應永三年（1340）に光嚴上皇より、同庄地頭職が應心寺（天童寺）へ造営料所として寄進された。文和元年（1352）丹波出雲社上分と号して自代が遼乱していることが天童寺より訴えられている。應永十四年（1407）の『長講堂領目六』には本家職年貢として「七八寸木二百文、桐大船脚二千寸」とされ、弓削莊は袖年貢を負担していたことがわかる。また、嘉慶元年（1387）の天童寺分年貢は二百六十六石、四百二十三貫とされている。以上のことから、弓削莊は長講堂を本家とし、天龍寺も地頭職が毀損されるなど、本家、領家とも日本最大級の権力に寄進された荘園であったことがわかる。

つぎに、『京都府北桑田郡誌』（大正12年版 1923）を参考に、上中城の変遷をみてみよう。弓削村の項に「鳥羽天皇ノ天仁中、院ノ北面武士藏人太夫正平ノ裔孫九郎 国真ナル者、此ノ所一皆ヲ築造シ北國往来要衝ノ設備」としたという。すなわち、天仁年中（1108～1110）北面武士藏人太夫正平の子孫である九郎国真が城を築いたという記事である。この記事の信憑性を判断する材料はもないが、11世紀末～12世紀初頭に、平地に城館を築く例は京都府久御山町佐山遺跡（方形1坪規模、京都府センター 2003）、長岡京市下海印寺遺跡（方形約50m四方、京都府センター 2010）がある。前者は幅8mほどの堀はあるものの、土塁はなかったという。荘園を管理する政所屋敷として機能していたらしい。後者は外側に堀があり、内側には板塀を配置している。これらは、中世城館の始まりの直前の時期であり、高い土塁を持つものではない。

さて、上中城近辺には北側に弓削八幡神社がある。これはかつて產土社であったという。懸仏の裏面には「応永廿三年（1416）」、鶴口には大永五年（1525）と読めるものがある。いずれも京都市指定登録文化財であるが、弓削庄の地元の神社として中世には信仰を集めていたようである。また、弓削川の東岸には中道寺がある。弓削八幡神社の神宮寺であったようで、これらの寺社は中世弓削荘園の信仰の核を担っていたようである。（伊野）

（3）周辺の遺跡と既往の調査

まず、上中城跡周辺の遺跡について整理しておこう。まず、上中城跡が複合遺跡であることが明らかになったのは、1993年から始まる城館跡と周辺で行われた試掘範囲確認調査であった（人魯 1994、竹下 1996）。特に城館跡の北側の調査では、中世の遺物とともに弥生時代の竪穴建物、奈良時代の掘立柱建物などの遺構、遺物がまとまって確認され、集落跡の存在が明らかになった（上中太田遺跡）。また、上中城跡の南西約600mには、弥生時代から鎌倉時代の集落跡である上中遺跡がある。東西120m、南北200mの規模で周知されている。同遺跡では、弥生時代終末から古墳時代の竪穴建物、土坑群、旧河道、奈良時代の建物などを確認している（増田 1984・1985・1986、岡崎 1987・1988）。

一方、北500mの丘陵上に八幡宮裏山古墳群、宮の谷古墳群、彈正古墳群、西900m以西には烏谷古墳群など後期の群集墳がある。

以上から、上中城跡一帯は、弥生時代以降、中世まで断続的に人々の活動痕跡が集中して存在する地域であったということができる。

さて、上中城跡は、地表面に残された畦畔痕跡や限られた文献史料から城館跡として遺跡台帳に登録され周知されてきた。地表面に城館跡の痕跡1993年から1995年にかけて行われた範囲確認調査によって平安時代後期から室町時代後期の城館跡として周知された。

まず、第1次調査は、府営は場整備事業（弓削中南部地域農村活性化中環境整備事業）に伴う発掘調査として、城館跡を含む広域の測量調査とともに、土塁、郭内に3箇所のトレンチ（第一～三トレンチ）調査が行われた（京北町 1995）。測量調査によって、郭、土塁、堀の形状、規模が明確になった。土塁は、幅5m、高さ1.8mで北東から南西方位に約20mの規模を有すること、その構築状況が明らかになった。また、周囲の堀を一部調査して幅約4m、深さ1mの規模を有していたことが報告されている。郭内はピット群、中世遺物が出土している。

第2次調査は、城館の周囲の10箇所のグリッド設定して調査された（京北町 1995）。その結果、弥生時代の石製品（石臼）他、古墳時代前期から～近世に至る遺物が出土し、複合遺跡であることが判明した。

1 位置と環境

第3次調査は、第1・2次調査を成果を踏まえ、城館の北方を対象に 1500m²が調査された（京都府センター 1996）。その結果、弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴建物、古墳時代後期の竪穴建物、奈良時代の掘立柱建物他が確認され、上述した上中遺跡とともに一帯に相当規模の集落が存在したことが明確になっていた。

今回報告する龍谷大学考古学実習室・考古学研究室の一連の調査は、第4～7次調査として実施したものである。

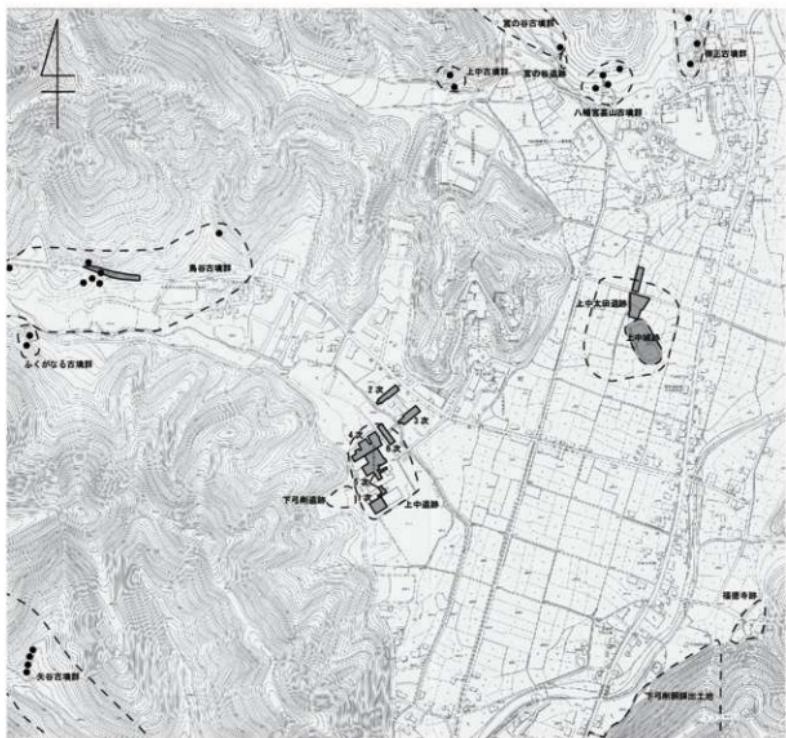


図7 既往の調査地 (清水作成)

引用文献（五十音・刊行年順）

- 石田茂作・三宅敏之 1959 「丹波国周山庵寺」『考古学雑誌』45-2、日本考古学会
- 馬瀬智光 2006 「京の城一洛中洛外の城郭一」(『京都市文化財ブックス第20集』)、京都市文化市民局
- 岡崎研一 1987 「上中遺跡跡第4次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第22冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 岡崎研一 1988 「上中遺跡跡第5次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第27冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 奥村清一郎・竹下土郎 1996 「上中大田遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第70冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 京北町 2005 『京北町五十年誌』
- 京北町教育委員会 1983 「愛宕山古墳発掘調査概報」(『京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』)、京北町教育委員会
- 京北町教育委員会・京都大学文学部考古学研究室 1981 「周山窯址 現地説明会資料」
- (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2010 「長岡京右京第 970・1007・1024 次・下海印寺遺跡」『京都府遺跡調査報告』第150冊
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003 「佐山遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第33冊
- 小池寛 1993 「頸園谷遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第52冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 小池寛 1995 「塔遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第64冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 竹下土郎 1996 「上中太田遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第70冊、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 津々池 憲一他 2006 『京都市内遺跡分布調査報告 平成17年度』、京都市文化市民局
- 野島永 1993 「上中遺跡跡第6次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第52冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 入魯亭 1993 「のぼりお古墳発掘調査概報」(『京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集』)、京北町教育委員会
- 入魯亭 1994 「上中城跡発掘調査概報」(『京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書第4集』)、京北町教育委員会
- 入魯亭 1995 「上中城跡第2次発掘調査概報」(『京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書第5集』)、京北町教育委員会
- 増田孝彦 1984 「上中遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第10冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 増田孝彦 1985 「上中遺跡跡第2次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第14冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 増田孝彦 1986 「上中遺跡跡第3次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第20冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 森浩一 1976 「周山1号墳」『日本考古学年報』27、日本考古学協会
- 李銀眞 2019 「周山庵寺」『京都市埋蔵文化財発掘調査報告 2018-6』、京都市埋蔵文化財研究所
- 李銀眞 2020 「遺跡報告 京都府京都市周山庵寺の発掘調査概要」『日本考古学』第51号、日本考古学協会

2 調査に至る経過

(1) 調査の経過

上中城跡は、南北約 90 m、東西約 95 m 規模の平安時代末～中世の城館である。過去、京北町教育委員会（2005 年 4 月 1 日京都市合併）によって 2 次の発掘調査（1993 年度・1994 年度）が行われている。その結果、平安時代～鎌倉時代の土塁と堀を構える城館跡であることがほぼ推定されるようになった。府下でも古い時期に成立した城館跡として注目され、1996 年に京北町指定史跡となり、その後京都市との合併により京都市指定史跡になった。この間に周辺の開発が進むが、本格的な調査は行われてこなかった。

この状況のもと、龍谷大学では、2012 年度より京北町域における地域史の解明を目的に埋蔵文化財の基礎調査を重ねてきた。2012・2013 年度は、周山古墳群の測量調査を行い、古墳群全体の現況図を作成した（龍谷大学 2014）。そして、2014 年度から上中城の調査を実施し、まず現状確認を行った（龍谷大学 2015）。

当大学による上中城跡の全体測量は、整備後の測量であったためか、過去の成果と微妙な誤差があり、周辺地形図と一致しない部分があるなど、基礎資料としての新たな検討課題を提供することとなった。さらに、考古学的調査による城館の年代決定は、厳密には検討の余地を残すことも指摘できた。

そこで、京都市文化財保護課と協議を重ね、既存調査区に重ねる形で最小限の調査区を設定し、遺構の確認及び既存調査区との位置関係を明らかにすることを目的に発掘調査を行うことになった。調査は基本順序を明確にしながら各時期における遺構を検出し、出土遺物から年代を明らかにすることに主眼を置き、郭内の土地利用についても追求する。そして調査は 2015 年度から 2017 年度の 3 箇年計画として実施し、総括整理期間を 2018 年度と位置づけ進めることにした。ただし諸般の事情から、2016 年度は実施できなかったので、以降は 1 年延期して進めてきた。

以下、年度別の調査経過を述べる。なお、郭は、城館全体を畦畔によって 3 区画される形状に基づいて、便宜上、北西から郭 I、郭 II A、郭 II B と呼称して述べる。

【2014 年度の調査（全域、第 4 次）】 整備後の城館全域を対象に現況の測量調査を行い、国土座標値を示した正確な図を作成した。

【2015 年度の調査（郭 I、第 5 次）】 1993 年度第 1 レンチにより遺構が確認されている地点と直交して長方形の調査区（2015-1 tr.）を設けて行った。旧調査区の遺構を再検出し、あわせて層位關係を踏まえた基本情報を入手すること、出土遺物から築造時期、機能、廃絶に係わる情報を得ることを目的とした。後世の削平が著しかったが、古墳時代前期の土壤 1 基、奈良時代のピット 1 基、鎌倉時代のピット 1 基を確認した。しかし、旧調査区の位置確定は、推定にとどまり、別地点での追加確認が必要と判断された。また、明確な築造時期についても課題を残すこととなった。

【2017 年度の調査（郭 II A および郭 I、第 6 次）】 1993 年度第 1 レンチで遺構の確認されていない地点と直交するように 2箇所の調査区（2017-1・2 tr.）を設け、郭 II A の利用状況を解明する。また、郭 I の調査レンチの位置確定と土塁の構築状況の詳細を明らかにするため、新たに 2017-3 tr. を設定する。既存調査区内及び新たな調査区内での遺構の有無を確認した。その結果、土塁は、堀側と郭側にそれぞれ核となる積み土を施す工法を採用して

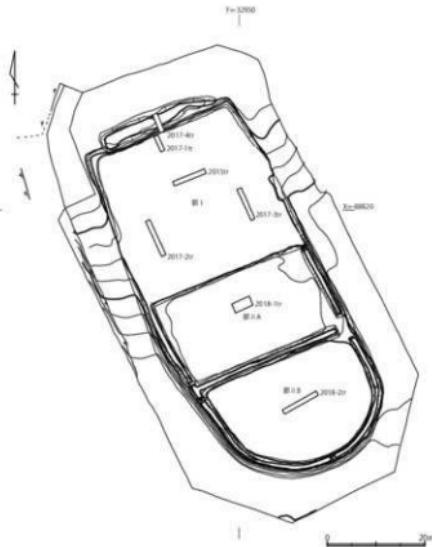


図 8 調査区配置図

いることが明らかになった。また、郭Ⅰに設けた2箇所の調査区では、1993年度の調査痕跡を認め、過去の調査位置を再確認できたとともに、中世の礫敷遺構、竪穴状遺構など土地利用を知る資料を入手した。なお、中世の朝鮮王朝陶器という珍しい資料が出土し、特筆される。

[2018年度の調査(郭ⅡB、第7次)] 1993年度第2・3トレンチにそれぞれ直交するように2箇所の調査区(2018-1・2 tr.)を設定した。郭ⅡA・ⅡBの利用状況を解明することを目的とする。調査の最終年度である。また、郭内及びトレンチの電子平板測量を実施した。なお、トレンチ内は手測りも行い成果を対比検討した。

(2) 調査の方法

第5～7次調査区は過去の調査と比較するため、京北町の調査区と一部重なるように設定した。上中城跡は史跡公園として整備され、調査地には芝が植えられている。そのため、芝を復旧できるようにブロック状に掘り出した。そして、遺構面まで掘り下げ最低限度の断ち割りを実施し、断面観察及び遺構検出を行い図面に記録、レベル・TS電子平板測量を用いて、正確な位置情報及び標高を記録した。記録作業終了後は、埋め戻しを行い元の状態に戻した。

なお、調査にあたっては、地元自治会、京都市文化財保護課と協議のうえ進めた。

(3) 遺跡情報の公開

第6次調査で京都市埋蔵文化財研究所の見学会の受け入れ、第7次調査で京北の文化財を守る会の協力で現地説明会を開催した。(図9)



(1) 第6次右京区小学生見学風景



(2) 第7次現地説明会風景



(3) 第6次 2017年度福島克彦氏現地指導



(4) 第6次 2017年度調査風景

図9 第5～7次調査・現地説明会風景

3 測量・発掘調査の成果

1. 測量調査の成果

(1) 調査の方法

測量調査は上中城跡の郭とその周囲の堀部分の測量を行った。上中城跡は周囲が宅地化しており、それを測量範囲の境界とした。郭と宅地の間は砂利を敷き詰めて舗装されており、堀の範囲と想定し調査を進めた。

測量調査は、平板とレヴェルを使用し、1/100 縮尺で郭や堀部分の測量した後、25cmコンターを入れ地形測量を行った。調査に必要な標高の算出は、四等三角点の「筒江」を使用した。国土座標に関しては、見かえしの基準点がなく、今回は用いていない。調査地には郭の長軸に任意の主軸を設け、その軸線上に4箇所測量杭 (KN1 ~ 4) を設置した。それを起点に、両側に測量杭 (KN7 ~ 12) を派生させて設置した。平板測量は以上の杭を用いて行った。調査終了後、上述の杭はすべて回収したが、見かえし杭として上中城の隣接道路に KN13・14 を設定した。

(2) 測量調査の成果

測量調査を行ったのは、前述のとおり郭と堀の遺構と周辺地形である。(図 10)

現存する郭全体の規模は短辺中央付近で長さ約 82 m、長辺中央付近で幅約 38 m の隅丸長方形状を呈する。長辺は両側とも直線状であるが、短辺は南東辺が円弧を描くのに対し、北西辺は直線的で土塁を有する。また、郭の長辺中央より南東側と南東側短辺には、両側とも畔状の高まりがあり、その頂部から郭の外側は約 1 m 程度低い。特に南東隅側は郭全体やその外側も含めて最も標高が低くなる。郭内には土塁の南東側下端から南東へ約 30 m と、そこからさらに約 20 m の場所に土塁と平行する高さ 0.5 ~ 1 m の畔がみられる。後者の幅は 2.5 m である。畔には數か所溝状の落ち込みがあり、水田として利用されていた際の水口と考えられる。北西辺は土塁の最高所で標高 278.913 m、土塁の下端付近で 277.670 m 前後に對し、南東端は畔の上場が 277.200 m 前後、北西の下場が 276.900 m 前後、南東の下場が 276.100 m 前後と、北西側から南東側へと緩やかに下っていく。

郭内部は前述した土塁と平行する畔で三分割されており、北西から郭 I、郭 II A、郭 II B とした。郭 I と郭 II A には高低差が認められるが、郭 II A と郭 II B は畔で分割されているが、高低差は認められないため、一つの郭と捉えた。郭 I は長さ約 37 m、幅約 35 m、標高 277.700 m 前後、郭 II A は長さ約 19 m、幅約 38 m、標高 277.200 m 前後、郭 II B は長さ約 26 m、幅約 37 m、標高 276.900 m 前後である。郭 I が最も標高が高く、土塁を備えていることから、中心施設があった場所と推定される。

土塁は、現存長 25.2 m、下端幅 5 m、上端幅 2.5 m、高さ 1 m 前後であり、ところどころ拳大の礫が露出している。京北町教育委員会が行った発掘調査(以下、京北町報告)でも、構築土中に拳大の礫を含んだ搔き上げ土塁とされており(京北町教育委員会 1994・1995)、露出している礫は土塁に伴うものと考えられる。

堀と推定される箇所は、現在幅 7.5 m 前後の砂利敷き道路となっていて詳細は不明であるが、京北町報告では幅 5 m、深さ 1 m の堀と報告されており、道路幅がそのまま堀の範囲を示すものではないと考えられる。郭と同様に同じく北西側の標高が高く、南東側へと緩やかに下降する。(花熊)

2. 発掘調査の成果

(1) 検出遺構

A 郭 I 中央部の調査(第 5 次トレント)

2015 年度の調査は、1993 年度に調査された郭北部の第一トレントのうち、堀、土塁、郭内外を貫通させた南北トレント(旧調査区)の推定位置と交差する形で東西方向の調査区を設定した。調査の目的は、a) 旧調査区の遺構を再検出し、層位関係を踏まえた基本情報を入手により、既存調査との比較分析を行うこと、b) 出土遺物から築造時期、機能、廃絶に関わる情報を得ること、の 2 点であった。なお、土塁部分の追加測量も実施した。

調査区は、東西 7m、南北 1m の東西トレントである。調査は人力による掘削により表土(第 1 層)から開始した。第 1 層は、よく締まった黒褐色礫混じり土層で、公園整備に伴う芝生と植土である。掘り下げは、現状復旧可能なようにブロック状に切り出しながら進めた。第 2 層は砕石(パラス)層である。調査区全域で確認し、公園整備に伴

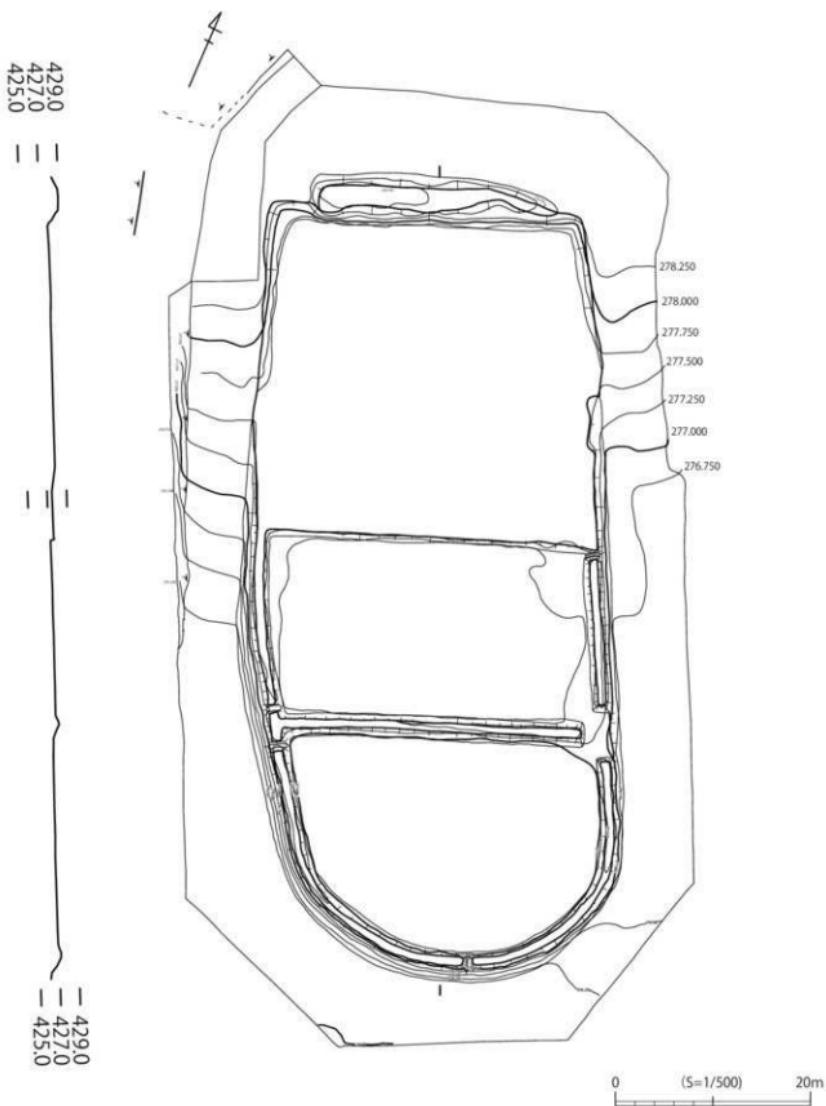


図 10 上中城跡測量図（第4次調査、花熊製図）

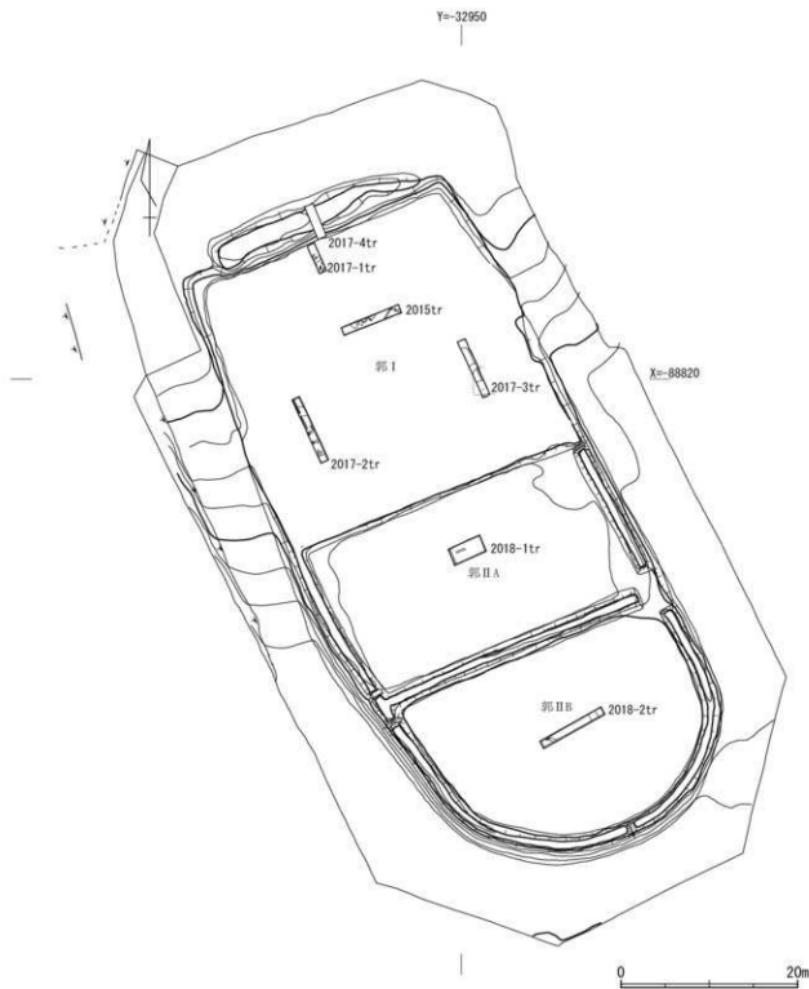
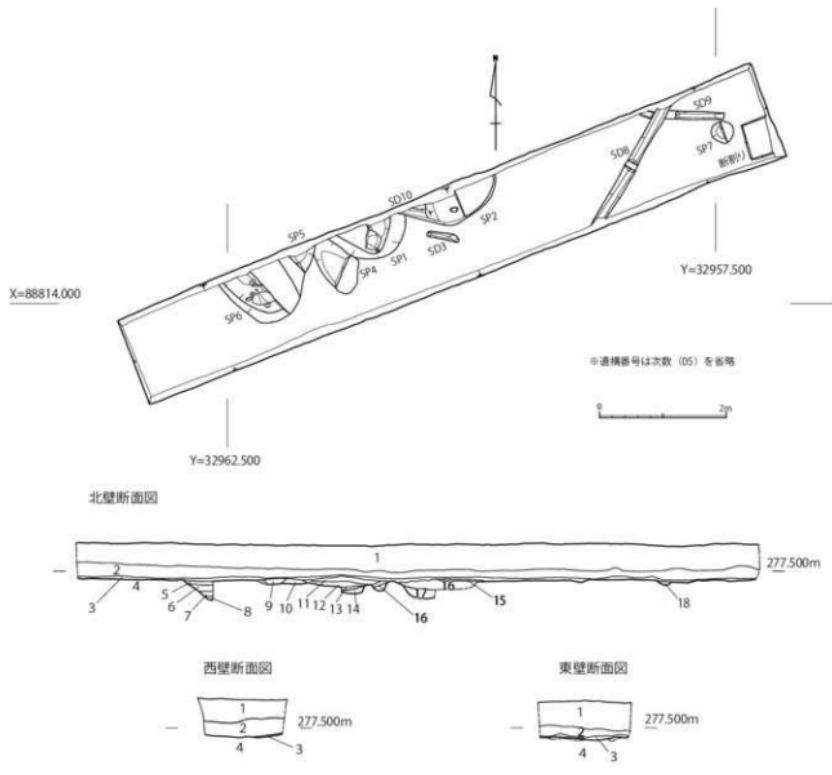


図 11 検出遺構分布図（清水調整）

う排水層であると考えられる。第3層は黒褐色シルト層で、層厚0.01~0.03m。公園造成前まで利用されていた耕作土であると推定される。ほとんど本来の層厚をとどめていないので、造成前に削平された可能性が高い。第4層はよく締まった明赤褐色粘質土である。段丘相当層で地山である。遺構は、すべて第4層上面で検出した。遺構は、出土遺物と層相から古墳時代から近世以降の各時期の所産と推定した。なお、調査は層位ごとに掘り下げを行い、写真記録、縮尺1/20の平・断面図の記録を行った。基準点は2014年度龍谷大学調査ポイント(GPSデータ)を使用し、



- | | |
|--|---|
| 1 7SYR3/2 黒褐色、緻混じり（表土） | 10 2SYR3/1 暗赤灰色シルト層、SYR6/8 棕色ブロック含む (SP0504 墓土) |
| 2 バラス層（盛土） | 11 7SYR3/1 黒褐色シルト層、7SYR6/8 棕色ブロック (SP0501 墓土) |
| 3 7SYR3/1 黒褐色シルト層（耕作土） | 12 7SYR4/1 暗赤シルト層灰化じり (SP0501 墓土) |
| 4 SYR5/8 明赤褐色、2SYR2/1 黒色土（地山） | 13 SYR3/4 暗赤褐色粘質土 (SP0501 墓土) |
| 5 2SYR3/4 暗赤褐色緻混じり、7SYR6/8 棕色ブロック含む粘質土 (SP0505 墓土) | 14 2SY4/1 黄灰土疊合土、10YR6/8 明黄褐色ブロック含む (SP0501 墓土) |
| 6 5層とほぼ同じ、5層より硬、ブロック多く含む (SP0505 墓土) | 15 2SYR4/4 赤褐色疊合粘質土 (SP0501 墓土) |
| 7 2SYR2/3 極端赤色緻混じり、7SYR6/8 棕色ブロック含む粘質土 (SP0505 墓土) | 16 10YR4/1 暗赤色疊合粘質土 (SP0502 墓土) |
| 8 7層とほぼ同じ、7層よりブロック少ない粘質土 (SP0505 墓土) | 17 10YR3/6 暗赤色緻混じり、7SYR6/8 棕色混じり堆土層 (SP0502 墓土) |
| 9 2SYR3/1 暗赤褐色シルト層 (SP0506 墓土) | 18 2SYR2/1 黒褐色粘質土、7SYR6/8 棕色ブロック含む (SP0508 墓土) |

図12 郭I・第5次トレンチ平・断面図

3 測量・発掘調査の成果

光波を用いて開放トラバースで新点の国土座標を求めた。断面図については標高 278.000m に水系ラインを設定し図化した。また、土壠については縮尺 1/100 の地形測量の再測量を行った。調査終了後、填土しながら埋戻しを行い、旧状に復した。

基本層序は、調査区の上位から第 1 ~ 第 4 層に区分した。第 1 層 黒褐色疊混じり層（表土）0.2 ~ 0.3m、第 2 層 バラス層（盛土）0.06 ~ 0.15m、第 3 層 黒褐色シルト層（耕作土）0.01 ~ 0.03m、第 4 層 明赤褐色粘質土（段丘相当層：地山）である。

検出遺構は、遺構はすべて第 4 層上面で検出した。

〔ピット SP0501〕 調査区中央で検出した楕円形のピットである。東西 0.8m、南北 0.4m 以上となり、南半部のみの検出である。深さは、0.2m を測る。ピット中央南寄りに径 20cm 程度の礫（砂岩）が露出していた。礫は、全体的に丸みを帯びている。埋土は 4 層に分けられる。第 1 層は黒褐色シルト、第 2 層は灰色シルトであることから、既存調査区の埋戻し土である可能性が高い。礫石建物の存在が指摘できる。

〔ピット SP0502〕 SP01 の東側で検出した楕円形のピットである。東西 1.0m、南北 0.4m 以上となり、南半部のみの検出である。深さは、0.2m を測る。埋土は 2 層に分けられ、上層は褐灰粘質土で、0.1m の厚さで覆われていた。既存調査区の二次堆積土である可能性が高い。下層は、焼土混じりであり、古墳時代前期の古式土器が出土した。炉など火所に関連する施設の存在が想定される。

〔溝 SD0503〕 SP02 の南で検出した溝状遺構である。東西 0.35m、南北 0.06 ~ 0.08m。埋土は単層で、既存調査区の埋戻し土であろう。遺物の出土はなく、時期は明らかではない。

〔ピット SP0504〕 SP01 の西側で検出した楕円形のピットである。東西 0.5m 以上、南北 0.4m。埋土は 2 層に分けられ、ともに極暗赤褐色シルトで、炭・礫を含む。下層は、上層よりも橙色ブロックが多く見られる。出土遺物はなく、時期は明らかではない。東肩が SP 1 に切られており、それより時期は上のようであろう。

〔ピット SP0505〕 SP04 の西側で検出した楕円形のピットである。東西 0.4m 以上、南北 0.5m 以上。深さは 0.06m であり、後世の削平を受けている。また、西半は後述する SP06 に切られている。ピット内から奈良時代の須恵器杯蓋が出土した。奈良時代の所産であろう。

〔ピット SP0506〕 SP05 の西半を切り、その西側に位置する楕円形のピットである。東西 0.7m、南北 0.6m 以上。深さは、0.2m をはかる。掘り下げ後すぐに径 17cm 程度の礫（チャート）が露出し、周囲には径 5cm 程度の礫が 10 個程度確認した。大きな礫は礫石、小さい礫は根固め石に相当するものであろう。ピット内から、13 世紀後半に相当する瓦器焼（高台部）が出土した。

〔ピット SP0507〕 調査区東側で検出した、径 0.25m の円形ピットである。深さは、0.04m をはかる。単層であり、遺物の出

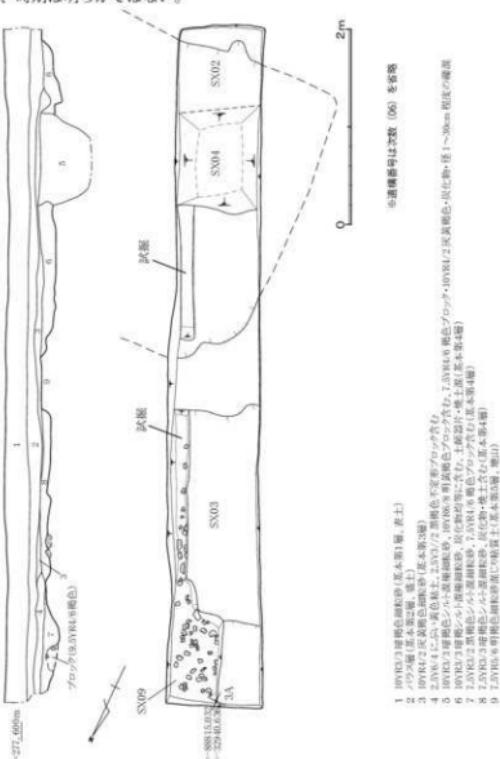


図 13 郡 I・第 6 次第 3 トレンチ平・断面図

土もなく時期は明らかではないが、層相から近世以降であると推定される。

〔溝 SD0508・09〕 調査区東側で検出した素掘りの溝群である。SD08は、検出長1.3m、幅0.1m、深さ0.04m、SD09は検出長0.8m、幅0.1m、深さ0.04mである。出土遺物はなく、時期は不明である。

〔溝 SD0510〕 SP02に取り付く素掘り溝である。検出長0.3m、幅0.1m、深さ0.1mをはかる。SP09と同時期の可能性が考えられるが、出土遺物はなく詳細は明らかでない。(神所)

B 郭I 北部の調査（第6次第3トレンチ）

基本層序は、調査区の上位から第1層～第5層に区分した。第1層 暗褐色細粒砂（表土）：0.2～0.3m、第2層 バラス層（盛土）：0.06～0.16m、第3層 灰黄褐色細粒砂：0.01～0.1m、第4層 暗褐色シルト混じり細粒砂：0.10m、第5層 明褐色粘質土（地山）である。

検出遺構は第4層上面で検出した。

〔竪穴状建物 SX 0602〕 調査区中央から南端にかけて

検出した推定方形の竪穴建物とみられる遺構である。

中央部を1994年度調査坑によって失われている。方形プランとみると、一辺約3.2m、深さ0.16mである。埋土は炭化物を均等に含む暗褐色粘質土で、土師器片と炭化物が混じる。遺物は陶器（常滑）・瓦器片が出土している。

〔竪穴状建物 SX 0603〕 調査区中央から北側にかけて検出した竪穴建物とみられる遺構である。深さは0.1mを測る。埋土は暗褐色で焼土と炭化物を含む。下面からはSX9より続くとみられる礫が検出されている。遺物は出土していない。

〔調査痕跡 SX0604〕 調査区南側で検出された現代概乱である。南北1.1m、深さは0.5m以上を測る。埋土は暗褐色土で、明黃褐色・褐色・灰黃褐色ブロックや径1～30cmの礫を含むことから、1993年度調査の際の遺構掘削跡とみられる。

〔集石遺構 SX0609〕 調査区北端で検出した集石遺構である。深さは0.16mを測る。礫の大きさは径3～10cm程度。埋土は固く締まり、径40cm程度の褐色ブロックを含む。遺物は古墳時代の土師器が出土した。埋土の上からにぶい黄色の粘土で蓋をしたような様相を呈し、この粘土の上面からは瓦器片が出土している。集石はSX0603まで連続するとみられ、これら二つの遺構の関連について今後詳細に検討する必要がある。

(吉兼)

C 郭I 南部の調査（第6次第2トレンチ）

層序は、次の通りである。第1層 黒褐色中粒砂（表土）約0.2m、第2層 バラス層（盛土）0.04～0.12m 第3層 暗褐色細粒砂（耕作土）0.01～0.04m 第4層 褐色シルト質細粒砂0～0.1m 第5層 明褐色粘質土（地山）

検出遺構は、第4層上面で検出した。

〔集石遺構 SX 0605〕 検出規模は東西0.6m、南北0.8

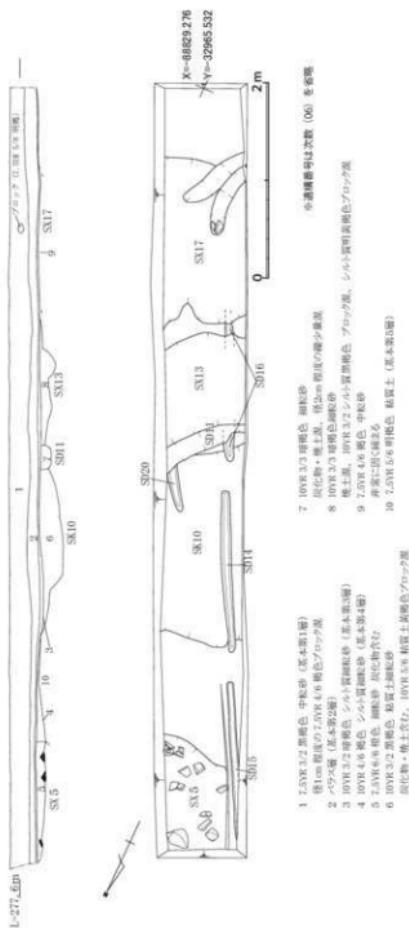


図14 郭I・第6次第2トレンチ平・断面図

3 測量・発掘調査の成果

～1.2m、深さ0.1m以上である。礫は小型のものから人頭大のものまでばらつきがある。上面から室町時代の青磁片が出土している。SX5付近を精査中に、室町時代の土師器片と平安時代中期（10世紀）の綠釉陶器片が出土している。また、3トレンチの北端でも同様の集石遺構が検出されている。これらの集石遺構は城郭の方位に即して土塁側へ展開しているが、同一の性格の遺構であるかはわからない。

〔溝SD0614・15・16・20〕調査区北半部で東西約0.1m、南北約1.8mからなる溝を4条検出した。いずれの溝も3層系の土が入り込んでいる。SD0614・15・16に関しては方位を共有している。SD0620はSD0611に切られてしまい、溝のすべてを検出することはできなかった。遺物としては、SD0614から火舎と考えられるものや須恵器杯身が出土している。

〔調査痕跡SX0617〕トレンチ中央南寄り地点の3層直下に、南北におよそ1.6m程度のSX0617を検出した。全体が非常に硬く締まっており、現代の西側からの流水痕が2条認められる。また、この遺構は東西方向にトレンチ外へ及ぶことからも、おそらく1993年に調査された際の痕跡であると考えられる。（清水）

D 郭I西縁の調査（第6次第1トレンチ）

調査区の上位から第1～第5層に区分した。第1層 暗褐色疊混じり層（表土）、第2層 暗褐パラス層（盛土）、第3層 黒褐粘質土層（耕作土）、第4層 暗褐粘質土層・明赤褐シルトブロック含む（焼土）、第5層 褐粘質シルト層（地山）である。

1トレンチは層位としての第4層が存在しないため、遺構はすべて第5層上面で検出している。

〔歎溝SX0601a・SX0601b〕第3層系土を埋土とする不規則な形をしている凹みである。5条あり、SD0606を挟んで西側をSX0601a、東側をSX0601bとした。第3層が耕作土であることから、耕作中の鶴溝と推定した。遺物は出土していない。

〔溝SD0606〕第4層系土を埋土とする溝である。溝断面はU字形で、土堀とほぼ同じ方位に走行する。規模は幅0.4m、深さ0.16mである。遺物は溝底面から鎌倉時代の土師器1点、細片のため時期不明の土師器片1点出土した。郭内の排水溝として利用していたと考えられる。

〔ピットSP0607・08〕SP0607は径約0.16m、深さ0.05m、SP0608は径0.3m、深さ0.1mである。両ピットの間隔は0.5mである。遺物は出土していない。

E 郭I土塁の調査（第6次第4トレンチ）

〔土塁跡〕第1トレンチにおいて上面、第4トレンチにおいて断面を確認した。今次調査した範囲の土塁の幅は、上面幅1.7m前後、下面幅3.6m以上、高さ0.95m以上となる。1994年度調査では、幅5mと記録されているので、

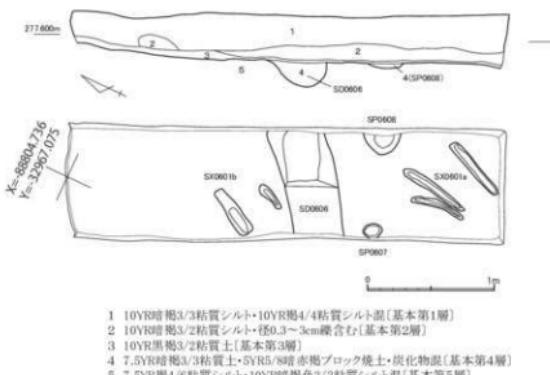


図15 郭I・第6次第1トレンチ平・断面図

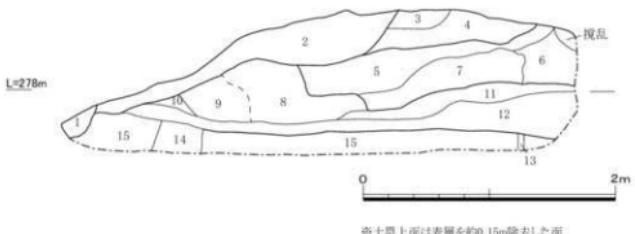


図16 郭I・第6次第4トレンチ土壌断面図

未調査となる堀側にさらに1.4mほどの広がることになる。第4トレンチは、1994年度調査区西半部を再調査したことになる。土壌は、断面形状を呈し、主に暗褐色系シルトと礫質土を基質とした構築土によって構成される。この土壌の断面を確認し、構築過程を大きく6つの段階に分けた。古い段階からa~fと呼称する。

aは土壌構造前の段階（断面図13・14・15層）、bは土壌外側の核づくりの段階（11・12層）、cは土壌内側の核を作る段階（8・9・10層）、dは2つの核に土を流し込む段階（5・6・7層）、eは土壌上部が平らになるよう土を積む段階（3・4層）、そしてfは後世の積み直しである（1・2層）。

まずaは、基本第5層（15）に相当する。この上面で凹み（炭化物混）が2箇所確認された（13・14層）。5層上面は北に向かって傾斜し、土壌構築後、上面から流入する雨水等を傾斜を利用して堀側に排水するために設けた造作と推定される。将来、土壌構築年代の絞りこみと関連して、炭化物の年代測定など科学分析を行わなければならない。

bは堀側が盛り上がり、郭側に向かうほど平らな堆積となる。このことから堀側から土を積み上げて核を作り、内側に流すように造成されたと推測した。また地山直上の層である12層は、土壌断面の他の層と比べ粘性が強い印象を受けた。意図的に粘性の強い土を搬入し堀側への土壌流出を防ぐための造作とみられる。

cは他の段階に比べ全体的に礫が多くみられる。また9層の土壌に一番近い場所にある礫は斜めに縦使いされている。このことからBで構築した盛土よりもさらに大きく土壌をつくるため、また土壌郭側にもなだれ込まないような土留めとして、もう一つの核を作ったと考えられる。

dはbの上から左下がりで土を積み重ねている。2つの核を埋めるように土が入っている。

eはfによって全体がわからないものの、地山と平行に積まれている。土壌の仕上げ作業と考えられる。

fは層相から新しい段階と推定されるもの。2層は近世～近代の耕作時に土壌郭に崩れたものを搔き揚げて、積みなおされたものと考えられる。なお、1層は基本層序第1層の公園整地土である。

以上、土壌の積み土は、堀の掘削土を搔き揚げて利用した、いわゆる「搔き揚げ土壌」と推察でき、掘り側のみならず、郭側にも核をつくることに本土壌の特色がある。なお、礫は、河床礫で他所からもたらされたものと推定される。

（國下・市川）

F 郭II A中央部の調査（第7次第1トレンチ）

郭II Aのはば中央部に南北2m、東西4mの規模で設定した。基本層序は、第1a層：褐色細粒砂（耕作土）、第1b層：にぶい黄褐色細粒砂（耕作土）、第2層：褐色中粒混粘質土、第4層：明褐色土層（地山）である。

第1トレンチで検出した遺構は現代の耕作に伴う溝SD0703のみである。溝SD0703は1層系の土を埋土とする溝である。幅は0.16m、深さは0.15mである。耕作の鶴溝と推定している。遺物は出土していない。

また、トレンチの東端から西に2.2m付近で1993年度の京北町教育委員会による発掘調査のトレンチの肩らしき

3 測量・発掘調査の成果

1 a 褐 (10YR4/4) 細粒砂 (耕作土)
 1 b 暗褐 (10YR3/3) 細粒砂 (しまりが強い)
 2 褐 (10YR4/6) 粘土 (径 20 ~ 30mm 程の砾を含む)
 4 明褐 (7.5YR5/6) シルト (地山)

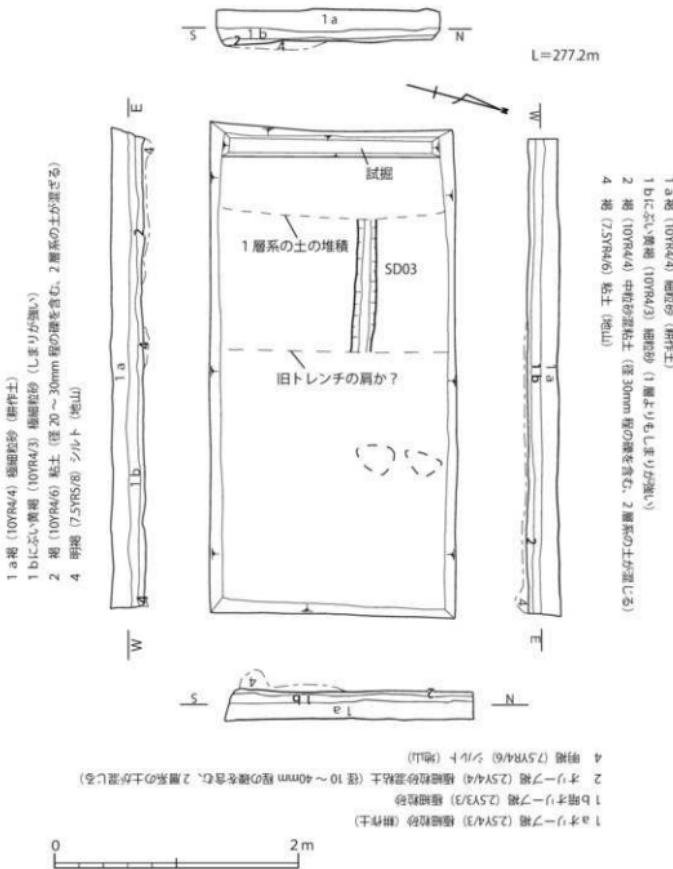
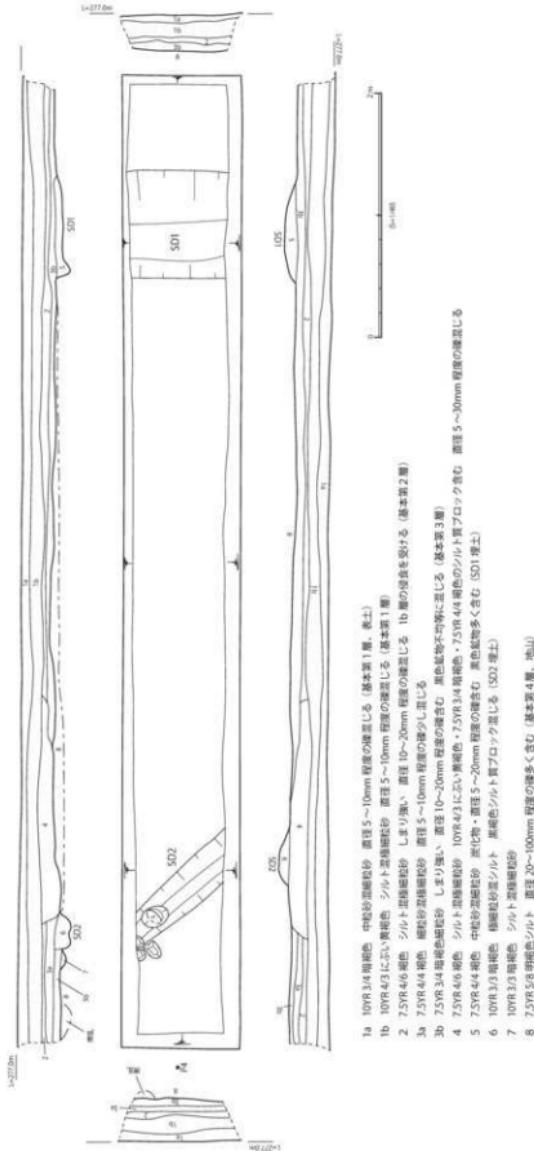


図 17 郭Ⅱa・第7次第1トレンチ平・断面図



3 測量・発掘調査の成果

ものを検出したが、壁面の土層で検討をおこなった結果、確定するにいたらなかった。(芦塚)

G 郡II B 中央部の調査(第7次第2トレンチ)

基本層序は、調査区の上位から第1層～第4層に区分した。第1層 暗褐色細粒砂(表土) 0.12～0.2m、第2層 褐色粘質土 0.02～0.08m、第3層 暗褐色細粒砂 0.04～0.12m、第4層 明褐色粘質土(地山)である。検出遺物

[溝SD0701] 調査区東側の4層上面で検出した。深さは0.1m程度である。西側の肩ははっきりと検出されたが、東側の肩はなだらかで、やや不明瞭であることが特徴的である。埋土は炭化物や黒色鉱物を含む褐色細粒砂で、遺物は土器師の細片が十数点出土している。

[溝SD0702] 調査区西側の第4層上面で検出した。深さは0.14mを測る。北側に柱穴上の遺構が検出され、壁溝の様相を呈す。埋土は暗褐色シルトで、弥生終末期から古墳時代前期の土器が出土している。上面に1層系の土が混じるが、これは1993年度の調査で上面を少し掘り下げたためであると考えられる。

[1993年度調査痕跡] 平面で明確に検出することはできなかつたが、壁面で1993年度トレンチの痕跡を確認することができた(断面図4層)。(吉兼)

(2) 出土遺物

上中城の調査で出土した遺物はコンテナで各調査1箱ずつの計3箱が出土した。遺物は細片が多く実測できるものは少なかった。実測できない遺物については、遺物一覧表にまとめた。

(1)は打製石器である。表面は剥離による調整で、b面は大きな剥離が見られ、aは細かい剥離が多い。長さ1.6cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ0.403gである。第7次1トレンチB層から出土した。

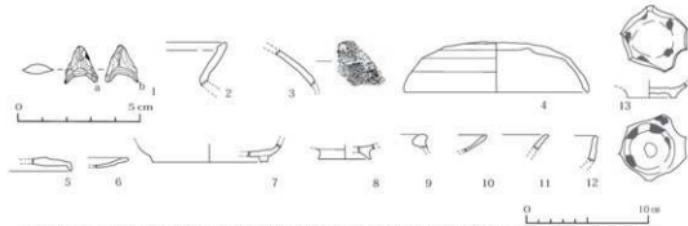
(2・3)は古式土器師である。ともに胎土に3～5mm程度の礫を多量に含む。(2)は甕の口縁部である。布留式と思われる。第6次2トレンチ1層から出土した。(3)は甕の一部で、外面に叩きの痕跡が残る。第5次ビットSP2(SP0502か?)下層から出土した。

(4)は須恵器環蓋である。内面に回転ロクロナデ、外面上に回転ヘラケズリの調整が見られる。器高4.1cm、口径15.1cmを測る。MT85型式と見られ、6世紀後半のものである。第6次3トレンチSX4から出土した。

(5)は須恵器環蓋である。口縁部から体部が残存しており、断面は外面上の体部から口縁部にかけて凹みがあることからA形態のものと思われる。内面にナデ調整、外面上の一部に自然釉が見られる。奈良時代のものと思われる。また、内面には黒色物質があり、科学分析の結果、転用窯と判明した。第7次1トレンチ1層から出土した。

(6)は土器師皿である。口縁部から体部にかけて残存しているが、表面の摩滅が激しい。京都系の「て」の字状口縁の初期のものとみられ、10～11世紀頃のものである。第6次2トレンチ4層SX4から出土した。

(7～9)は須恵器である。(7)は环身Bの底部高台で、底径8.4cm、高台の高さは0.5cm程度である。高台底部は四状の窪みがある。第6次2トレンチ南端1層から出土した。(8)は瓶子の底部で、内外面ともに回転ナデによる調整が見られる。底径2.1cm、高台の高さは1.2cm程度である。第7次1トレンチ旧トレンチから出土した。(9)は鉢の口縁部である。口縁は外側に向かい大きく膨らんでいる。篠窯産の鉢CかDと思われる。第7次2トレンチ2



(1) 第7次1トレンチ1B層 (2) 第6次2トレンチ南端1層 (3) 第5次ビットSP2下層 (4) 第6次3トレンチSX4 (5) 第7次1トレンチ1層 (6) 第6次2トレンチ4層北端下 (7) 第6次2トレンチ南端下 (8) 第7次1トレンチ旧トレンチ (9) 第7次2トレンチ2階上面 (10) 第7次1トレンチ北町1トレンチ
 (11) 第6次2トレンチ4層北端下 (12) 第7次2トレンチ2階下 (13) 第6次3トレンチ南1層
 (14) 石器 (2・3) 古式土器師 (4・5) 実測器皿 (6) 土器底盤 (7) 実測器皿 (8) 実測器皿 (9) 実測器皿 (10) 土器底盤 (11) 実測器皿 (12・13) 制

図19 上中城跡第5～7次遺物実測図

層上面から出土した。

(10) は丹波型の瓦器椀の口縁部である。口縁部は内面側に稜を持ち、外面口縁端部から3mmの部分で内反し、直上に立ち上がる。体部側に比べ口縁端部側が厚くなる。表面の摩滅が激しく煤は一部しか残っておらず、磨きなどの調整はわからなかった。13～14世紀前半のものと思われる。第7次調査1トレンチ旧京北町トレンチ跡から出土した。

(11) は縁釉陶器で口縁部のみ残存している。内外面共に施釉されている。口縁部は玉縁状で外反しており、外面にはミガキの痕が密に残る。口縁部の形状から近江系のものと見られる。第6次2トレンチ4層北端掘下げ時に出土した。

(12・13) は朝鮮王朝陶器で、15～16世紀頃のものと考えられる。(12) は椀の口縁部である。口縁は玉縁状で、外面は口縁端部より1cm程下に段差を持ち、厚くなる。内外面ともに施釉されている。第7次2トレンチ2層直下から出土した。(13) は椀底部である。0.4cmの低い削り出し高台を持ち、高台部分はきれいな正円ではなくやや歪んだ楕円状になる。底部は中央に向かい稜線を持ちながら凸状になり、中央付近には用途不明の窪みが見られる。内外面共に灰色の釉が施され、両面にトチンの痕が見られる。第6次3トレンチ1層から出土した。(永田)

引用文献

- 人魯 享 1994『上中城発掘調査概報』(『京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書』第4集)、京北町教育委員会
- 人魯 享 1995『上中城第2次発掘調査概報』(『京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書』第5集)、京北町教育委員会
- 京都市文化市民局 2006『京都市内遺跡分布調査報告』 平成17年度
- 京都府教育委員会 2013『京都府中世城館跡調査報告書 第2冊 丹波編』
- 國下多美樹・花熊祐基・長谷屋 権・渡辺悠希 2015「2014年度上中城測量調査報告」『考古学実習 NO.11』、龍谷大学文学部考古学実習室
- 國下多美樹・神尚輝 2016「上中城跡第5次発掘調査報告」『考古学実習 No.12』、龍谷大学文学部考古学実習室
- 國下多美樹・伊野近富・廣富亮太・市川勇樹・清水真好・吉兼千陽 2018「上中城跡第6次発掘調査報告」『考古学実習・文化財実習報告書 第1集』、龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻
- 國下多美樹・芦塚晶太・吉兼千陽 2019「上中城跡第7次発掘調査報告」『考古学実習・文化財実習報告書 第2集』、龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』、角川書店

3 測量・発掘調査の成果

表2 上中城出土遺物一覧

番号	通番号	トレンチ	層位	遺物	出土日	本報告
1	5101	南区	SP4	石(砾石か)	2015.8.9	
2	5102	南区	SP2換土	土師器(古墳時代)、土器(古代)	2015.8.9	
3	5103	不明	SP2	土師器(古代)	2015.8.11	
4	5104	北区	表土	染付(近代以降)	2015.8.6	
5	5105	南区	SP2	ガラス片(近代以降)	2015.8.9	
6	5106	南区	SP4orSP5	土師器(時期不明)	2015.8.9	
7	5107	南区	SP2下層	土師器(古墳時代か?、櫛)	2015.8.10	実測3
8	5108	南区	SP1	白磁または染付(近世以降)	2015.8.9	
9	5109	南区	SP5(西側)	土師器(時期不明)、灰	2015.8.10	
10	5110	南区	SP6	須恵器(櫛)、瓦器(13~14世紀、椀高台)	2015.8.9	
11	5111	南区	SP5	須恵器(奈良時代、环身)	2015.8.10	
12	5112	南区	SP5	須恵器(奈良時代、环口縁部)	2015.8.10	
13	5113	不明	表土	須恵器(古墳時代後期~奈良時代、环身)、染付(近世以降)	2015.8.6	

2017年度(第6次調査)

番号	通番号	トレンチ	層位	遺物	出土日	本報告
1	6101	1トレンチ	土壌1層	陶器(近世近代)、磁器、染付、ガラス	2017.8.15	
2	6301	3トレンチ	1層	須恵器(古墳~奈良時代、巻か?)	2017.8.18	
3	6102	1トレンチ	土壌裾	陶器(中世か?)	2017.8.15	
4	6201	2トレンチ	北端1層	陶器(中世)、躰鉢	2017.8.15	
5	6302	3トレンチ	南1層	陶器(近世)、櫛鉢	2017.8.15	
6	6303	3トレンチ	1層	朝鮮王朝陶器(15世紀以降か?、底部)	2017.8.14	実測13
7	6202	2トレンチ	南端1層	須恵器(奈良時代、环身底部)	2017.8.15	実測7
8	6203	2トレンチ	4層北端	吉瀬戸(中世)	2017.8.16	
9	6204	2トレンチ	2層南端	土師器(古墳時代前半、櫛)	2017.8.16	実測2
10	6205	2トレンチ	2層南端	白磁(近世か?)	2017.8.16	
11	6103	1トレンチ	土壌内側2層下面~3層上面	丹波型瓦器(12世紀後半~13世紀、椀)	2017.8.16	
12	6104	1トレンチ	土壌内側2層上面	中国産青磁(13~15世紀、碗、稚鳥案)	2017.8.16	
13	6304	3トレンチ	3層精査中	黒色土器(平安時代)	2017.8.16	
14	6105	1トレンチ	土壌裾部1層下面~2層上面	染付(近世)	2017.8.14	
15	6106	1トレンチ	土壌上部1層	陶器(近代)、磁器(近代)	2017.8.16	
16	6107	1トレンチ	4層	時期不明	2017.8.17	
17	6305	3トレンチ	中央付近4層(焼土)	焼土	2017.8.17	
18	6306	3トレンチ	南端断割4層焼土	陶器(中世、櫛)	2017.8.17	
19	6307	3トレンチ	中央断割付近4層焼土	小破片	2017.8.17	
20	6206	2トレンチ	3層又は4層精査中	須恵器(奈良時代か?、环か?)	2017.8.17	
21	6308	3トレンチ	断割南半3層	土師器(櫛食時代か?、皿)	2017.8.18	
22	6309	3トレンチ	北端、SX9	瓦器(12~14世紀)	2017.8.18	
23	6207	2トレンチ	4層精査	瓦器(12~14世紀、椀)	2017.8.18	
24	6310	3トレンチ	4層(焼土)精査中	瓦器(中世前半)	2017.8.18	
25	6311	3トレンチ	南端4層焼土、SX02	土師器片多数(中世)	2017.8.18	
26	6208	2トレンチ	SD14	土師器(時期不明、大型品)	2017.8.18	
27	6108	1トレンチ	SD6,1層下面	土師器(10世紀、皿)	2017.8.18	
28	6209	2トレンチ	5層上面	土師器、古瀬戸(中世か?)、灰釉陶器、小破片	2017.8.18	
29	6312	3トレンチ	SX-9(焼土層)	土師器片(時期不明)	2017.8.18	
30	6313	3トレンチ	93年トレンチか、SX4	土師器	2017.8.19	
31	6314	3トレンチ	SX-2	土師器片(14または16世紀、皿)、瓦器、小破片	2017.8.19	

32	6109	1 トレンチ	土塙南側表探(看板付近)	須恵器(奈良時代、环)	2017.8.19	
33	6315	3 トレンチ	南半4層精査中	小破片	2017.8.19	
34	6401	不 明	SK-9, 2層上面	小破片	2017.8.19	
35	6316	3 トレンチ	3層ブロック間	小破片	2017.8.19	
36	6210	2 トレンチ	4層北端下げf, SX5付近	土師器、瓦器(中世)、綠釉陶器(10世紀前半、楕円窓、薩摩か?)	2017.8.19	実測11
37	6211	2 トレンチ	SD14溝中央	須恵器(平安時代、环か楕、薩摩か?)	2017.8.19	
38	6212	2 トレンチ	4層断剣, SX5	土師器	2017.8.19	
39	6317	3 トレンチ	4層精査	小破片	2017.8.19	
40	6318	3 トレンチ	93年トレンチ, SX04	須恵器(古墳時代、环蓋)	2017.8.19	実測4
41	6213	2 トレンチ	4層, SX05	土師器(10~11世紀)	2017.8.19	実測6
42	6319	3 トレンチ	中央付近断剣, SX02, 4層焼土	土師器(中世)	2017.8.19	
43	6320	3 トレンチ	SX09	瓦器(12~13世紀、楕)	2017.8.20	
44	6321	3 トレンチ	SX03断剣	土師器(中世)	2017.8.20	
45	6214	2 トレンチ	4層精査	土師器(中世)	2017.8.20	

2018年度(第7次調査)1トレンチ

番号	通番号	トレンチ	層位	遺物	出土日	本報告
1	7101	1 トレンチ	1層	転用環(須恵器、奈良時代、环)	2018.8.21	実測5
2	7102	1 トレンチ	1B層	陶器(京焼系、近世)	2018.8.21	
3	7103	1 トレンチ	1B層	チャート薄片(縄文～弥生時代)	2018.8.21	
4	7104	1 トレンチ	1B層	サヌカイト薄片(縄文～弥生時代)	2018.8.21	
5	7105	1 トレンチ	1B層	中国産青磁(14~15世紀、碗、龍泉窯)	2018.8.21	
6	7106	1 トレンチ	1B層	サヌカイト薄片	2018.8.21	
7	7107	1 トレンチ	1B層	陶器(近世18世紀か、灯明皿)	2018.8.21	
8	7108	1 トレンチ	1B層	須恵器(环、奈良時代)	2018.8.21	
9	7109	1 トレンチ	1B層	石鐵(縄文か)	2018.8.21	実測1
10	7110	1 トレンチ	1B層	チャート薄片(縄文～弥生時代)	2018.8.21	
11	7111	1 トレンチ	1B層	中国産青磁(15世紀、碗、龍泉窯)	2018.8.21	
12	7112	1 トレンチ	1B層	サヌカイト薄片(縄文～弥生時代)	2018.8.22	
13	7113	1 トレンチ	1B層	中国産白磁(碗、14~15世紀)	2018.8.22	
14	7114	1 トレンチ	1B層	サヌカイト薄片(縄文～弥生時代)	2018.8.22	
15	7115	1 トレンチ	1B層	吉瀬戸(14~16世紀、皿)	2018.8.22	
16	7116	1 トレンチ	1B層	石	2018.8.22	
17	7117	1 トレンチ	1B層	中国産白磁or青磁(12世紀、碗)	2018.8.22	
18	7118	1 トレンチ	1B層	須恵器(6世紀後半環、环身)	2018.8.22	
19	7119	1 トレンチ	1B層系	染付(近世)	2018.8.22	
20	7120	1 トレンチ	1B層系	須恵器(奈良時代か、环か)	2018.8.22	
21	7121	1 トレンチ	京北町トレンチ	須恵器	2018.8.22	
22	7122	1 トレンチ	京北町トレンチ	瓦器(13~14世紀、楕、丹波型)	2018.8.22	実測10
23	7123	1 トレンチ	京北町トレンチ	須恵器(平安時代、瓶子)	2018.8.22	実測8
24	7124	1 トレンチ	溝西半	白磁(近世)	2018.8.22	
25	7125	1 トレンチ	2層上部	須恵器(奈良時代、环蓋)	2018.8.22	
26	7126	1 トレンチ	1B層(旧トレンチ)	須恵器(大型製品)	2018.8.24	
27	7127	1 トレンチ	1B層(旧トレンチ)	須恵器(櫛)	2018.8.24	
28	7128	1 トレンチ	1B層	須恵器(奈良時代、环身=高台付)	2018.8.24	
29	7129	1 トレンチ	1B層	白磁(近世)	2018.8.24	
30	7130	1 トレンチ	覆土	白磁(12世紀、碗、染付(近世)、赤絵(近世))	2018.8.30	

3 測量・発掘調査の成果

2018年度(第7次調査)2トレンチ

番号	通番号	トレンチ	層 位	遺 物	出土日	本報告
1	7201	2トレンチ	2層上面	須恵器(8~9世紀、壺)	2018.8.21	
2	7202	2トレンチ	2層上面	肥前染付(18世紀、碗)	2018.8.21	
3	7203	2トレンチ	2層上面	須恵器(10世紀、鉢、罐窓)	2018.8.22	実測9
4	7204	2トレンチ	2層上面東部	吉瀬戸(14~16世紀、小鉢または皿)	2018.8.22	
5	7205	2トレンチ	2層(京北町)トレンチ埋土	中国産青磁(14世紀、碗、龍泉窓)	2018.8.22	
6	7206	2トレンチ	2層底下	灰釉陶器(10~11世紀中頃か)	2018.8.22	
7	7207	2トレンチ	2層底下	チャート片か	2018.8.22	
8	7208	2トレンチ	2層底下	輸入陶磁器(朝鮮王朝)	2018.8.22	実測12
9	7209	2トレンチ	3層	焼締陶器(中世、甕)	2018.8.24	
10	7210	2トレンチ	3層	瓦器(13~14世紀前半、板)	2018.8.25	
11	7211	2トレンチ	3層	瓦器(13~14世紀前半、板)	2018.8.25	
12	7212	2トレンチ	3層	吉瀬戸(16世紀後半)	2018.8.25	
13	7213	2トレンチ	SD1	土師器(中世、皿か)	2018.8.28	
14	7214	2トレンチ	SD2	土師器(中世か)	2018.8.28	
15	7215	2トレンチ	SD1	土師器(中世か)	2018.8.28	
16	7216	2トレンチ	SD1	土師器(中世か)	2018.8.28	
17	7217	2トレンチ	SD1	土師器(中世か)	2018.8.28	
18	7218	2トレンチ	SD2	土師器(中世か)	2018.8.28	
19	7219	2トレンチ	SD1	土師器(中世か)	2018.8.28	
20	7220	2トレンチ	トレンチ中央南壁,層位不明	土師器(中世か)		不明
21	7221	2トレンチ	SD1	土師器	2018.8.28	
22	7222	2トレンチ	SD1	土師器	2018.8.28	
23	7223	2トレンチ	SD1	土師器	2018.8.28	
24	7224	2トレンチ	SD1	土師器	2018.8.28	
25	7225	2トレンチ	SD1	土師器	2018.8.28	

4 上中城跡の地中レーダー探査について

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 金田明大

1. はじめに

地中の情報を非破壊的な手段により明らかにする手法を探査と呼称する。対象が遺跡の場合、遺跡探査と称する。この手法には多様なものが提案され、対象や計測条件などにより選択されて成果をあげつつある。

今回、龍谷大学考古学研究室の調査に連携して、共同で上中城跡の地中レーダー探査をおこなうこととした。現地は既に残存地形や試掘などにより研究が蓄積されており、この地域における地中レーダー探査の成果を検討するには良好な環境であることが予想された。このため、想定されている城の領域について可能な限りで地中レーダー探査を試み、成果を得た。本稿ではこれらの成果について概要を紹介する。

2. 探査の概要

今回は地中レーダー探査を実施した。

地中レーダー (Ground Penetrating Radar—GPR と略) は電磁波をアンテナより地中へ発信し、反射波を受信することで遺構・遺物や地層などによる境界などの存在を疑似的な断面として可視化する手法である。反射波の送受信に要する時間により、対象となる反射の深さを把握することができる。使用するアンテナの周波数により、有効な探査深度と分解能に差が表れるため、目的に応じてアンテナとデータの収録時間を選択する (佐藤ほか 2016)。

本手法は迅速に地中内の状況を高密度に把握できる利点がある。このため、日本において遺跡での活用も増えている。反面、現状では物性などの詳細を判別することは試みはあるもののまだ十分ではない。このため、遺跡の調査にあたっては成果を誇大に解釈するのではなく、従来培われた考古学的な知見や、確認調査などと組み合わせて活用することが望ましい。

本調査においては既存の周辺の発掘調査によって遺構がそれほど深い部分に存在しないことが想定できること、調査のための軽量化などの観点からレーダーは GSSI 社 SIR-3000 および中心周波数 400MHz アンテナを選択した。

対象範囲は城の形状を反映していると考えられている楕円形の公園部分とその周辺の道路となる。道路の周囲は畑および住宅となっており、これらに関係するフェンスなどの施設や電線、水道管などの埋設管によるノイズなどが想定された。

測線は個々の調査区において任意の方向にエスロンテープを用いて 2 m おきに等間隔に設定し、それを基準に計測をおこなった。側線方向は城の長軸方向の壕の断面を把握することを目的として東西方向に設定した。計測間隔は 0.5 m であり、測線上は 1 m おきに視認にてスイッチを押しマークをデータ内に挿入した。調査範囲は 4794 m²、総測線距離は 9174 m である。

データは現場作業終了後に解析を実施した。使用したソフトウェアは GPR-SliceV7.MT (Geophysical Archaeometry Laboratory) を用いた。解析はデータの取り込み後、波形の補正、マーカーの欠落などの確認と修正をおこなった後、Bandpass によるノイズ除去をおこない、Background-Filter によるフィルタリングをおこなった後、Migration 处理をおこなって疑似的な断面図 (Profile 図) を作成した。この Profile 図より Time-Slice 法により疑似的な平面図 (Time-Slice 図) を作成した。

以下、成果を述べる。

3. 探査の成果

地点ごとに疑似的な断面および Time-slice による疑似平面の成果を示す。深さについては電磁波の到達時間 (単位 ナノ秒 (ns)) で表現している。成果の双極線マッチングによる深度情報も掲載するが、地中は均質ではなく、参考に留める。

3-1 Profile 図 (図 20) 対象地のうち、道に囲まれた楕円状の部分は現況の地形において畦畔の跡を境に南北で 3

つの地区に分離できる。この3地区を便宜的に北区、中区、南区と呼称し、代表的な反射を示して概要を検討する。

まず、北区では、過去の調査において石敷が確認されている。Y=56mのProfile図をみると、X=10-40m、深さ10-15nsの範囲で強い反射を見ることができ、これらがその石敷の範囲を示している可能性がある。その下部については45-50ns程度の深さまで周辺とは異なる反射が見られる。凹凸があり、城の築造時の土盛りの可能性が指摘できる。この両側(X=9m付近、X=41m付近)には落ち込みが確認できるところが存在するが、それほど明瞭ではなく、溝の可能性のみを指摘する。

中区はY=34mのProfile図を見る。X=8mおよびX=42m付近では落ち込みがみられるが、ノイズも多く、溝の可能性を指摘するに留まる。この内側は10nsで平坦面がみられるが、その下部は東西で異なっており、西側では深さ20ns付近で平坦であるが、X=20-25mにかけて10ns付近までわずかであるが斜め方向に上がる状況にあり、整地などの影響が指摘できる。

南区のY=20mのProfile図では、X=10m付近の現状の道路下部に溝が存在し、その内側のX=15m付近に高まりが存在する。その内側は平坦面が存在し、X=20-25m部分で東側に高まる。X=43m付近に落ち込みがあり、溝と考えられる。

3-2 Time-Slice図(図21) 深さ4-16nsでは、北区に強い方形の反射が存在する。これは過去の調査で確認されている石敷の可能性が高い。また、この北西側X=0-8m、Y=68-82mの部分にも方形の強い反射が存在するが、これは新しい時期の整地に関係するものと思われる。

深さ15-24nsの中区・南区では、東側のX=40m、Y=22m-42m付近で弧状の反射があり、不明瞭ではあるが、Y=12m付近を最も南にして東側に弧状に伸びると考える。この反射は現地形とは異なるものであり、ある段階でこのような土地の区画があった可能性もある。また、上述した通りX=20m付近で大きく反射が異なっており、東側がやや低く段差を付けて造成し利用されているか、旧地形が低く、それを反映している可能性が高い。

深さ40-48nsでは、南区のX=22-34m、Y=12-20mに方形の反射の弱い部分があるのが注目される。この特徴に注意してみると27-44nsまでではこの方形の部分の反射が強く、やや高い部分に反射面が存在することが指摘できる。建物の基礎の可能性があろう。

4.まとめ

今回は地中レーダーにより上中城の調査をおこない、成果を検討した。周辺環境からの影響によるノイズなどもあって、明瞭に成果が得られたとはいがたいが、地中の構造物についての検討を進める上で基礎的な情報を取得できたと考える。今後、発掘調査や他の物理探査手法などによる地中の情報の取得を進めることで、より詳細が明確となることを期待したい。地中の異常部の詳細が明らかになることで、今回の地中レーダー成果をより具体的に地中の状況と比較検討することも可能となる。

引用文献

佐藤源之・金田明大・高橋一徳(編) 2016『地中レーダーを応用した遺跡調査 GPRの原理と利用』、東北大出版会



図20 上中城跡地中レーダー探査 Profile図

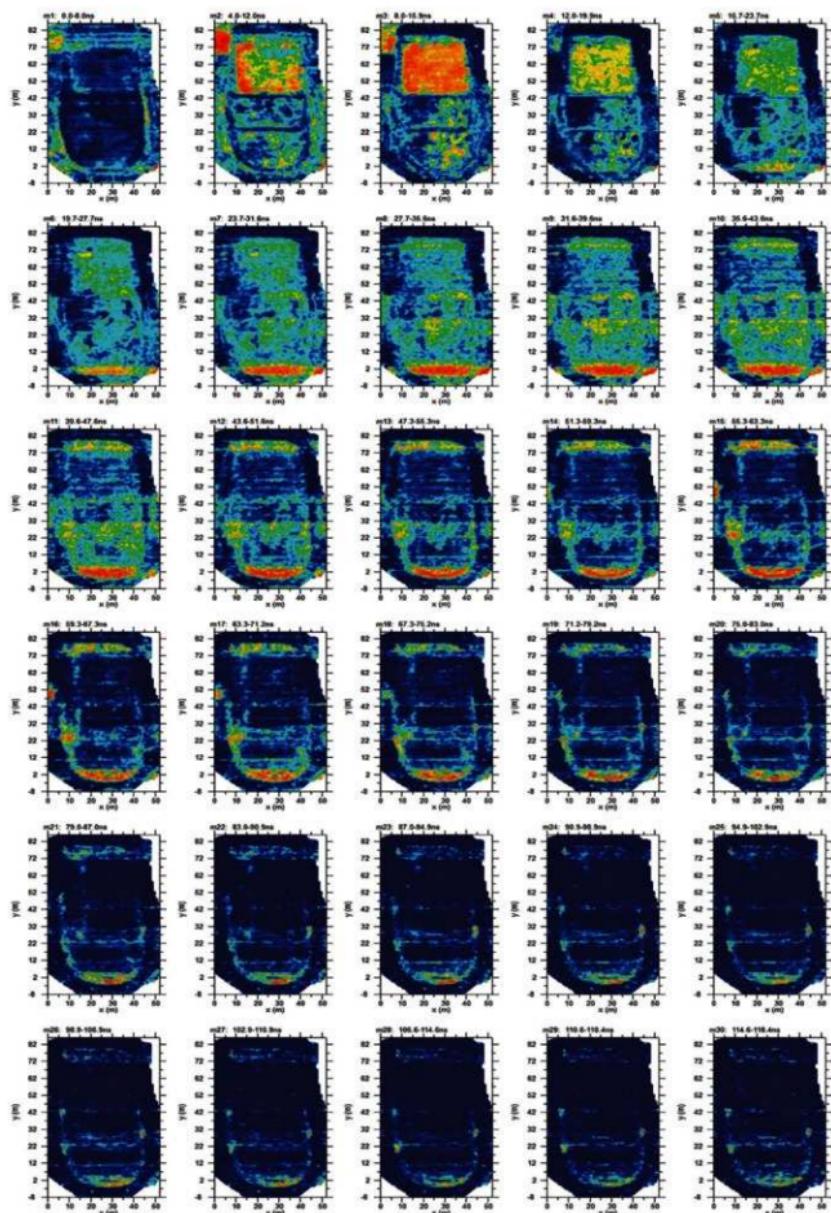


図 21 上中城跡地中レーダー探査 Time-Slice 図

5 まとめ

(1) 上中城跡・上中太田遺跡との比較

上中城跡は、現在までに7次にわたる調査が行われており、そのうち本学考古学実習室・文化遺産学合同研究室・考古学研究室では計4回の調査を実施した。2014年に測量調査を行った際に、京北町教育委員会と京都府教育委員会の報告と比較検討し、城館の方針や規模に関してさらに精緻な測量成果を挙げることができた。また1995年には、京都府埋蔵文化財調査研究センターによって上中太田遺跡が調査されている。それらの成果を以下にまとめておきた。

縦文～弥生時代は、上中太田遺跡で弥生時代後期末の竪穴住居跡SH07と土坑SK12を確認している。また、少数であるが上中城跡でも弥生時代末期から古墳時代前期の遺構・遺物を検出している。

古墳時代の遺構として、城内の郭Ⅰでは古墳時代前期のピットSP0502を1基検出し、郭ⅡAでは京北町の第1次調査で古墳時代の住居跡を確認している。これらから古墳時代に段丘を利用した生活が営まれていたことが考えられる。また城外では更に検出数は増加し、古墳時代後期の遺構が目立つ。上中太田遺跡では後期の竪穴住居跡3棟(SH08・SH09・SH14)と南北溝SD02を1条確認している。古墳時代中期に比定できる遺構・遺物は確認されていないが、上中城跡・上中太田遺跡周辺では少なくとも前期と後期には集落が営まれていたことが推測される。

奈良時代の遺構は、城内では郭ⅠのピットSP0505のみにとどまるが、上中太田遺跡では3間×4間の掘立柱建物SB10及び溝SD01が確認されている。掘立柱建物SB10は、およそN-3°-W振り、ほぼ北に正方位を向いている。溝SD01は調査区南端で「L」字状に屈曲しており、集落内の排水施設として北へ水を流していたと考えられている。これ以降中世まで遺構はほぼ確認されないことから、土地の利用が希薄な時期があったといえる。

上中城の築城時期は、江戸時代に作成された古文書によれば天仁年間(1108～1110年)とされる(京北町2005)が、次に述べるように主として鎌倉時代以降の遺構を検出している。

中世に入ると、城内で鎌倉時代以降の遺構と遺物が確認される。郭Ⅰでは比較的多くの遺構を検出しており、中世の竪穴状建物SX0602や集石遺構SX0605とともに、鎌倉時代のピットSP0506、東西溝SD0606がある。ピットSP0506では、13世紀後半に属する瓦器椀が出土するなど、城館が鎌倉時代には成立していたことが判明した。東西溝SD0606は、城館の内側に土塁と平行するように掘られており、郭内の排水溝として利用されてたとすれば土塁の年代を遅くとも鎌倉時代に求めることができる。土塁の構築については、堀を掘削した際に出土した土を土塁として利用する、搔き掲げ土塁の構築技法を用いており、大きく6段階の過程を経て構築していることが考えられる。また、郭ⅡA・Bでは中世の遺構が郭Ⅰと比較して少ないと、そして郭Ⅰで集石遺構・竪穴状建物が確認されることから、城館の中心施設が郭Ⅰ付近にあったことが推測される。また遺構に伴う遺物ではないが、2017-2trの基本第1層(表層)と2018-2trから15～16世紀の朝鮮王朝陶磁が出土している点は注目される。(清水)

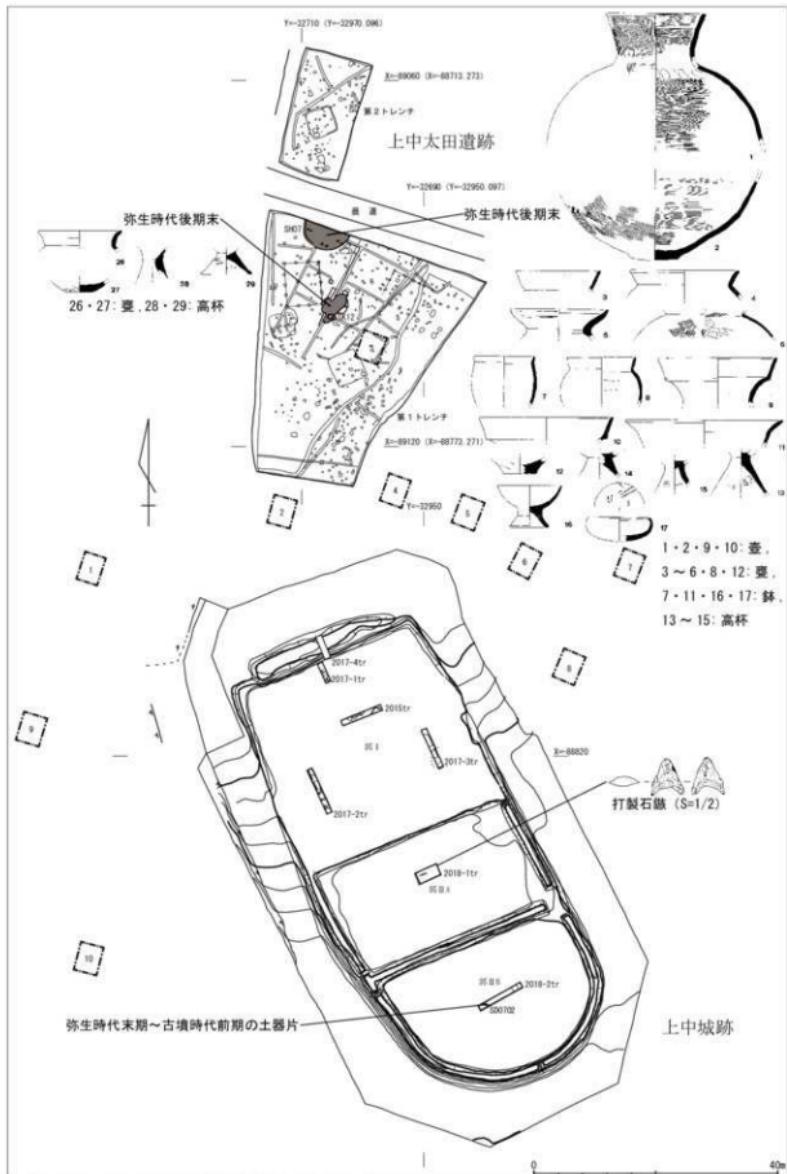
(2) 測量・発掘調査の総括

以上の既往の成果対比を踏まえ、第4次～第7次調査によって明らかになった主に上中城跡関連の成果について総括し、合わせて課題を述べることにしたい。

城館跡の規模・構造について 城館跡の規模は第4次調査によって郭の長さ約82m、幅約38m、高さ約1.2mと判明した。ただし、周縁に残る群状高まりを調査していないので厳密な規模は将来の課題となる。

土塁は、地表面の測量によって北西辺に長さ25.2m、幅5m、高さ約1.2mが残存することが確認された。そして中軸線上の土塁再調査(第6次)で上面幅1.7m前後、下面幅3.6m以上(推定5m)、高さ0.95mであることが判明した。構造は、堀の掘削土を郭側に積み上げる叩き土塁構造である。堀は第1次調査の成果を踏まえると、幅5m、深さ1mの箱型構造となる。しかし、現状の成果は、北側の堀南部を確認しているのに留まるから、東・西・南の全体規模や構造については課題となる。

次に郭内部の構造である。第5次調査以降、最も高位に当たる北西側を郭Ⅰ、南東側を郭Ⅱa、bに区分して調査を進めてきた。郭Ⅰは、中央区で円形のピット群、土坑群が密集して検出され、城館内の館空間の中心域である可能性を示唆する。一方、北部と南部では石敷き遺構が検出されている。この遺構の性格は周囲を調査して明確にする必



※①調査トレンチを再トレース、一点鎖線は京北町の第2次調査。

②上中太田遺跡の座標は、国土地理院に基づき日本測地系から世界測地系に変換した。括弧内は世界測地系を示す。

図22 繩文～弥生時代の上中城跡周辺の調査成果 S=1/800 (遺物 S=1/8)

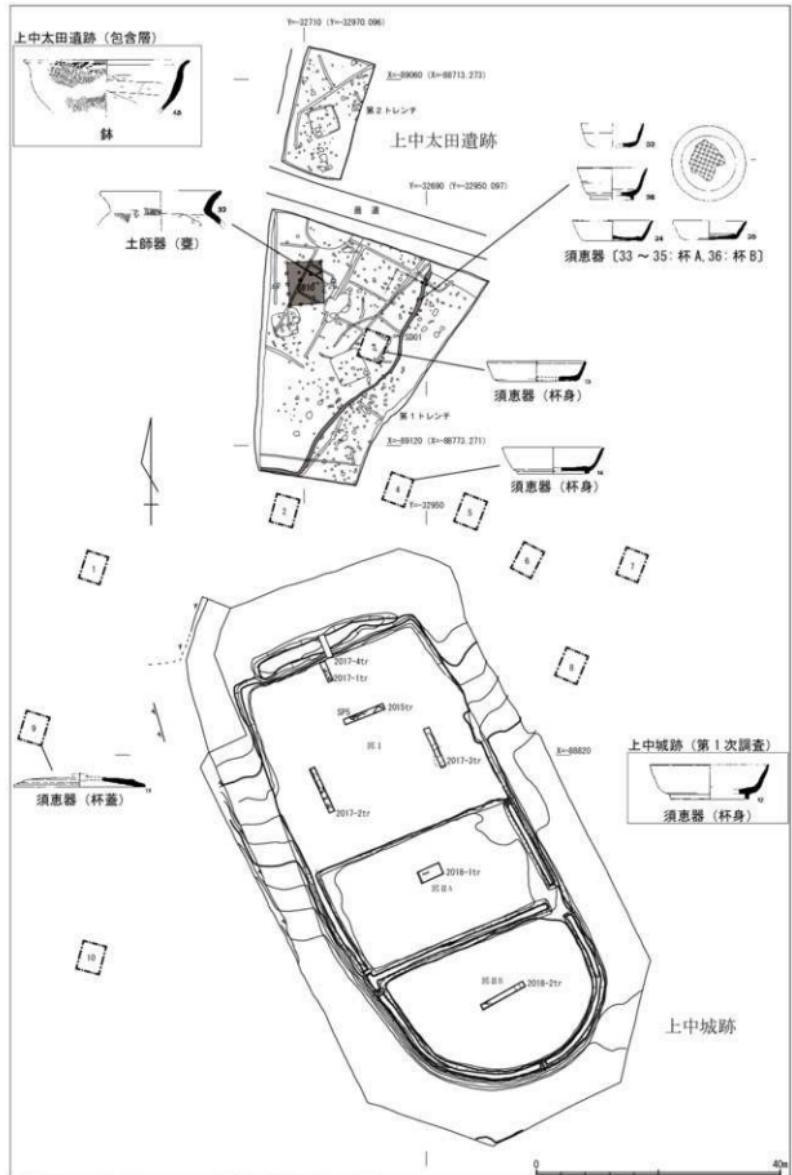
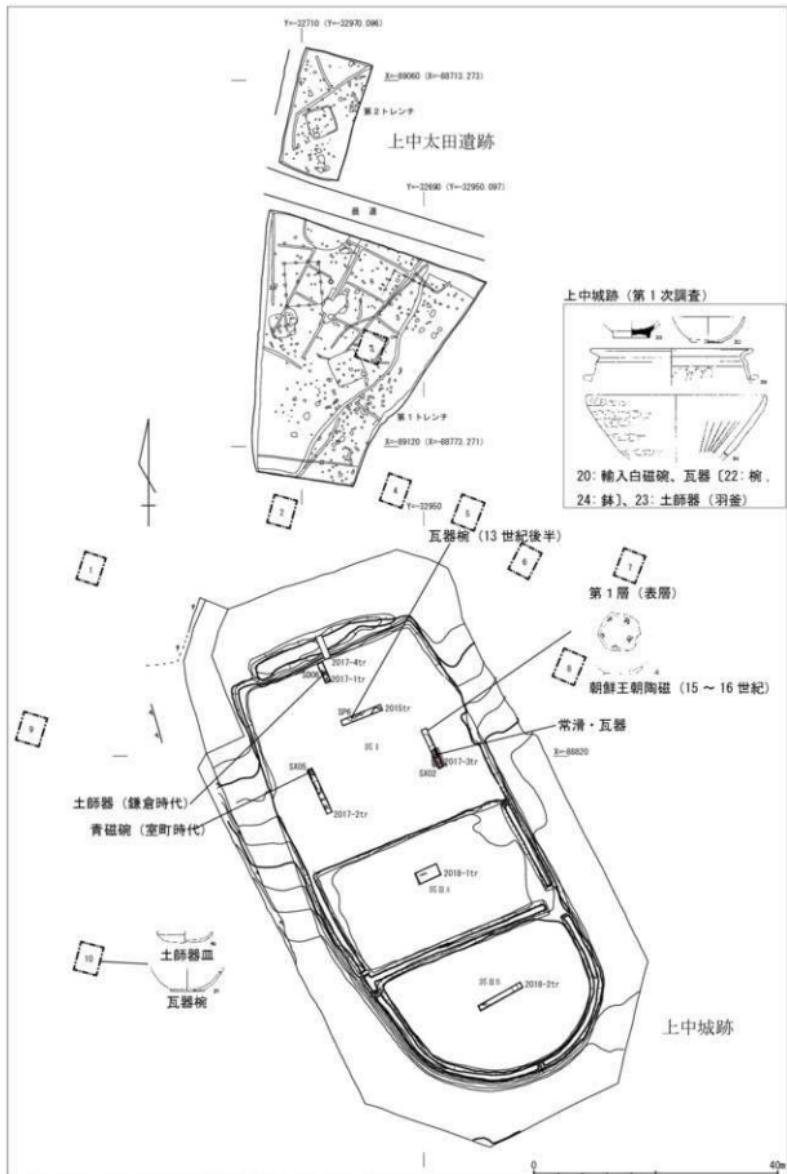


図23 奈良時代の上中城跡周辺の調査成果 S=1/800 (遺物 S=1/8)



※①調査トレチを再トレチ、一点鎖線は京北町の第2次調査。

②上中太田遺跡の座標は、国土地理院に基づき日本測地系から世界測地系に変換した。括弧内は世界測地系を示す。

③遺物については、伊野近富氏の論考を参考に作成した。

図 24 中世の上中城跡周辺の調査成果 S=1/800 (遺物 S=1/8)

要がある。

南東の郭Ⅱは、第7次調査でほとんど遺構が確認されなかった。この成果を生かすと空間地としての利用を想定することになる。これもさらに調査範囲を広げて利用の実態を解明する必要がある。なお、今後の調査の指針として地中レーダー探査の成果を検証することが挙げられる。郭内の石敷、建物、南端の土壘の可能性など調査の課題がさらに明確になった。

城館跡の年代と性格について 上中城は、主に地誌をもとに平安時代後期の鳥羽天皇の時代に成立した城館跡として知られる。そして第1・2次調査で鎌倉時代遺物が出土したことが城館跡を証左する成果とみられてきた。しかし、平安時代後期に遡る考古学的成果はほぼ無いので、その成立年代が課題であった。過去の成果も含め、第4～7次調査によっても鎌倉時代を遡る資料はほぼ得られなかった。しかし、城館を形成した在地土豪が弓削庄など莊園管理していたという理解からすると、12世紀前半に遡る資料が今後発見される可能性が高いものと予測する。土壘や堀の構築年代を明確にすることが重要となろう。今後、土壘、堀の追加調査を行って城館の成立年代を明確にすることが望まれる。

なお、鎌倉時代には中国産陶磁器、南北朝時代には、朝鮮陶磁が含まれることは、中世城館の長い歴史の中で政治的役割が一層高まり、広域的な物流にも関与できる社会的位置に到達したことが知られる。(國下)

〈参考文献〉

京北町 2005『京北町五十年誌』

京北町教育委員会 1994『上中城跡発掘調査概報』(『京都府京北町埋蔵文化財調査報告書』第4集)、京北町教育委員会

京北町教育委員会 1995『上中城跡第2次発掘調査概報』(『京都府京北町埋蔵文化財調査報告書』第5集)、京北町教育委員会

京都府教育委員会 2013『京都府中世城館跡調査報告書』第2冊 丹波編

(附)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998『上中太田遺跡』『京都府遺跡調査概報』第70冊

龍谷大学文学部考古学実習室 2015「8 2014年度上中城測量調査報告」『龍谷大学考古学実習』No.11

龍谷大学文学部考古学実習室 2016「2 上中城跡第5次発掘・測量調査報告」『龍谷大学考古学実習』No.12

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻 2018「2 上中城跡第6次発掘調査報告」「考古学実習・文化財実習報告書」第1集

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻 2019「II 上中城跡第7次発掘調査報告」「考古学実習・文化財実習報告書」第2集

図版 1



(1) 上中城跡上空から北西を望む
(ドローン撮影)
(株) 文化財サービス撮影



(2) 上中城跡上空から北を望む
(ドローン撮影)
(株) 文化財サービス撮影



(3) 上中城跡上空から南西を望む
(ドローン撮影)
(株) 文化財サービス撮影



(1) 第4次測量調査風景



(2) 郷1中央部土壠調査前風景
(南から)



(3) 郷1中央部土壠調査前風景
(北東から)

図版 3



(1) 郷 I 調査前風景（北西から）



(2) 第 5 次郷 I 中央部掘り下げ状況
(北東から)



(3) 第 5 次郷 I 中央部掘り下げ後
(南西から)



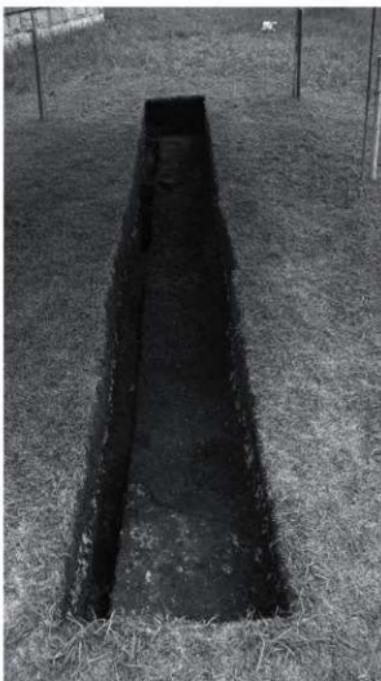
(1) 第5次郭Ⅰ中央部トレンチ遺構掘り下げ後
(西から)



(2) 第6次Ⅰトレンチ郭Ⅰ土塁郭内掘部



(1) 第6次2トレンチ郭Ⅰ南部（北西から）



(2) 第6次3トレンチ郭Ⅰ北部（北西から）



(1) 第6次4トレンチ郭Ⅰ土堀断面
(南東から)

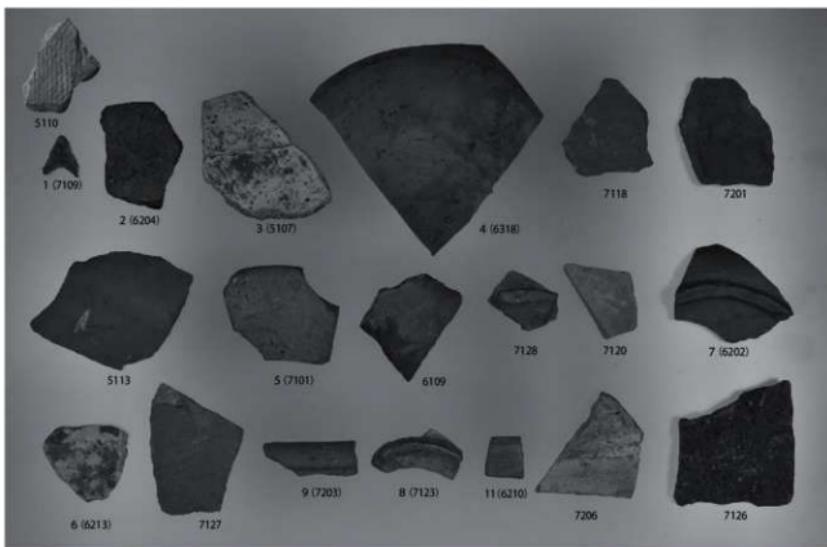


(2) 第7次1トレンチ郭Ⅱa中央
(北西から)



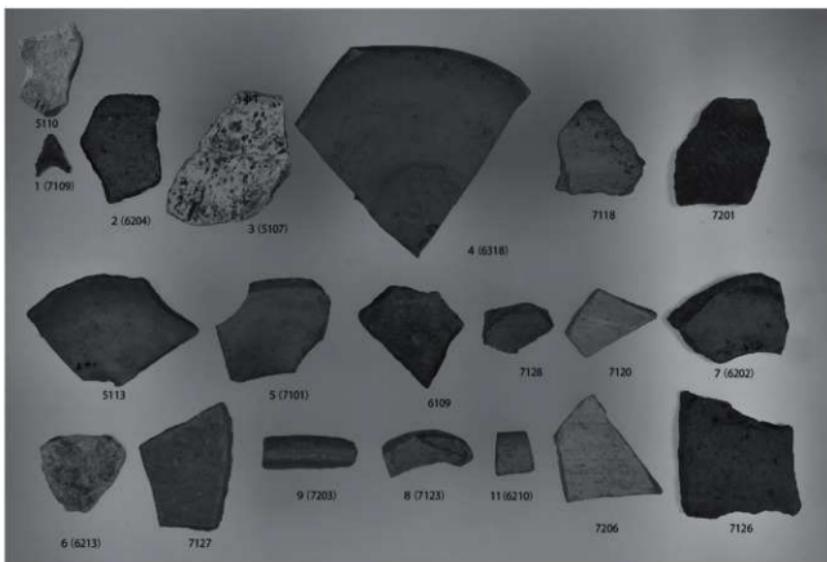
(3) 第7次2トレンチ郭Ⅱb中央
(北から)

図版 7



例 10(7122):10は図19と対応、4桁の数字は表2の上中層遺物一覧表と対応

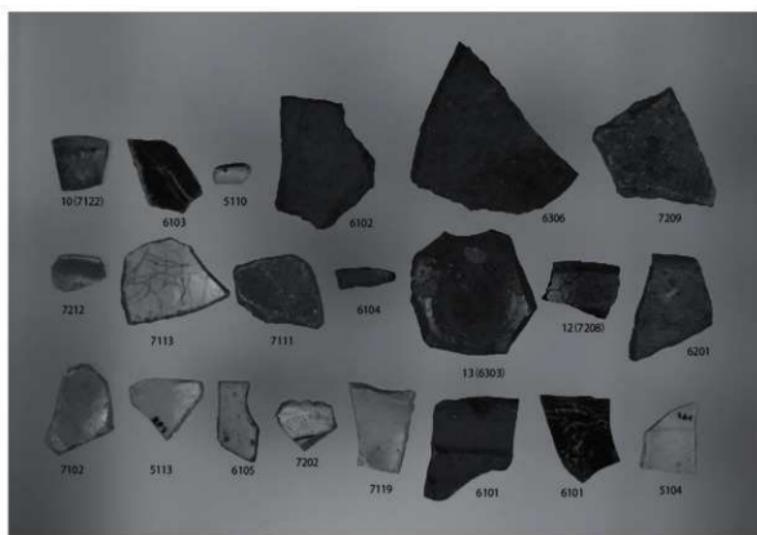
(1) 出土遺物1（古代および以前、外面）



(2) 出土遺物2（古代および以前、内面）



(1) 出土遺物 3 (中近世、外面)



(2) 出土遺物 4 (中近世、内面)

II部 上中城跡と京北の文化遺産

下弓削銅鐸と京北の地域的特性

國下多美樹

はじめに

上中城の營まれた弓削盆地における歴史を振り返ると、中世前期以前にすでに多くの遺跡が密集し、早くから開発進められた土地であることが知られる。弓削地域を含む京北盆地の南端、盆地への入り口にあたる周山においても古墳時代後期から飛鳥時代にかけての集落が成立し、ほどなく周山瓦窯、周山廃寺の成立があった。そして、戦国時代にはその山上に周山城が築かれたのである。周山は、交通の要としての伝統性ゆえ、飛鳥時代後期から奈良時代にかけて、政治的、経済的に優位性をもつこととなったことが遺跡の形成を導いた理由とみられる。このように周山盆地の各所における、小地域個々の地域的特性の解明が重要な課題になる。

そこで、本稿では遺跡がどのような歴史的脈略で小地域に形成されたのか、という視点に立って、上中城跡がこの場所に築造された背景を検討課題とする。その分析のために、弥生時代の銅鐸埋納地とみられる下弓削銅鐸、および上中城周辺の遺跡群の動向を題材に課題の解明を行いたい。

1. 下弓削銅鐸の評価

銅鐸発見地 上中城跡の南900m付近は、下弓削から狹間峠を経て東方の塔の地に抜ける道の入り口南斜面に位置し、かつて銅鐸が発見された伝承をもつ下弓削銅鐸出土地である。周知の埋蔵文化財包蔵地であるが、正確な場所が明確でないため広い範囲が推定地となっている。

このいわゆる下弓削銅鐸は、現在、辰馬考古資料館で所蔵・保管されている。2016年6月、この実物を調査する機会を得た。その所見とともに銅鐸発見地の意味を考える。

下弓削銅鐸を考古学会に初めて紹介したのは、梅原末治である（京都府 1926）。その報告文に拠ると、出土地の同定は銅鐸を収めた箱蓋の次のような由緒書によったようである。

傳曰文久元年八月獲之

於丹波桑田郡下弓削

村山中老樹之本

明治十九年一月

鐵齋題

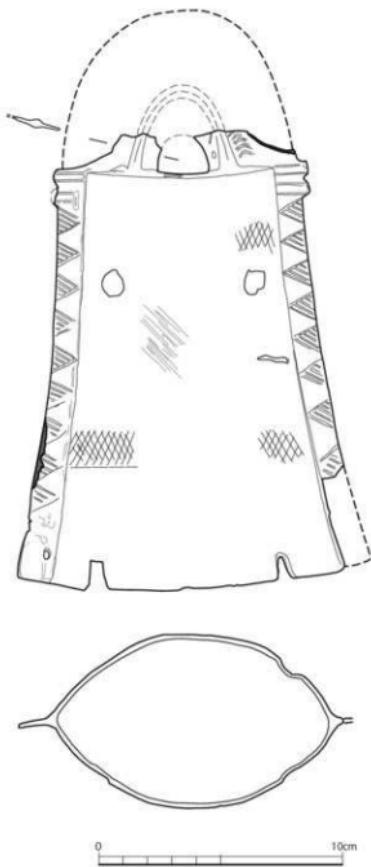


図25 下弓削銅鐸実測図（國下実潤、前田詞子トレース）



図 26 下弓削銅鐸 左:b面 右:a面(辰馬考古資料館提供)

すなわち、文久元年(1861)8月に桑田郡下弓削村の山中の老木根元から出土したものと記されている。記したのは、当時の所蔵者である富岡鉄斎である。由緒の箱書き内容は梅原氏の判読通りであった。梅原氏は報告で、この銅鐸所蔵者について、富岡鉄斎からいつの日か田中光顕へ、そして奈良の玉井久次郎へと所蔵者が転々と移動したと述べている。それを知った経緯まで詳しく述べられていない。最終的に辰馬資料館に保管されることになったのは、辰馬悦藏翁が鉄斎と親交が厚かったことによるであろう。発見地についての情報はこれ以外に残されていない。⁽²¹⁾

扁平紐式4区袈裟襴文銅鐸 銅鐸は、釣り手と鰐の一部が欠けている。文様のよく判別できる面をa面として実測した。残存高は18.6cmで、実測図から鉢を推定すると23.7cm前後になる。身の幅は、13.5cm、厚さ7.2cm。鉢は基部のみ残るが、内縁と外縁を残し扁平紐式であることが確定する。鉢内縁はヒキによる穴が開く。鉢外縁には綾杉文帯が残る。

身部のa面は、斜格子文が左下、右下、右上の3箇所に確認できるので4区袈裟襴文とわかる。堅持ち穴は不整形方～台形である。b面は摩耗して肉眼で文様は判読ができない。中央に横方向の新鮮な直線的な傷があり、農具痕と推定される。

鰐部は、4条ないし5条を単位とする銀歯文Rが施される。a面には少なくとも9単位あり、下端の身近くに楕円形のヒキがある。また、a面右下部は欠損する。鰐部上端に2個一対の耳部がある。

内面凸帯は、ほとんど磨滅していない。

以上の特徴から、本銅鐸は扁平紐1式4区袈裟襴文銅鐸であり、弥生時代中期後半の所産と推定される。

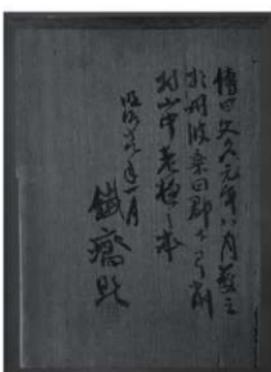


図 27 下弓削銅鐸箱書(辰馬考古資料館提供)

2. 弥生時代社会と境界性

弥生集落の動向 本銅鐸は銅鐸祭祀の終焉や祭式の変化を契機に埋納されたのであろうが、当時、どの集団が銅鐸祭祀に関わっていたのであろうか。また、なぜこの場所に埋納したのであろうか。

銅鐸祭祀は、本来的に地域内の複数の集団をまとめる農耕祭祀の道具だから、一定の規模をもつ集団を想定することが多い。当地の場合、銅鐸出土地の北約800m地点にある上中遺跡、上中・太田遺跡、南東2kmの塔遺跡がまず関係する遺跡として挙げることができよう。ただし、下弓削銅鐸の年代である中期後半の弥生集落はほぼ皆無に近い状況である。上中遺跡では流路跡や土坑などの遺構はあるが生活実態が明確ではない。縄文時代、弥生時代後期末の土器等遺物が一定量出土し、断片的ながら弥生集落の存在を見込める程度である。一方、銅鐸発見地から谷を南東に進んで東の盆地に出た所に所在する塔遺跡で、銅鐸の時期よりも古い弥生時代中期前葉の遺物が出土している(図28、小池1995)。

京北の盆地内では、周山地域の卯瀬谷遺跡で前期の土器が採集されているようで、その集団は塔遺跡を成立させた可能性が高いであろう。従って、現状では弥生時代の前半期は南部の周山地域に弥生時代集落がまず成立したことになる。これは大堰川水系によって南西の亀岡盆地から弥生文化が衝突的に波及したと見るのが自然であろう。亀岡盆地では、前期から中期初頭の環濠集落である太田遺跡をはじめ、中期以降も拠点的な集落が展開し、より山間部への入り込みがあったのである。上中周辺に中期集落が存在したとすれば、周山地域からの移動か南丹地域からの山道を介しての文化移入のいずれかが想定できるが、後者は弥生時代の実態が十分に判明していないから想定の域を超えない。このような盆地周辺の遺跡群のあり方から、銅鐸埋納は京北盆地内の集団のみならず、さらに広域的な空間に居住した弥生集団の境界に関わる可能性を推定できる。

境界性をもつ埋納 改めて、近畿地方の弥生時代集落と銅鐸の分布を重ねて検討してみよう(図29)。下弓削銅鐸の埋納地は、南丹波地域で唯一の発見地であると同時に、近江と南丹波中心地域(大堰川水系)の中間点付近、あるいは北丹波地域との境界にあたる場所であるように見える。要するに、境界性を有する場所に埋納したのではないかと推察する。

境界性を有する場所に銅鐸を埋納する現象は、西日本各地で見られるが、同じ京都市右京区の周山街道添いで発見された梅ヶ畑銅鐸も同様の事情で埋納されたのではないかと考える。梅ヶ畑銅鐸は、太秦から山越えと呼ばれる切り通し道(梅ヶ畑山越線)を登り切った標高130mの北嵯峨丘陵頂部よりやや下がった南斜面で発見されている。銅鐸4点(1~4号鐸)は中型鐸に小型鐸を入れ子にして埋納されていた。1・2号鐸は、外縁付鉢2式、3・4号鐸は外縁付鉢1式であり、遅くとも2式段階の銅鐸埋納を示唆する。注意したい点は、まず4号鐸は、島根県荒神谷2号鐸と同範と判明していることで(難波2005)、2号鐸と共に外縁付鉢1式の4区袈裟擣文は縦横帯と身の側縁間に界線を有する中山型と称される同一工人の作とされる(難波2006)。出土地の明確でないものを除き、中山型の分布を見ると、兵庫県中山1・2号鐸、福井県米ヶ脇鐸、和歌山県太田黒田鐸、島根県加茂岩倉4・7・19・22号鐸があり、兵庫県南部、大阪湾岸から京都盆地北西隅、そして山陰、北陸地域となる。すなわち、梅ヶ畑銅鐸の古段階資料は銅鐸祭祀の波及経路と関係する可能性が高く、いわゆる周山街道をして山陰に抜ける道が選ばれた可能性を示唆する。

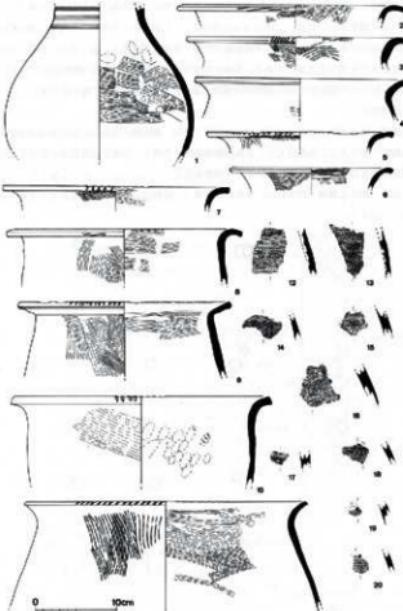


図28 塔遺跡の弥生土器(京都府センター 1995)



図29 近畿の弥生時代遺跡分布図（京都府センター1989に加筆）

奇しくも次の段階には上中において下弓削銅鐸が埋納されたことも前代のこの動きと関係しているものとみて良い。要するに、山陰地方との強い文化的交流が周山盆地を経由していた可能性を示唆するものと言える。

このように見てくると、京北盆地の北部の下弓削一帯は弥生時代中期初頭から中期後葉の時期に東西、南北の交流点であり、南丹波の北端としての境界の地であったと推測できるのである。

一方、銅鐸の埋納は中期までの銅鐸祭祀の終焉あるいは更新と見ることもできる。近畿地方では後期になって遺跡の動向に変化が生まれた。中期の大集落は解体し、中小の集落が散在するようになり、立地も低地のみならず高地にも居住域を広げる地域が増えた。青銅器は新式の突線鉢式銅鐸が作られはじめると一方で、青銅製鏡（中国鏡、小型彷彿鏡）が普及、鉄器の生産や普及も始まる。下弓削銅鐸の埋納時期が仮に後期初頭の埋納とすれば、このような西日本を巻き込む大きな社会的変動と関係したものと考えられる。

境界意識とその後の展開 以上のような弥生時代における境界性という特色はその後も維持され続けたものと推定している。上中城の所在する上中太田遺跡では、古墳時代前期以降、奈良・平安時代と継続的な居住地として利用さ

れた。特に奈良時代では、墨書土器、縁軸陶器をなど官衙的性格が明らかになりつつある。従って、地域内では政治性を帯びた境界として引き継がれたのである。そして、平安時代末から鎌倉時代から室町時代まではぼ跡は継続し、輸入陶器を一定量有するほど経済力が伸長し上中城という城館が成立したのである。上中城に残る小字「城下町」、あるいは北東、周山街道に東面する場所に残る小字「制札」地名は近世以降も政治的、行政的な空間として意識され続けたことを証左するのである。すなわち、弥生時代以来の広域的な境界意識は、その後も引き継がれ、丹波・丹後・近江の諸地域との官道の交差点として、上中地域が明確な性格を付与されることになった。とりわけ古代以降、常に王権と平安京という大都市との関係を保ち続けたところに地域的特性を維持できた背景を読み取ることができたのである。

古代ないし以前の地域社会における境界性がその後も強く意識される現象は、各地でも散見される。例えば、筆者がフィールドとしている京都盆地西南部の乙訓地域北部、中海道遺跡（向日市物集女町）は、弥生時代後期から古墳時代前期の大集落であり、庄内式期の大形建物と多数の住居跡から居館跡と見られている。この集落の中心城は奈良～平安時代の遺構・遺物が密集して発見され平安京近郊の貴族居住地ないし寺院跡の存在が見込まれ、乙訓地域内で傑出した様相を示す。さらに中世は物集女莊関連の集落として展開し、戦国時代には堀と土塁を巡らせた城館跡、物集女城が成立した。物集女城は、中世の南北幹道である物集女街道と少なくとも近世に遡ることが明確な京都伏見から洛西、丹波に抜ける東西の幹道（いわば山陰道）の交差点南西に設けられている。中世の物集女における市の記録から交通拠点であり経済拠点であったことがわかる。伝統的な政治性と共に、交通拠点としての利権が物集女城の城主物集女氏の存在基盤であったと見られる。

長岡京の南西部の友岡の地は、白鳳時代以来の古代寺院がある。この地は長岡京遷都後、右京城の実質的南限となり、南郊から山陽道を使って長岡京内に入る境界に位置することとなった。そしてその北東の右京六条二坊に都城の公営市場である西市が開かれたのである。また、長岡京の南西、山崎の地は、古代依頼、水陸の交通の要として機能した土地としてよく知られている。奈良時代は、山陽道と南海道の交差点となり行基によって山崎橋が架けられ、橋寺である山崎院が造営された。山崎津も長岡京遷都以降、水運の港としての機能が高まり、山崎の地は交通拠点としての境界性を強めるのである。

境界性が形成される場は、水運、陸運の交通拠点である場合が多く、市や巷が形成され多様な階層が集まる空間が形成された。それゆえ、宗教拠点としての寺院や神社が生まれるのである。

京北の地域性とは、狭隘な盆地地形に交通拠点としての歴史的境界性を常に内包する点にあると整理できよう。

まとめ

以上述べた点を整理してまとめとする。

- (1) 下弓削銅鐸発見に至る基礎的情報を整理し、資料観察を通じて型式、年代観を述べた。
- (2) 下弓削銅鐸出土地が埋納地であった可能性を示し、梅ヶ畠銅鐸埋納地との比較から山陰への銅鐸祭祀の伝播経路に位置すること、近江・南丹波の中間的位置にあること、境界性と関係する可能性を示した。
- (3) この境界性は近畿各地の事例でもみられ、古代以降引き継がれていることを指摘した。そして、この歴史的境界性が京北の地域性であると述べた。

補注

(註1) 2016年6月、辰馬考古資料館（兵庫県西宮市）で資料調査した。同館学芸員、青木政幸氏のご協力を得た。その成果の一部は、既に地域の情報誌に紹介している（國下2016）。この度、資料調査時の実測図をトレスし、この機会に合わせて銅鐸の写真を提供いただいた。記して感謝申し上げたい。

(註2) 直接資料がないが、その可能性が高いであろうとのご教示を青木政幸氏よりいただいた。

(註3) 剣谷道跡は、周山地区卯瀬に位置する。弓削川下流の右岸にあたる遺物散布地で、現状は駒佐々江・京北線北側の水田である。東西約350m、南北約100mの範囲として周知されている（奥村1986、加納・津々池2006）。

引用文献

梅原未治 1926 「北桑田郡 第七 下弓削発見ノ銅鐸」『京都府史蹟勝跡調査会報告 第7冊』、京都府

下弓削銅鐃と京北の地域的特性

- 岡崎研一・細川康晴 1988 「上中城跡第5次」『京都府埋蔵文化財調査概報』第27冊（財）、京都府埋蔵文化財調査研究センター
奥村清一郎 1986 「周山盆地の遺跡」『日本の古代遺跡 27 京都1』、保育社。
加納敬二・津々池惣一 2008 「右京区京北の遺跡分布調査」『京都市内遺跡分布調査報告 平成17年度』、京都市文化市民局
(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989 『京都府弥生土器集成』
國下多美樹 2016 「なぜ? なに? 京北考古学研究(3)」「あうる京北 友の会だより」161号
國下多美樹 2020 「古代地域形成論—受け継がれる時空間の意識—」『泉森皎先生喜寿記念論集』
小池寛 1995 「塔遺跡発掘調査概要」『京都府埋蔵文化財調査概報』第64冊、(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
難波洋三 2005 「神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡」『ドイツ展記念概説 日本の考古学』上巻、学生社
難波洋三 2006 「朝日遺跡出土の箭削鉄型と菱環鉗式銅鐃」『埋蔵文化財調査報告書 54 朝日遺跡(第13・14・15次)』
(『名古屋市文化財報告』69)、名古屋市教育委員会

國下多美樹（文学部教授）

京北の古墳時代

熊井 亮介

1.はじめに

京北地域には、現時点で縄文時代～近世にかけての遺跡及びその候補地が 118 箇所存在する⁽¹⁾。その中で、古墳時代の遺跡は約 50 箇所あり総数の約半分を占める。特に古墳・古墳群は 43 箇所、総数は 235 基を数える。当地域の古墳分布の密度は京都府下でもトップクラスと考えられ、京北地域を特色付けるとともに、地域史を復元するうえで欠かすことの出来ない要素である。

しかし、本地域の古墳・古墳群についてはほとんどのものが測量調査等も実施されておらず、また発掘調査が実施され内容が判明したものもごく一部にとどまる。このように各古墳の基礎情報が不足した状況もあってか、本地域の古墳・古墳群が研究の俎上に上がることはこれまでほとんどなく、その様相についても不明瞭となっている。以上のような状況を鑑み、本稿では京北地域の古墳時代の遺跡についての情報の整理を行い、その分布状況について考察を行いたい。また、古墳の消長を周辺域と比較し、本地域の特色について考えてみたい。

2.既往の調査成果

前述のとおり、京北地域で実施された発掘調査は少ない。ここでは測量・発掘調査が実施された古墳時代の遺跡について、その成果を簡単にまとめておきたい。なお、本節では調査等により古墳時代の遺構が確認されている事例のみを対象とした。

東山遺跡（A）上桂川と弓削川の合流点の南側の丘陵に所在する。1999・2000 年に発掘調査が実施されており、時期が明確でないものもあるが古墳時代中期を中心とする時期の竪穴建物を複数棟確認している。また、少量ではあるが韓式系土器も出土している。対岸の丘陵上に所在する周山古墳群との関りが想定される。

塔遺跡（B）山国盆地の桂川右岸域に所在する。立合調査や複数回の発掘調査が実施されており、縄文～中世にかけての遺構・遺物が確認されている。このうち、1994 年の発掘調査では古墳時代後期の掘立柱建物 2 棟と L 字型に屈曲する柵列が確認されている⁽²⁾。掘立柱建物は重複した位置関係にあり、大きいものは南北 3 間で東西 5 間以上、小さいものは南北 2 間で東西 4 間の規模を有する。この遺構は出土遺物から TK209 型式期に位置付けられている。

上中遺跡・上中太田遺跡（C）これまでに上中遺跡では 6 回、上中太田遺跡では 1 回の発掘調査が実施されている。上中遺跡では、1 次調査で弥生時代後期～古墳時代前期にかけての旧流路、3 次調査で古墳時代前期の土師器を多量に含む粘土探柵坑とみられる不整形土坑群、5 次調査で古墳時代前期の竪穴建物・柱穴・土坑などが確認されている。また、上中太田遺跡では古墳時代後期の竪穴建物が確認されている。

周山古墳群（1）9 基の古墳で構成される古墳群である。1～4 号墳について部分的な調査が実施されている。1974 年に同志社大学考古学研究室が 1 号墳の発掘調査、2000 年には京北町教育委員会が 1・2・4 号墳等について部分的な調査を実施している。1 号墳については現在まで正式な発掘調査報告書は刊行されておらずその詳細は不明な点が多い。このような状況を加味し、龍谷大学考古学研究室が 2013 年に測量調査を実施し、その成果を報告した。また、同年には辻川哲朗氏が 1974 年の発掘調査日誌等をもとに整理した情報を出土した埴輪とともに報告している。これらの調査等により、1 号墳の情報の一端が明らかとなっており、1 号墳は葺石と埴輪を有する 1 辺 16.5 m ほどの方墳、2 号墳は一辺が 13 m ほどの方墳、4 号墳が 1 辺 17 m ほどの方墳と考えられる。なお、1 号墳は出土した埴輪から古墳時代前中期から中期前葉に位置付けられ、京北地域で確認されている数少ない首長墓と評価される。

のぼりお古墳（6）1992 年に発掘調査が実施されている。調査の結果、直径 13m ほどの円墳であり、無袖式の横穴式石室を有することが明らかとなった。須恵器や土師器、鉄刀、不明鉄製品などが出土しており、6 世紀末から 7 世紀初頭に位置付けられる。

塔村古墳群（9）2 基からなる古墳群である。1 号墳は直径 20 m ほどの円墳である。無袖式の横穴式石室が確認されており、7 世紀に位置付けられる。現在も開口しており、京北地域では数少ない石室実測図が公表されている古

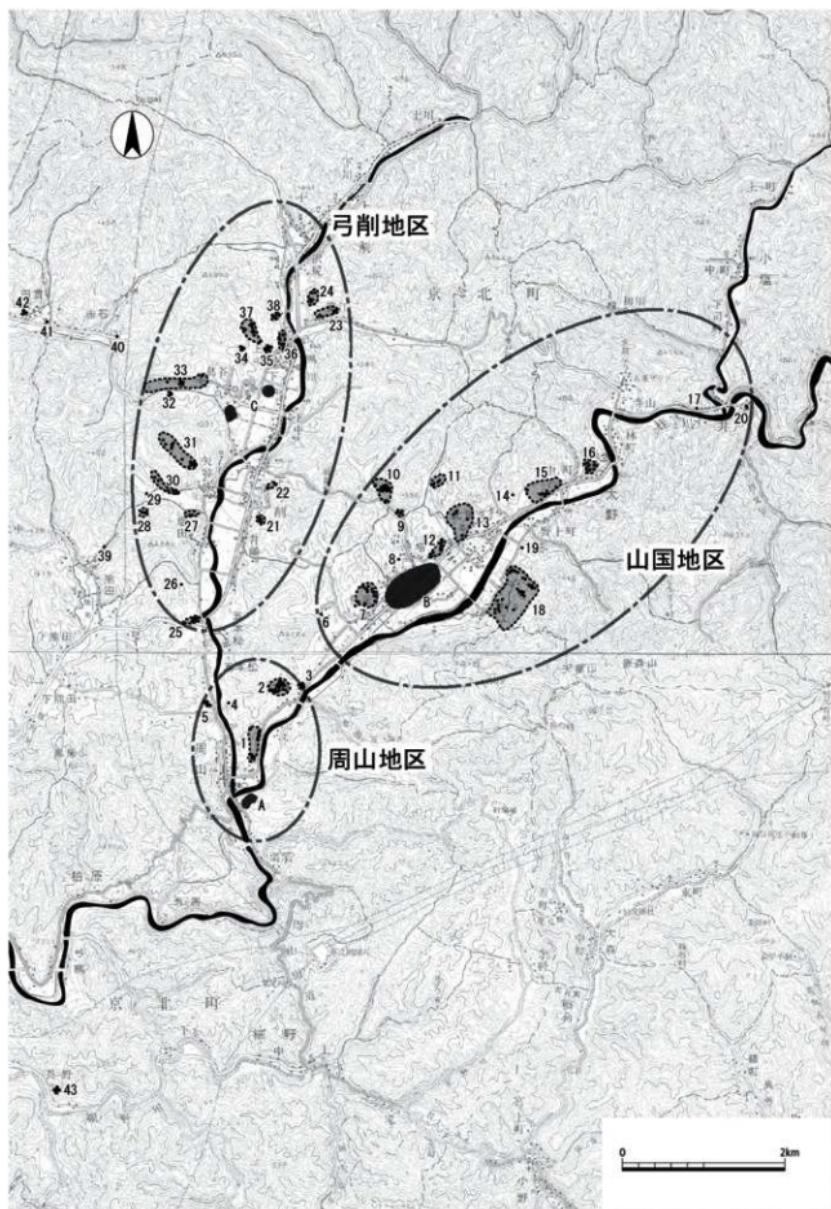


図 30 京北町の古墳分布図

表3 京北地域の古墳時代の遺跡一覧

図番号	遺跡地図	種類	種類	地区	備考
A	2089	東山遺跡	散布地	周山	中期～後期の堅穴住建物を確認。
B	2019	塔遺跡	集落	山国	後期の掘立柱建物跡とL字型の柵列を確認。
C	2048	上中太田遺跡・上中遺跡	集落	弓削	前期・後期の堅穴建物などを確認。
1	2033	周山古墳群	古墳	周山	方墳4基・円墳5基。周山1号墳は前期末の首長墓。
2	2030	折谷古墳群	古墳	周山	円墳19基。
3	2031	折谷東古墳群	古墳	周山	円墳2基・方墳1基。
4	2079	宮坂古墳	古墳	周山	円墳。
5	2078	大年古墳群	古墳	周山	円墳6基。
6	2026	のぼりお古墳	古墳	山国	円墳で無袖式横穴式石室を有する。古墳時代後期末。
7	2025	鳥居古墳群	古墳	山国	円墳13基。
7	—	八幡神社古墳	古墳	山国	神社跡西側に新規古墳。鳥居古墳群に属する古墳か。
8	2023	三明院古墳	古墳	山国	円墳。
9	2020	塔村古墳群	古墳	山国	円墳2基。1号墳は無袖式の横穴式石室を有する。
10	2024	三宅谷古墳群	古墳	山国	円墳17基。うち16基は横穴式石室か。
11	2017	院谷古墳群	古墳	山国	円墳4基。
12	2022	愛宕山古墳群	古墳	山国	円墳5基・方墳1基。
13	2016	比賀江古墳群	古墳	山国	円墳5基。
14	2013	大野西古墳	古墳	山国	墳形不明。
15	2012	大野古墳群	古墳	山国	円墳1基・方墳6基。
16	2009	長池古墳群	古墳	山国	円墳7基。
17	—	靈願寺内古墳	古墳	山国	墳形不明。境内内に所在。
18	2011	中江古墳群	古墳	山国	円墳28基・方墳4基。11号の西に新規古墳か。
19	2008	野上古墳	古墳	山国	円墳・墳形不明1基づつ。
20	2004	祖父江古墳群	古墳	山国	円墳3基。
21	2071	しが田古墳群	古墳	弓削	円墳4基。
22	2067	狹間谷古墳群	古墳	弓削	円墳2基。
23	2037	筒江古墳群	古墳	弓削	円墳4基。
24	2036	岩ヶ鼻古墳群	古墳	弓削	円墳4基・前方後円墳1基。
25	2075	出口古墳群	古墳	弓削	円墳7基。
26	2074	五本松古墳	古墳	弓削	円墳。
27	2065	塙田口古墳群	古墳	弓削	円墳4基。
28	2064	塙田古墳群	古墳	弓削	円墳3基。
29	2063	井崎古墳	古墳	弓削	円墳。
30	2062	矢谷奥古墳群	古墳	弓削	円墳8基。
31	2060	矢谷古墳群	古墳	弓削	円墳13基。
32	2051	ふくながる古墳群	古墳	弓削	円墳2基。
33	2050	鳥谷古墳群	古墳	弓削	円墳9基・方墳1基。
34	2043	上中古墳群	古墳	弓削	円墳2基。
35	2040	八幡宮裏山古墳群	古墳	弓削	円墳2基。
36	2039	彈正古墳群	古墳	弓削	円墳4基。
37	2042	宮の谷古墳群	古墳	弓削	円墳11基。
38	2038	筒江夏路古墳群	古墳	弓削	円墳4基。
39	2080	熊田古墳	古墳	他	円墳。
40	2055	田賀東古墳	古墳	他	円墳。横穴式石室か。
41	2054	白山古墳	古墳	他	直径約50mとされるが、規模縮小する可能性高い。
42	2053	田貫古墳群	古墳	他	円墳2基。
43	2094	長野古墳群	古墳	他	円墳2基。

墳である。

愛宕山古墳（12） 1982年に発掘調査が実施された。調査の結果、周溝を有する一辺20m四方の方墳であることが明らかとなった。葺石・埴輪は認められず、埋葬施設は東西方向に主軸を有する割竹形木棺の直葬である。副葬品としては、銅鏡（獸面鏡・獸形鏡・捩文鏡）、玉製品（勾玉・管玉・ガラス小玉・琥珀小玉・碧玉環玉・水晶算盤玉）、武器（鉄劍・鉄鎌）、工具（鉄斧・鎚）、土師器片が出土した。出土遺物より古墳時代中期初頭に位置付けられ、周山1号墳に後続する首長墓と考えられる。

鳥谷古墳群（33） 1997年に3号墳の一部と4号墳が発掘調査が実施された。その結果、4号墳は直径13mほどの円墳で、無袖式の横穴式石室を有することが判明した。また、3号墳については埴丘盛土と東西方向の石列が確認されている。4号墳からは須恵器や鉄劍、耳環などが出土しており、飛鳥II型式期に位置付けられる。また、4号墳より出土した三足壺は全国的に出土例が少なく、渡来系集団との関りが指摘されており興味深い（松尾1990）。

以上、既往の調査成果について触れた。集落と考えられる遺跡は弓削盆地と山国盆地、そして上桂川と弓削川の合流点で確認できる。古墳時代前期の集落としては上中遺跡、中期のものとしては東山遺跡、後期のものとしては上中太田遺跡・塔遺跡があるが、いずれも部分的な調査に過ぎず全体の様相は不明確である。古墳に關しても古墳時代前期末から中期にかけてのものが2基、後期のものが4基ほど調査されているに過ぎず、本地域全体の様相や時期的変遷などを考える上での課題が多い。また、古墳のとその造営母体となった集落についても検討材料が不足している。

3. 京北の地図区分およびグレーピング

前節では、京北地域での既往の発掘調査事例に触れた。しかし、いずれも部分的な調査にとどまっており、これのみで京北地域の古墳時代の様相を考えることは困難である。ここでは、分布状況から古墳のグレーピングを試みたい。

地図区分については、京北地域が上桂川および弓削川によって形成された「Y」形の狭小な平野部に遺跡の分布が集中することを踏まえ、大きく弓削地区（弓削盆地）・山国地区（山国盆地）・周山地区（弓削川と上桂川の合流点付近）、そしてその3地区から外れたものをその他地域として、4つの地区に区分する。

周山地区 この地区は、弓削川と上桂川の合流点付近にあたる。大年古墳群（5）を除き、両河川に挟まれた丘陵部に古墳が分布する。この地区には5つの古墳・古墳群が確認できる。総数は38基ほどで、墳形別にみると方墳5基、円墳33基となる。この中で時期などを判明するのは古墳時代前中期～中期前葉に位置付けられる周山1号墳（1）のみで、ほかには折谷古墳群が横穴式石室を有する後期古墳と想定されている程度である。京北町域では、古墳時代前・中期に遡る古墳は現時点での周山1号墳と、山国地区的愛宕山古墳（12）しか確認されておらず、この両古墳は京北地域の首長墳と考えられている。これまで、愛宕山古墳が「周山盆地の全域を対象とする地域支配を確立した初代首長の墳墓」（京北町1993）との評価がなされているが、時期的には周山1号墳がより古いと考えられ、この評価は周山1号墳にこそふさわしいと考えられる。周山地区は弓削川と上桂川の合流点に位置するが、弓削・山国地区と比して平野部が少なく、かつ古墳の分布数も少ない。この地域に現段階で最も時期が遡る周山1号墳が所在する点は、首長墓の性格を考えるうえでも興味深い。また、1号墳の北西に所在する4号墳は1号墳と同じ程度の規模を有しており、その関係性が注目される。なお、上桂川を挟んだ南側の丘陵には古墳時代中期の集落と考えられる東山遺跡が所在しており、将来的に周山1号墳とその造営母体という視点からも検討をする必要があろう。

山国地区 上桂川沿いの地域にある。塔遺跡が所在する付近は、南北に細長い山国盆地の中で平野部の幅が最も広がる場所にあたり、その周辺の丘陵部に多くの古墳が分布する。15の古墳・古墳群があり、その総数は103基に上る。墳形でみると、円墳が88基、方墳が11基、墳形不明が4基となり、他地区に比して方墳が多い点は注目される。

この地区的古墳は、上桂川の左岸及び右岸で大別でき、さらに右岸域のものは上桂川からのびる谷単位など6つのグループに細分できる。まず一つ目は、現在の京北鳥居町中山田の谷付近に所在するのぼり古墳（6）と鳥居古墳群・八幡神社古墳（7）からなる一群である。そして、二つ目に京北塔町の三明谷沿いに広がる三明院古墳（8）・塔村古墳群（9）・三宅谷古墳群（10）からなる一群。三つ目に三明谷の北東、京北森林公園付近の谷沿いに展開する院谷古墳群（11）・愛宕山古墳群（12）・比賀江古墳群（13）の一群。四つ目に、山国盆地の北側で、上桂川右岸沿いの丘陵部に所在する大野西古墳（14）・大野古墳群（15）・長池古墳群（16）からなる一群。上桂川左岸の丘陵部に展開する中江古墳群（18）・野上古墳（19）の一群。そして、山国盆地からはずれた上桂川と小塩川の合流点付近に所在する靈廟寺古墳（17）と祖父江古墳群（20）からなる一群である。

山国盆地に所在する古墳のうち、時期が判明するのは6世紀末から7世紀初頭に位置付けられるのぼりお古墳と中期初頭に位置付けられる愛宕山古墳のみである。未調査ではあるが、大野古墳群や中江古墳群では方墳が確認されている。京北町域で確認されている古墳時代前・中期に遡る古墳はいずれも方墳であり、同じ墳形を有するこれらの古墳の時期や属性が注目される。また、「京北町遺跡地図」には中江古墳群に前方後円墳もしくは前方後方墳が存在する可能性を示す表現が確認でき、非常に興味深いものの現時点で確実なダブルマウンドの古墳は本地域では確認されていない。

山国地域では、集落としては塔遺跡が確認されている。この塔遺跡付近は山国盆地内でも最も平野部の幅が広がる箇所であり、集落に最も適した場所と考えられる。この付近で将来的に古墳時代の遺構・遺物が確認される蓋然性は高い。

弓削地区 この地区は弓削川沿いの地域にある。現在の京北五本松町から京北上中町にかけては、弓削川沿いに南北4kmほど平野部が広がっており、それを取り囲む丘陵部に古墳が多く分布する。18の古墳・古墳群があり、その総数は87基に上る。墳形でみると、円墳が85基、方墳が1基、前方後円墳の可能性があるものが1基となる。

この地区的古墳は弓削川の左岸及び右岸で大別でき、さらに谷等の単位で計7つのグループに細分できる。まず一つ目は、弓削川左岸の丘陵上に展開するしが田古墳群(21)・狹間谷古墳群(22)の一群である。二つ目は同じく弓削川左岸で、京北上弓削町付近を西流する小河川と弓削川の合流点付近に所在する筒江古墳群(23)・岩ヶ鼻古墳群(24)からなる一群。三つ目は弓削川右岸で、京北五本松町付近から西にのびる谷沿いに所在する出口古墳群(25)の一群。四つ目は、弓削川右岸で矢谷付近に所在する塙田口古墳群(27)・塙田古墳群(28)・井崎古墳(29)・矢谷古墳群(30)・矢谷奥古墳群(31)の一群。五つ目は、鳥谷沿いに展開するふくがなる古墳群(32)・鳥谷古墳群(33)からなる一群。そして、六つ目は弓削盆地北部の久保谷付近に所在する上中古墳群(34)・八幡裏山古墳群(35)・宮の谷古墳群(37)からなる一群。そして最後は、弓削盆地北端の弓削川右岸に面する丘陵部に分布する・彈正古墳群(36)・筒江夏路古墳群(38)の一群である。

弓削地区的古墳で時期が判明するのは、鳥谷4号墳のみである。それ以外には、岩ヶ鼻・矢谷・矢谷奥古墳群が横穴式石室を有する後期古墳と想定されている。また、「京北町遺跡地図」によると岩ヶ鼻2号墳が前方後円墳とされるが、地図には円墳の表現しか認められず、表には「直径 約20m」と記されているのみである。したがって、現地時点において2号墳が前方後円墳か否かは不明と言わざるをえない。

なお、集落としては古墳時代前期の竪穴建物が確認されている上中遺跡、後期の竪穴建物が確認されている上中太田遺跡が存在する。

その他 前述の3つの地域より外れるものをまとめてその他とした。いずれも直接、弓削・山国盆地とは接しない箇所に分布し、その総数は7基である。ここでは、立地から3つのグループに分けておきたい。まず一つ目は、矢谷を抜けた先に所在する熊田川の北側に所在する熊田古墳(39)。二つ目は、鳥谷を西に抜けた先の田原川右岸に所在する田貫東古墳群(40)・白山古墳(41)・田貫古墳群(42)からなる一群。そして、周山地区から南西に4kmほどの場所に所在する長野古墳群である。このうち白山古墳は直径50mほどの円墳とされているが、現地を確認すると墳丘下部では部分的に岩盤が露出している。岩盤の上の土で構成されている部分を本来の古墳の範囲ととらえた場合、直径20m前後の円墳と考えられる。この想定が正しければ、その他の地域には小型の円墳が少数分布する状況が認められるのみである。

以上、京北地域の古墳時代の遺跡について分布・立地からグルーピングを試みた。山国・弓削地区では各盆地内のも最も平野部の幅が広がる場所、かつ弓削・上桂両河川の攻撃面を避けた微高地に集落が確認できる。また、その集落を中心とした周辺の丘陵部に古墳が多く分布している。これらの古墳は両河川からのびる谷等に沿って分布しており、それによっていくつかのグループに分けられる可能性が高い。それに対して、周山地区では弓削・山国地区と比して古墳の分布数が少なく、平野部の面積もかなり限られている。東山遺跡は弓削・山国地区の集落とは立地が異なり、上桂川の攻撃面に位置し、かつ丘陵上に立地する。古墳の分布状況や集落の様相を比較すると、周山地区はやや様相が異なる。これは、両河川が合流する周山地区的特性とも考えられ、現段階で時期が最も遡る首長墓の周山1号墳の存在と合わせて考える必要があろう。

本来的には、周辺の集落の様相や各古墳の諸要素を加味した上でグルーピングを行うべきだが、本地域では情報量が圧倒的に不足している。このような状況下では、まず試案としてグルーピングを示すことにも一定の意義があろう。

	丹波		近江		山城	
	加古川流域		由良川流域		越前・太秦	
	大堰川流域	丹波	近江	湖西	山城	轄枝
1 期	高田(2)					
2 期	丸山(14) 中里(4)	高田(4) 中里(12)	高田(16) 周山(14) 高田(14) 天守(14)	高田(14) 高田(14) 高田(14) 高田(14)	高田(14) 高田(14) 高田(14) 高田(14)	高田(14) 高田(14) 高田(14) 高田(14)
3 期						
4 期			高田(15) 天守(25)	高田(14) 天守(25)	高田(14) 高田(14)	高田(14) 高田(14)
5 期	高田(4)	高田(3)	高田(16) 高田(14) 高田(14)	高田(16) 高田(14) 高田(14)	高田(16) 高田(16) 高田(16)	高田(16) 高田(16)
6 期	高田(2)	高田(3)	高田(16) 高田(14) 高田(14)	高田(16) 高田(14) 高田(14)	高田(16) 高田(16) 高田(16)	高田(16) 高田(16)
7 期	高田(14)	高田(14)	高田(16) 高田(14) 高田(14)	高田(16) 高田(14) 高田(14)	高田(16) 高田(16) 高田(16)	高田(16) 高田(16)
8 期	高田(13)	高田(14)	高田(16) 高田(14) 高田(14)	高田(16) 高田(14) 高田(14)	高田(16) 高田(16) 高田(16)	高田(16) 高田(16)
9 期	高田(2) 大河(2)	高田(2) 大河(2)	高田(16) 高田(14) 高田(14)	高田(16) 高田(14) 高田(14)	高田(16) 高田(16) 高田(16)	高田(16) 高田(16)
10 期	高田(2) 大河(1)	高田(2) 大河(1)	高田(16) 高田(14) 高田(14)	高田(16) 高田(14) 高田(14)	高田(16) 高田(16) 高田(16)	高田(16) 高田(16)
後 期						

図 31 京北地域及び周辺地域の主要古墳群年表

4. 周辺地域の比較

以上、前節まで既往調査成果と古墳のグルーピング試案を示し、京北地域内の古墳について触れた。ここでは、最後に周辺の各地域と比較を簡単にではあるが行って結びとしたい。

京北地域は山に囲まれた地域であり、狭小な平野部しか有さない。しかしながら、多くの古墳が確認されている背景として、当該地が丹波・山城・近江・若狭を結ぶ交通の要衝であったことが考えられる。これまで、想定された各地域とのルートとしては、大堰川を下り八木町を経て丹波国守の所在する亀岡市を通り嵯峨野に至るもの、上桂川を週上し花脊を経て近江国に至るもの、周山から北上して陸路で若狭国に至るもの、右京区梅ヶ畠から轟を経由し周山に至るもの¹⁾の4つのルートが想定されている。これ以外にも、花脊から南下すれば鞍馬を経由して京都盆地の北西部に至る。ここでは、以上のルートを重要視し、丹波（加古川流域・大堰川流域・由良川流域）、山城（太秦・嵯峨野、幡枝、鴨東・東山）、近江（湖西部）と比較したい。図2は、それら各地域の主要古墳の編年表である。

まず、現段階における京北地域の古墳の特徴をまとめると①古墳の出現が遅れること②古墳時代前・中期に遡る古墳が少ないと③首長墓として方墳が造営されていること、④現段階では前方後円墳や前方後方墳といったダブルマウントの古墳は認められないこと、⑤古墳時代後期に位置付けられる可能性の高い円墳が多量に存在すること、⑥確認されている後期古墳は6世紀末から7世紀代のものであることがあげられる。

まず、①についてである。古墳の出現が周辺域に比べて遅れる点については、由良川流域や山城各地域で認められる。由良川流域では古墳時代前期初頭に位置付けられる青野西遺跡SX49などが確認されている。しかし青野西遺跡SX49は墳形こそ前方後方墳であるが、その実態は前代の墓制の様相を強く引くものであり定型化した古墳としての要素が薄い。また、不整形な方墳である成山古墳や寺ノ段2号墳についても同様である。前方後円墳編年4期に出現する広峯15号墳は、景初四年銘盤竜鏡を出土した前後後円墳として著名だが、外表施設はなく主体部も木棺直葬であり、伝統的な墳墓群中に所在する。しかし、この段階で前方後円墳が認められる点は一つの画期と捉えられる。また、大堰川流域内（亀岡市域）では、前期後半に円墳である向山古墳が認められる程度である。

②については、山城で同様の傾向がある。古墳時代前期～中期に位置付けられる古墳としては、幡枝では幡枝1・2号墳、鴨東では八坂方墳や将軍塚古墳群が認められる程度で、嵯峨野・太秦では古墳時代後期初頭以前に遡る確実な古墳はこれまで知られていない。③については、由良川・大堰川流域や鴨東・東山地域で認められる。由良川・大堰川流域で、古墳時代中期を通して累代的に方墳が顕著に造営されているが、鴨東・東山地域では単発的に八坂方墳のみが認められる。また、山城の幡枝地域では時期不明ながら林古墳群や西山古墳群で長方形墳が認められており、これらも含まれる可能性があり注目される。

④については山城の幡枝と鴨東・東山地域が共通する。⑤については、いずれの地域も古墳時代後期の群集墳が認められる。しかし、古墳時代前・中期に顕著な古墳が認められないにも関わらず、多くの後期古墳が認められる地域としては、山城の幡枝や太秦・嵯峨野があげられる。なお、⑥については一般的に群集墳は古墳時代後期後半以降に顕著に認められること、京北地域の時期が判明している後期古墳がごく一部しかないと踏まえるならば、現段階で⑥がこの地域の顕著な特徴といえるか否かについては断定できない。

以上、簡単にではあるが周辺地域との比較を行った。その結果、京北地域の動向は丹波内では大堰川・由良川流域、山城では太秦・嵯峨野、幡枝、鴨東・東山の各地域と類似した傾向を有することが分かった。特に、八坂方墳については古墳時代中期の方墳としては京都市内で特異な存在であったが、京北町から花脊・鞍馬を経由したルートを想定することによって、丹波地域との関りで評価できる可能性がある。

現段階では、資料的制約もありそれほど踏み入った考察を行うことはできなかったものの、古墳のグルーピングや周辺域での動向の比較検討により、多少なりとも京北地域の古墳時代の実像に迫れたならば幸いである。今後の京北町域の調査・研究に期待したい。

註

1) 公表されている京都市遺跡地図台帳を参考に遺跡数を算出した。

2) 報告書内では掘立柱建物3基と報告されている。ただし、掘立柱建物1は、建物跡として復元するには柱穴の位置・数の点から検討の余地があると考えられる。そこで、ここでは掘立柱建物1を柵列として認識している。

3) 周山4号墳では、5世紀代のものと思われる須恵器が表面採取されている。

4) この点については、京都府教育委員会「4. 周山瓦窯発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報」1979の中の歴史的環境で触れている。

【参考文献】

- 宇野隆志 2014 「V-3 将軍塚古墳群(平成24年度 No.93)」『京都市内遺跡試掘調査報告』平成25年度
- 奥村清一郎 1988 「大隅川水系における前・中期古墳の動向」『日野昭博士還暦記念論文集・歴史と傳承』
- 京都市文化市民局 2007 『京都市遺跡地図台帳』第8版
- 2012 「平安京以前古墳が作られた時代ー」京都市文化財ブックス第26集
- 京都府教育委員会 1979 「4. 周山瓦窯発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概報」
- 京都府理蔵文化財研究会 2000 『京都の首長墳』南山城ブロック
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984 「7. 上中道跡発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報 第10冊」
- 1986 「7. 上中道跡第3次発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報 第20冊」
- 1988 「2. 上中道跡第5次発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報 第27冊」
- 1995 「3. 塔跡発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報 第64冊」
- 1998 「5. 烏谷古墳群発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報 第82冊」
- 2000 「3. 東山遺跡発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報 第92冊」
- 2001 「2. 東山遺跡第2次発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報 第99冊」
- 京都府立丹後郷土資料館 1978 「両丹地方の方墳」常設展資料 4 京都府立丹後郷土資料館
- 京北町誌編さん委員会 1975 『京北町誌』
- 京北町教育委員会 1983 『愛宕山古墳発掘調査概報』京都府京北町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 1992 『のぼりお古墳発掘調査概報』京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- 2001 『周山古墳群 高梨経塚群 高梨子遺跡 発掘調査概報』京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
- 近藤義郎編 1992 『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社
- 平良泰久 1987 『方墳二態』『京都府埋蔵文化財論集 第1集』
- 高橋克壽 2017 『埴輪からみた丹波の方墳』『平成28年度 京都府域の文化資源に関する共同研究報告書(丹波編)』
- 辻川哲朗 2013 『丹波・丹山1号墳出土埴輪について』『同志社大学歴史資料館館報 第16号』
- 富山直人 2007 『地域別概説 京都丹波の横穴式石室』『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局
- 林博通 1998 『古代近江の遺跡』サンライズ出版社
- 広瀬和雄 1992 「第3章 前方後円墳の畿内編年」「前方後円墳集成 近畿編」山川出版社
- 細川修平 2011 「三 丹波」「講座日本の考古学7 古墳時代 上」青木書店
- 2011 「四 近江」「講座日本の考古学7 古墳時代 上」青木書店
- 松尾良晃 1990 「岐阜県不破郡垂井町鏡戸古墳出土特殊須恵器(三足壺)について」『大垣市文化財調査報告書』第16集
- 森浩一 1976 「26-24 周山1号墳」『日本考古学会年報27』日本考古学協会
- 龍谷大学考古学実習室 2013 『龍谷大学考古学実習』NO.9
- 2014 『龍谷大学考古学実習』NO.10

熊井亮介 (京都市文化財保護課)

京北町出土中世遺物と丹波型瓦器椀

伊野近富

はじめに

上中城跡で出土した遺物は、旧丹波国内でどのような位置を占めるのか。本稿は京北町内で出土した遺物を紹介し、その位置を明確にしたい。さらに、丹波特有の瓦器椀である丹波型瓦器椀についてその特徴を明示し、今後の研究の指標をしたい。

1. 京北町出土中世遺物

京都市右京区京北町で出土する中世遺物は、土師器皿、瓦器椀・皿、須恵器鉢・壺、陶器壺・壺、古瀬戸椀・皿、中国製白磁椀・青磁碗などである。また、希少な遺物としては高麗・朝鮮王朝陶磁や石鍋がある。今回提示したのは塔遺跡・上中遺跡・藤原經塚（毘沙門谷遺跡）、東山遺跡の4遺跡である。京北町の遺跡は白鳳時代の寺である周山庵寺を中心として「V」の字状に2方向に延びる谷に存在している（図32）。「V」の字の左側（京北町西部）に上中城跡・上中遺跡、右側（京北町東部）に塔遺跡・藤原經塚（毘沙門谷遺跡）、付け根（京北町中央部）に東山遺跡が位置している。主要遺跡の出土遺物を図示した（図33）。なお、（）内番号は報告書掲載図の番号である。

塔遺跡（京都府理文セ 1995）では緑釉陶器椀、須恵器壺・鉢、土師器皿、瓦器椀が出土している。1～8は土坑6から出土した。1～6はいわゆる「て」の字状の土師器皿である。薄手で平安京内膳町跡 SK19段階と1段階古い段階に相当し（京都府 1980）、10世紀中ごろから後半である。平安京内で出土するタイプと近似している。7は近江系綠釉陶器椀である。一般的な近江型緑釉陶器の高台には、その内側が段状を呈しているが、本例はなく初期の製品と考えられ、10世紀前半から中ごろである。8は須恵器壺である。口縁部の形状から亀岡市篠窯で、10世紀前半である。京北町内で出土した緑釉陶器は上中城跡（上中遺跡）と本例の2例が確認されている。また、篠窯須恵器壺は1例だけであり、これらが平安京で多く出土し、地方では国府などの有力地で多いことから、平安時代中期の塔遺跡は有力地であったことがわかる。

9・10・13は土坑10から出土した。9・10は瓦器椀である。表面が摩滅しミガキの有無は不明だが、口径が11.6～12.5cmと小さく、丹波型Ⅲ～Ⅳ期（後項で編年を提示する）で、13世紀後半である。13は東播系須恵器こね鉢で、口縁部がやや分厚く、外形がシャープでないので、13世紀末から14世紀前半である。11・12は包含層出土の瓦器椀である。口縁端部内面に沈線を施しており、楠葉型模倣であり、12世紀に相当する。楠葉型模倣については後述する。



図32 旧丹波国と主要遺跡

跡)の発掘調査(京北町 1995)では、緑釉陶器椀か皿、須恵器鉢、土師器皿、瓦器皿・椀、陶器天目茶碗、中国製白磁椀が出土している。14~16は城跡の北方で出土した。14は東播系須恵器こね鉢である。口縁端部はやや分厚く、13世紀代である。15・16は陶器天目茶碗である。形状から古瀬戸から瀬戸・美濃大窯製品で14~17世紀である。17は京都系緑釉陶器椀もしくは皿の底部である。削り出し高台であるため、京都系と判断した。また、釉色は淡緑色である。18・19は城跡の南西方で出土した。18は瓦器皿である。口径は8.8cmで、12世紀後葉である。19は瓦器椀である。高台は低くなっている、丹波型III-3期で13世紀後半である。20~23は城内で出土した。20は中国製白磁椀である。高台の形状から中国南部福建省周辺産で、12~13世紀であろう。21は瓦器椀である。19より高台は低くなっている、丹波型III-4期で13世紀後半である。22は土師器羽釜である。口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部は内側に肥厚させたもので、14世紀代の大和型土釜である。23は瓦器鉢である。内面に1本ずつ刻線を施し、摺り目としたものである。丹波鉢と形状が似ており、その安価な代用品であろう。口縁部がやや内傾するので16世紀代と考えたい。

藤原經塚(毘沙門谷遺跡)(京都府 1980)では瓦器椀、中国製青磁椀が出土している。經塚は塔遺跡などがある丘陵部から南側で、上桂川のほとりにあった。24・25は瓦器椀である。口径は11.5cm前後で、体部内面には粗いミガキが施される。高台は低くなった段階で、丹波型III-4期に相当し13世紀後葉である。典型的な丹波型瓦器椀である。26・27は中国龍泉窯青磁椀である。26は無文で、27は体部外面に立体的な錦蓮弁文を施す。田中克子編年Ⅲ期(田中 2016)では、13世紀前半に比定されているが、福岡市報告では文永二年(1265)と墨書きされた資料があり、13世紀中葉までは一般的に使用された可能性がある。

東山遺跡は(京都府埋文セ 2001)、京都市街地から京北盆地に入ったところで、上桂川に向かって北側に張り出する丘陵にある。川を隔てた北側には周山庵寺があり、北西方向には戦国時代末期の周山城跡がある。古代から中世にかけて物流が行きかう結束点であり、拠点的な場所の一例にある。

遺物には土師器皿・羽釜、瓦器椀・鍋、東播系須恵器鉢、中国製青磁椀、天目茶碗、石鍋などがある。47の石鍋はSK23出土、32~35の土師器皿がSK35出土で、これ以外は包含層出土である。28は黒色土器A類(内黒)の高台で、内面にヘラミガキが顕著に認められる。平安時代であろうか。丹波や丹後地域では、中世の黒色土器は鎌倉時代初めまで生産されているが、底部は糸切りであり、本例が貼り付け高台と考えられることから、平安京などの都市部からの土器に影響を受けたものと考えられる。SK35出土土師器皿の口径は7.5~8.5cmであるので、鎌倉時代である。36~39の土師器皿の口径は8~8.5cmであるので、SK35出土品よりや大きいことからやや古く、平安時代末期から鎌倉時代(12世紀後半~13世紀)である。40~45は瓦器椀で、40は口径11.5cm、45は口径14cmである。小ぶりのものは高台がかろうじて付くもので丹波IV-1期、すなわち鎌倉時代後期(14世紀前葉)と考えられる。30は天目茶碗と報告されている。31は東播系須恵器こね鉢である。口縁部がやや分厚くなっている。また、上方につまみ上げていることから14世紀前半である。46は大和型土釜(土師器羽釜)である。47は長崎県に主要な生産地がある滑石製石鍋である。京都では平安京(中世京都)を中心に有力地で出土する。48・49は京都系の瓦器鍋である。体部から口縁部は「く」の字状で口縁部があまり屈曲しないタイプで鎌倉時代である。

以上、京北町内で出土する土器・陶器器の構成は、丹波地域の中世遺跡で出土するものと同様である。在地の土師器皿、丹波国内の瓦器椀、丹波すり鉢を模倣した瓦器鉢を基調とし、近畿である播磨国の東播系須恵器こね鉢、山城国生産の瓦器鍋などをもつ。中世の有力地では中国製白磁・青磁、九州長崎産石鍋を少量所有することも一般的な特徴である。しかし、京北町内で特徴的な点もある。体部外面にタタキを施す丹波型鍋(播磨にも多い)で播磨型ともいう)が一般的に出土する丹波地域にあって、山城型鍋・釜に交じて、一定量大和型土釜(土師器羽釜)が出土することである。14世紀と考えられるこの製品が目立つことは、この時期に大和とのつながりが深かったことを示している。この状況は中世京都でも同様である、大和一京都一京北という関係が窺われる。

なお、塔遺跡と上中城跡では京都系の「て」の字状土師器皿、窯須恵器鉢・壺、緑釉陶器、近江系緑釉陶器が出土したことは注目できる。これらは平安京から全国の国府およびその周辺で出土するのである。平安時代中期における2遺跡は中央との結びつきが深かったといえよう。

2. 丹波型瓦器椀

丹波型瓦器椀については橋本久和による研究を嘴矢とする。上牧(かんまき)遺跡報告書(橋本 1980)で、近畿

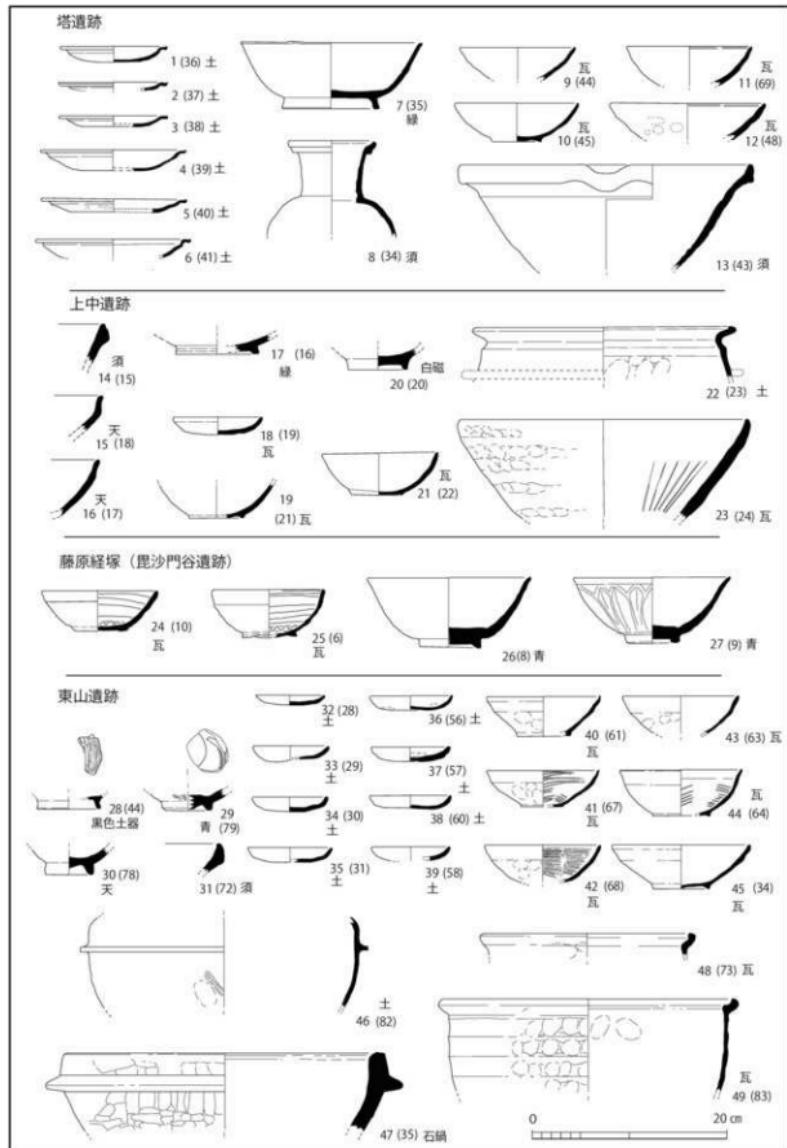


図33 京北町出土の中世遺物

で出土する瓦器概を楠葉型・大和型・和泉型・丹波型の4類型にわけて、旧国単位に生産されていたことを予想した。丹波型のみの研究としては、亀岡市出土例（伊野ほか 1985）や福知山市大内城跡出土資料（伊野 1984）での編年案を作成し、1995年には丹波地域で出土する中世土器の編年を公表（伊野 1995）した。これらの作業によって明らかとなった丹波型の特徴は、他の3型式に比べて①口径に対して底径の占める割合が大きい。②体部は内湾気味に立ち上がるもののや、直線的なものがある。③口縁部は肥厚し、外側を強くなる。口縁端部から1cm程度離れた箇所が分厚いものが多い。④丹波型初期に出現する楠葉型模倣以外に、口縁端部内面に沈線は施されない。以上である。

図34で4類型のII-1期、III-1期、IV-1期段階の瓦器概を抽出した（橋本 2018、丹波型と口縁部イメージ図は伊野作成）。口縁部に注目すると、口縁端部から数ミリ内側に1条の沈線を施す楠葉型と、口縁端部内側に段をもつ大和型、そして何も施さない和泉型・丹波型とに分かれる。プロポーションの大きな変化は4類型とも同じで、口径が大きいものから小さいものへと変化する。高台が退化していくこと、体部内面に施されたミガキが密なものから省略され、外側は二期で消滅し、内側も粗雑化する。口径が縮小する意味は、古代律令体制で制定されていた度衡量が、古代から中世にかけて土器づくり集団の生産を保護していた荘園領主が衰退し、新興（武士）勢力が台頭することによって、掌握できなくなって、縮小化したと考えた（伊野 1987）。

図35は楠葉型と丹波型の口径と底径との関係を示したものである。II期に限定したが、丹波型は楠葉型に比べて15~17cmと口径が大きく、また、底径も5.5cm以上と大きいことがわかる。ただし、ばらつきも多い。これに比べて楠葉型は分布範囲は小さく、しかも、図では表現できなかったが、口径15cm、底径は5cm程度がもっとも多い。

図36は丹波各地で出土した瓦器概をもとに編年したものである（引用文献の項参照）。伴出した土師器皿と東播系須恵器こね鉢、および輸入陶器から組列を考えた。

個々に説明する余裕はないので、各報告書や伊野文献を参照していただきたい。なお、詳細は別稿を執筆中である。

プロポーションは3種ある。aは口縁部が直線的に外開きし、体部も直線的な杯様である。bは口縁部がやや内寄し、体部が丸みを帯びた椀様である。cはその他で浅い椀様のもの（浅碗）と、体部が屈曲した（屈曲様）ものがある。

橋本編年では楠葉型・大和型・和泉型にはI期から設定されているが、丹波型ではこれに相当する資料は提示していなかった。しかし、報告書を精査した結果、南丹市八木町池上遺跡資料がI-2期に比定できることを確認した。I-2期は南丹市池上遺跡3・4次 SXCO5とSKC10の2つの瓦器概を提示した。いずれもプロポーションbで、口径は15.6cm、底径は5.6cmである。SXCO5資料（36-1）が平安京左京内膳町SD41A新相の土師器皿と共に、SKC10資料（36-2）が平安京左京内膳町SE288下層の土師器皿と共に、11世紀後葉から12世紀初頭ごろと考えられる。なお、36-2の瓦器概は、口縁端部内面に1条の沈線を施す楠葉型模倣である。

II-1期は南丹市野条遺跡第10・12次 SD01の瓦器概を提示した。プロポーションbで、口径15.4cm、底径5.4cm、体部外側のミガキはほぼ全面に施される。口縁端部内面に1条の沈線を施す楠葉型模倣である。SD01で資料化された口縁部が残存した16点の内、15点が楠葉型模倣である。内底面にはジグザグ状暗文が施されるが、まれにラセント暗文の資料もある。

II-2期になるとプロポーションはa・b・cの3種に増える。福知山市大内城跡資料（a:36-4）、福知山市後正寺古墓資料（b:36-5）、舞鶴市大川遺跡資料（c:36-6）を提示した。舞鶴市は丹後国ではあるが、丹波国の隣地であり、丹波型供給範囲に含まれている。これらは体部外側のミガキは密なものからやや雑に施されるものに変化する。36-5は口縁部をつまみあげたものである。36-6は口縁端部内面に1条の沈線を施す楠葉型模倣である。内底面にはジグザグ状暗文が施される。他の例に比べて器高は低く浅椀様である。II-3期になると体部外側のミガキはさらに粗雑なものとなり、ミガキが施されない箇所が多くなる。暗文はジグザグ状とラセン状の2種がある。

III-1期ではほぼ外側のミガキは施されない。亀岡市出雲遺跡SD03資料はプロポーションbで、口径14.6cm、底径7.2cmである。SD03資料では暗文がわかる20点全てジグザグ状暗文である。III-2期では良好な資料は少なく、ここでは亀岡市北金岐遺跡SE24資料を提示した。この資料には古相と新相があり、ここでは古相例を提示した。外側のミガキは消滅し、内側のミガキも粗雑になる。また、高台も3角形となり、置付けは面をもたなくなる。III-3期ではプロポーションは亀岡市太田遺跡SE60掘方（a:36-13）、亀岡市北金岐遺跡SE24資料新相（b:36-14）、福知山市宮遺跡A地区（c:36-15）の3種が認められた。宮遺跡では口縁部が外側に屈曲したプロポーションc（屈曲様）が認められる。高台はさらに退化し低くなる。III-4期では亀岡市觀音芝庭寺土坑（a:36-16）、亀岡市河原尻遺跡SK17（b:36-17）、亀岡市觀音芝庭寺土坑（c:36-18）を提示した。36-16の体部は直線で

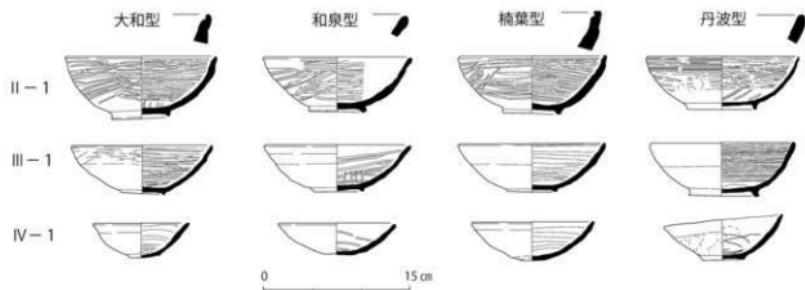


図 34 各種瓦器椀

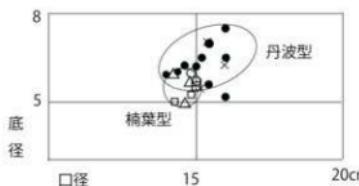


図 35 口径・底径の対比

奥谷遺跡資料を提示した。高台部分は欠損している。口径は小さくなり、内面のミガキは内面の一部だけとなる。高台も消滅している段階である。

図 37 は 8 遺跡の資料を提示したものである。南丹市野条遺跡は旧八木町の主要な集落と溝により区画された遺跡である。ここで出土した瓦器椀はプロポーション b であるが、体部は下彫れのような特徴をもつ。大川遺跡は丹後国の範囲である舞鶴市の由良川沿いの遺跡である。丹後国の中世前期の椀製品は黒色土器（内黒が多い）であり、器高が低い製品である。大川遺跡の瓦器椀は 37-4・37-5 のように器高が低いのが特徴の浅椀タイプである。口縁端部内面に 1 条の沈線を施す楠葉型模倣であるので、2 つの地域の影響を受けた製品である。37-3 は椀形で楠葉型模倣であるが、沈線ではなく、丹波型の初期例である。

福知山市大内城跡は六人部（むとべ）荘の莊官屋敷跡で、大量の瓦器椀と土師器皿が出土した。近隣の村である福知山市宮遺跡からは瓦器椀が出土したがプロポーション c の特徴的な屈曲輪タイプ（37-12）であった。また、土師器皿は在地で普遍であった糸切り底であり、大内城跡がすべて手づくね製品であることと大きな違いがある。すなわち、政治的に有力な場所では在地産ではあるが、京都系の成形技法であるてづくねの土師器皿を使用していたのである。37-8・37-9 は瓦器皿である。37-10 は深手の珍しい製品である。

多利遺跡は兵庫県氷上郡旧春日町にあった在地領主の館跡である。いわゆる兵庫丹波と呼ばれる地域である。ここではプロポーション b の丹波型瓦器椀とともに、糸切り底の瓦器皿が出土した。なお、兵庫丹波から播磨東部では稀に糸切りの瓦器椀があることを早い段階に山本三郎が紹介している（山本 1976）。京都丹波では基本的に使用されていないタイプである。なお、多利遺跡報告では、当該遺跡出土の瓦器椀の特徴として薄手であることが指摘されている（図 37-14）。狭域に供給した生産者の存在が想定される。

亀岡市觀音寺芝庵寺は奈良時代に始まる寺院であるが、中世の遺構も確認されており、講堂跡北側で検出された土坑資料を提示した。37-15 は体部内面のミガキは粗い渦巻き状に施されており、新しい傾向である。37-16 はプロポーション c の浅椀様である。亀岡市河原尻遺跡は丹波国府近隣の遺跡である。古代から丹波国の中心地であった。亀岡市犬飼遺跡は揖津国へ通じる道の近隣に造成された居館である。現大阪府能勢町は旧揖津国で、大里遺跡や野間遺跡で犬飼遺跡と同時期の丹波型瓦器椀が出土している。丹後国や揖津国など丹波国近隣にも丹波型瓦器椀が使用されたことがわかる。

楠葉型 II-1 ではなく、やや内湾しており、典型例ではない。内面のミガキもはさらに粗雑になる。また、高台も低い3角形となる。

IV-1 期では亀岡市犬飼遺跡（a:36-19）、亀岡市北金岐遺跡 SE4 資料（b:36-20）の 2 例を提示した。体部が歪になり、内面のミガキはほとんど施されなくなる。高台は低く、外底面とほぼ同じになる。

IV-2 期では良好資料がないが、福知山市

△ 楠葉型 II-2

□ 楠葉型 II-3

● 野条 SD1

× 野条 SE3

■ 丹波型

◆ 楠葉型

▲ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

◆ 楠葉型 II-1

◆ 楠葉型 II-2

◆ 楠葉型 II-3

◆ 野条 SD1

◆ 野条 SE3

◆ 丹波型

◆ 楠葉型

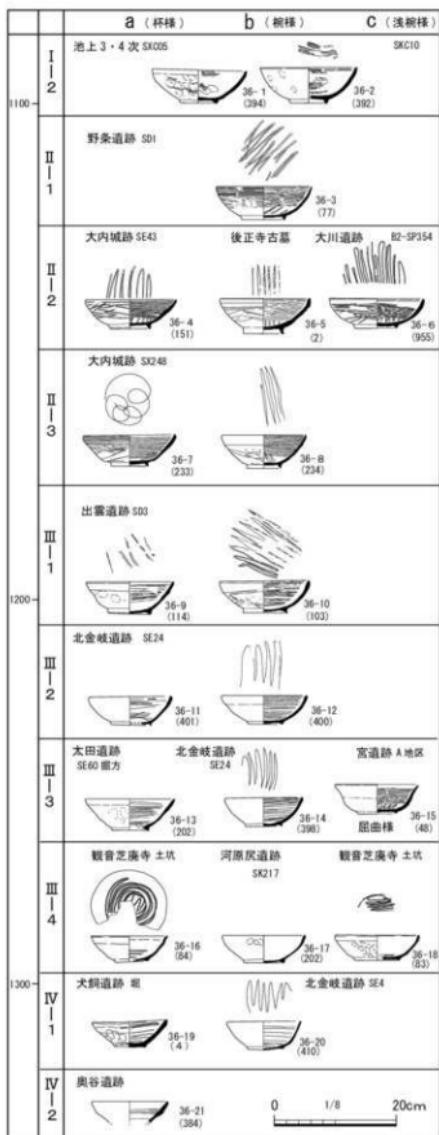


図 36 丹波型瓦器椀編年図

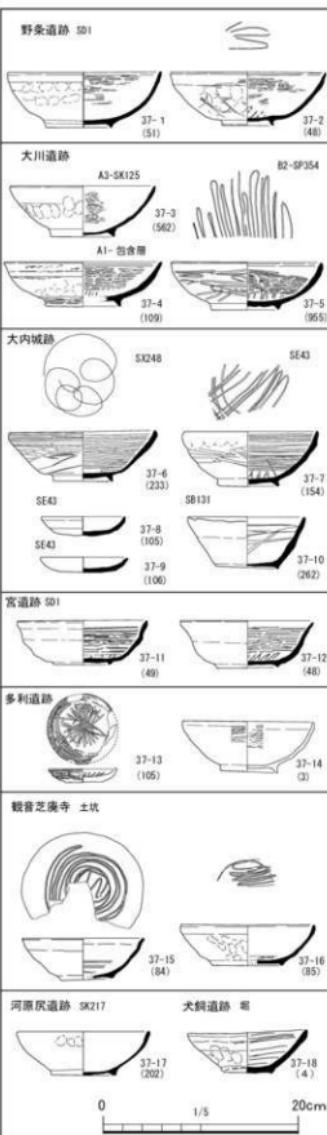


図 37 主要遺跡の丹波型瓦器椀・Ⅲ

3. 上中城跡出土高麗・朝鮮王朝陶器

高麗・朝鮮王朝陶器が、なぜ上中城跡に搬入されたのか。この搬入経路を考えてみよう。高麗・朝鮮王朝陶器は平安京～中世京都でも出土例は多くなく、2007 年段階での京都府埋蔵文化財調査研究センター調査地での出土例は 183 件中 4 件である（伊野 2015）。全国的にも、海外貿易の拠点である博多を別とすれば、島根県益田市中須東原遺跡が群を抜いて多く、459 点出土している（村上 2013）。日本海沿岸の遺跡では点々と出土しており、日本海ルートで運ばれてきた可能性が高い。しかし、詳細に見れば中須東原遺跡では、高麗時代の青磁・白磁は 12 点しかなく、表面がざらついた灰青陶器が中心で、削り出し高台内は兜巾（ときん）状と呼ばれる小さく円錐状に突起する 15 世紀代のものである。これに対して、上中城跡の場合は硬質で、削り出し高台内は兜巾状に突起する部分を削って平滑にしており、ひと手間かけたやや古いタイプと考えられる。したがって、高麗から朝鮮王朝初期（14～15 世紀前半）とすると、中須東原遺跡を中心とした日本海ルートがまだ確立していない時期のものである。

最近調査された舞鶴市大川遺跡では高麗・朝鮮王朝陶器が 21 点出土した。小型椀や皿のほか壺類が多く、高麗末期から朝鮮王朝初期の象嵌青磁壺のような上質品もある。12～14 世紀を中心としたこの遺跡では、15 世紀以降の灰青陶器はない。すなわち、中須東原遺跡を中心とした日本海ルート以前に、丹後半島周辺で中世前期日本海ルートが存在した可能性がある。丹後国府がおかれた宮津市府中周辺では、朝鮮王朝陶器が 2 点出土している（中島 2017）。しかし、15 世紀以降であるので、やはり、中世前期は舞鶴市周辺が交易の拠点と想定したほうが妥当である。

なお、別ルートが存在した可能性もある。石清水八幡宮の莊園が多い九州と石清水八幡宮では 14 世紀中葉から 15 世紀前半に比定される高麗象嵌青磁椀が出土しており、藤本史子は石清水八幡宮ネットワークの存在を想定している。上中城跡近くには八幡宮がある。平安時代の仏像や室町時代の懸从などが安置された弓削庄の信仰の中心地であった。しかしながら、弓削庄はこの時期天童寺の莊園であり、歴応 3 年（1340）に光嚴上皇が歴応寺（天童寺）造営のため寄進したとの由来がある。当時の有力寺院が船を仕立てて中国と貿易をしていたことは、韓国新安沖沈船の例（東福寺と書かれた木簡出土）がある。一般的に流通していた中国龍泉窯青磁などとは別の大寺社ルートが存在したのかもしれない。

おわりに

丹波国内では丹波型瓦器の内、プロポーション a と b とが広く分布していた。京北町独特のプロポーションは発見されていない。丹波型瓦器は他国との境界付近は例外として、一国を超える供給体制ではなく、小型品である土師器皿とともに在地もしくは郡内生産品で占められていた。鉢や甕、壺などやや大きなものは近隣諸国から供給されていた。なお、京北町の中世遺物で注目すべきは、14 世紀の大和型土釜（土師器羽釜）が目立つことで、この時期は大和や中世京都とのつながりが深いことを示している。

上中城跡の高麗・朝鮮王朝陶器の搬入については、丹後半島周辺で中世前期の日本海ルート（舞鶴）が存在した可能性を指摘した。大動脈である瀬戸内海ルートからもたらされた面的に流通するものとは違い、上質な高麗・朝鮮王朝陶器のような嗜好品は、点と点を結んだ線状ルートがあつて、遺跡で出土する場合、複数のルートが重複した結果であった可能性を指摘しておきたい。

参考・引用文献（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センターは京理セと省略する）

山本三郎 1976 「丹波出土の瓦器について」『兵庫考古』第 4 号

橋本久和 1980 「第 3 節 瓦器焼の地域色と分布」『上牧遺跡発掘調査報告書』、高槻市教育委員会

平良泰久・伊野近富他 1980 「平安京跡左京内膳町発掘調査報告」『京都府埋蔵文化財調査報告書』、京都府教育委員会

伊野近富 1984 「編年」『京都府遺跡調査報告書』第 3 冊 大内城跡、京理七

石井清司・引原茂治・伊野近富 1985 「龜岡盆地出土の瓦器について」『京都考古』第 37 号、京都考古刊行会

石井清司・中坪央暉 1985 「北金岐遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第 5 冊、京理七

脇田晴子 1986 「中世土器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ、日本中世土器研究会

伊野近富 1987 「『かわらけ』考」『京都府埋蔵文化財論集』第 1 号、京理七

辻本和美ほか 1987 「宮遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第 10 冊、京理七

京北町出土中世遺物と丹波型瓦器椀

- 加古千恵子ほか 1987 「多利遺跡群発掘調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査報告書』第 46 冊
- 樋口隆久 1988 「般音芝寺発掘調査報告」『亀岡市文化財調査報告書』第 20 集、亀岡市教育委員会
- 伊野近富 1995 「中世土器の編年（上）」『京都府埋蔵文化財情報』第 57 号、京埋セ
- 小池寛 1995 「塔遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 64 冊、京埋セ
- 人魯亨 1995 「上中城跡第 2 次発掘調査概報」『京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書第 5 集』、京北町教育委員会
- 谷口操他 2000 「池上遺跡発掘調査報告書－第 3 次・第 4 次調査」『八木町文化財調査報告書』第 6 集、八木町教育委員会
- 中川和哉他 2000 「池上遺跡第 5 次発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第 99 冊、京埋セ
- 中川和哉 2001 「東山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 92 冊、京埋セ
- 増田孝彦ほか 2001 「太田遺跡第 13 次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 99 冊、京埋セ
- 竹原一彦・森島康雄 2005 「宮内農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成 15 年度発掘調査概要」（河原尻遺跡）『京都府遺跡調査報告集』第 114 冊、京埋セ
- 高野陽子ほか 2008 「野条遺跡第 10・12 次、室橋遺跡第 5 次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第 128 冊、京埋セ
- 村上勇 2013 「高柳川・益田川河口域の沿岸道路群出土陶磁の背景」『中須東原遺跡』、鳥根県益田市教育委員会
- 伊野近富 2015 「京都府内出土の輸入陶磁器」『京都府埋蔵文化財情報』第 128 号、京埋セ
- 田中克子 2016 「日宋貿易期における博多遺跡群出土中国陶磁の変遷と流通—博多に残されたものから国内流通を考える」『中世陶磁器の考古学』第 3 号、雄山閣
- 伊野近富・綾部佑真ほか 2016 「由良川下流域緊急水防災対策事業に伴う平成 24 ~ 26 年度大川遺跡発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第 164 冊、京埋セ
- 高野陽子他 2016 「出雲遺跡第 15・16・18 次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第 166 冊、京埋セ
- 藤本史子 2016 「石清水八幡宮ネットワークによる中世土器・陶磁器の流通」『中近世陶磁器の考古学』第 3 卷、雄山閣
- 中嵩陽太郎 2017 「中野遺跡出土の貿易陶磁器の中世後期京都産土師器」『中近世陶磁器の考古学』第 7 卷、雄山閣
- 橋本久和 2018 「概論 瓦器椀研究と中世社会」、真陽社
- * 奥谷遺跡：大内城跡報告と同じ
- 犬飼遺跡：山本梓・引原茂治 2020 「丹波地域における瓦器椀の地域性」『京都府埋蔵文化財情報』第 138 号、京埋セ

伊野近富（文学部非常勤講師）

京都市指定史跡 上中城跡の活用を考える

木許 守・加藤勇太・西村早織・宮尾 李

1.はじめに

京都市指定史跡上中城址は、平成8年（1996）に当時の京北町によって町指定史跡とされた。指定面積は4,810m²である。平成17年（2005）に京北町が京都市と合併（編入）した後は、京都市指定史跡となって今日に至っている。いま、史跡の現状を見ると、元は水田であった史跡指定地の郭跡は芝草が生える広場となっており、その周囲には幅約5mの堀の痕跡が明瞭に残っている。この部分は、現在クラッシャー敷きとなっているが、その外側には隣接して数軒の民家が建っていて、生活道として利用されている。この堀跡および郭跡が史跡範囲として公有地化されており、日常的な管理として定期的な草刈や巡視が行われている。

しかし、一般の人が訪れたときにそこが指定史跡であるとわかるのは、敷地の北西隅に1枚の説明板が設置されていることくらいであろう。水田地帯にボッカリと存在している芝草の広場は、周辺住民の憩いの場となっているが、そこにつけて設置された木製のベンチと机は老朽化が進み十分に休憩スペースの用をなしていない。

このように、上中城跡は、現地が保存されて維持管理されているが、文化財としての活用が十分に行われていない現状である。そこで、本稿は、その上中城跡について、現段階で考えられることを総合して今後の活用案を提示するものである。本稿ではこのことについて3つの方向から考察を行う。

第1に市民とのかかわりである。一般に史跡を保存活用していくには、そのことに対する一般市民の同意が得られていることはもちろんであるが、史跡に対して高い関心が寄せられることが重要である。第2章では、そのことを念頭に置いて、京北地域でこれまでに文化財保護と結びつく市民活動としてどのようなものがあり、現状ではどのように展開されているかをみる。このことにより、京北地域においても文化財の保全・愛護の市民意識が高いことを再確認する。そうした市民意識の高さは今後の活用施策を展開するうえにおいて十分な土壤になり得ることを論じる。

第2に史跡のハード面の整備である。一般に史跡がかつてそこにあった姿をイメージするためには、遺構を復元展示することに一定の効果がある。第3章では、現状で考えらるる史跡の整備案を提示する。しかし、それを行うためには、発掘調査によって史跡の内容を十分に把握することが必要である。上中城跡におけるこれまでの発掘調査成果は本書でも整理されたが、現状では遺跡の平面的な輪郭などが比較的明確である一方で、その成立年代が不明確で、郭内における空間利用のあり方もよくわからない。つまり、今かつての建物などを復元しようとしたときに、発掘調査成果が未だ十分ではない。このため上中城跡の環境整備を実現するためには、まずは発掘調査の拡充が不可欠である。したがって、このような段階で示し得る環境整備案は不完全なものであろう。しかし、ここで史跡整備後の具体的的な姿を提示することは、今後の発掘調査において基本方針を決める際に大いに参考になる。例えばトレーニングの設定地点を検討するときに、将来の史跡整備を念頭に置けば、どこにどの程度の規模のトレーニングが必要であるかといったことにまで方向性を与えることができるであろう。本稿では、このような観点から、上中城跡で実現されるべき整備の姿を一つの案として提示する。今後、整備案としての精度をさらに上げる必要はあるが、ここには本案が史跡整備基本構想や史跡保存活用計画の一部になり得るものとの考え方がある。

第3に京北地域全体のなかに上中城を位置づけた活用である。上中城跡のハード面の整備が進んでいない現状では積極的な活用事業を展開することは難しい。しかし、京北地域には上中城跡だけではなく、集落跡・古墳・寺院・寺院跡・神社など、それぞれの歴史文化を背景とする多様な文化財が存在している。上中城跡は、上記のように遺跡の内容が現状ではわかっていないことも多く、単体では史跡の魅力を十分に引き出すための材料が乏しい。そこで第4章では、京北地域の歴史文化を一つのストーリーで描き出し、各文化財をそのストーリーで結びつけて上中城跡もそこに位置付けるというものである。これは、上中城を含む京北地域全体の歴史文化の魅力を発信するという考え方で、近年の文化庁の考え方にも沿った、全国で行われている情報発信の形に倣ったものである。

本稿は、以上の構成によって上中城跡のよりよい活用の方向性を模索するものである。また、特に第3章、第4章は、文化財保護行政において策定される計画等の一部と一致するものである。これは、本稿が京北に現に所在する文化財を素材とした実践的研究であることを強く意識したものである。

本稿の執筆区分は、第1章・第5章を木許が執筆した。第2章は宮尾が、第3章は西村が、第4章は加藤が執筆したが、それぞれを木許が校閲し補筆した。第3章図44 文化財情報マップの作製は全員の討議、協力のもと加藤が主に担当した。

2. 文化財の活用と市民の活動

(1) 「地域との連携」の意義と管理・活用の現状

史跡等の保存活用において、市民の積極的な活動は大きな意味がある。指定史跡等の保存活用計画を策定し、それを実行していくのは行政の役割であるが、一般論として、今日の行政の多様な職務のなかで、文化財の保存活用計画の策定業務などは、ともすれば優先順位が下げられる傾向がある。それは、要するに市民要望がそれほど大きいものではないと判断されるからである。逆に言えば、実際に史跡等の保存活用を望む市民の声が顕在化すれば、行政はその思いに対応するために予算化も厭わないであろう。問題は、潜在的には市民要望があるにもかかわらず、それが顕在化していない場合である。このときには、他の様々な行政施策が優先されて文化財保護施策が後回しになりがちなのである。

したがって、ある文化財の保存を可能にするには、市民がどの程度その文化財に関心があるかという点が重要な要素となる。必ずしも市民の文化財に対する関心が高くないのであれば、文化財保護行政のあるべき方向性の一つは、市民意識を文化財に向かわせてそれを身近なものと感じてもらうことで、文化財の保存に一定の合意を得るということにもなる。そのうえで、その文化財の活用事業を展開すれば、改めてそこに市民意識や関心が高まるという循環が生まれよう。このような好循環によって文化財の保存が可能になっていくと考えられる。

活用に関しては、さらに地域住民との連携が重要である。文化庁は、『史跡等・重要文化的景観マネジメント支援事業報告書』で、史跡等のマネジメントを進めていく際に必要になる事項の一つに、「体制・連携の確立」を挙げている（文化庁2015、59-66頁）。その「連携」として「所有者と地方公共団体の連携」など各種を例示しているが、このうちの一つに「地域との連携」を挙げている。そのうえで、事業を進めるには、所有者と地方公共団体だけでは限界があるので、「地域住民の理解や協力を得て実施することにより、保存・活用することが必要である」としている。報告書では、市民の関わり方として「史跡への誇りの創出による活動、ボランティア参加、交流への参加、寄付金等」を例示するが、市民が史跡の保存活用に関わることにより、文化財保護意識の高まりを期待するものと理解される。

市民が文化財の保護に連携することの意義は、以上のように考えられる。それでは、市民が文化財保護に関わるさらに具体的な方途とはどのようなことがあるだろうか。講演会やシンポジウム等の地域にとって歴史的意味や重要性を啓発する事業をはじめ、史跡であれば市民が主体となった実行委員会が史跡を舞台にした各種イベントを主催するなど、様々な事業が現に各地で行われている。これらの事業は、史跡の復元整備状況の段階等その史跡を取り巻く環境に応じて実施の可否や効果に違いが生じようから、どのような事業が展開されるべきであるかは、各史跡の実状に応じて個別に考える必要がある。

それでは、造構等の復元整備が行われていない上中城跡の現状を踏まえた場合、どのような事業展開が可能であろうか。そもそも様々に考えていく必要があるが、そのうちの一つに、地道な活動ながら日常的な看視・清掃の作業者として地域住民が参加することが挙げられる。住民自らが特定の史跡で実際に作業することで、史跡を大切にする気持ちが育まれることは容易に想定できよう。こうした活動は、地域住民のボランティアに支えられている場合も見受けられる。しかしボランティアによる維持管理には一定の限界があり、持続可能な方法とは言えないであろう。作業を請け負ってもらうのであれば、同等の作業対価を支払うのが現実的である。

例えば、国指定史跡で指定地が国有であれば、文化財保存事業費として「国有文化財の見廻り看視及び清掃」事業に対する国庫補助金を活用することができる。その金額には上限が決められていて現状では必ずしも十分とは言えないが、補助事業としては、例えば史跡の所在地域の自治会やシルバー人材センターなどに対する委託事業として実施することが可能である。この場合は、史跡での見廻り看視および清掃の作業者は地域住民となり、この作業自体が地域住民と史跡を繋ぐものとなり得るのである。

国指定史跡でも国有文化財ではない場合は上記の国庫補助金は充てられないが、市町村の対応によっては市町村単費で行なうことは可能であろう。まして、地方公共団体が所有する公有地であれば所有者としての維持管理が義務的に発生しよう。

そこで、改めて上中城跡の維持管理の現状を確認する。現在、上中城跡の環境に関する維持管理業務は、京都市埋蔵文化財研究所が「公益財団法人きょうと京北ふるさと公社」に委託している。委託内容は、年3回の草刈り（図38）と毎月の巡回で、実際の作業者は、同公社に登録している地元の人々が行っているということである。同公社はこのほか、コミュニティバス「京北ふるさとバス」や道の駅「ウッディー京北」の管理運営業務、京都市宇津狭公園の指定管理者としての業務などを請け負っている。こうした事業内容をみれば、同公社が地元密着型の法人であることが容易にわかり、従業員も地元の人の割合が高いと思われる。しかし、現在、文化財の維持管理として携わっている事業は上中城跡のみとなっている。したがって、京北地域全体を見ても、管理事業を通じての地域住民と所在地域の文化財の結びつきという観点では、現状ではその接点ないし関係性はやや薄いといえよう。

それでは、この京北地域において、文化財というキーワードで市民グループやサークルを見たときに、その活動状況はどのような状況であろうか。次に、文化財保護・文化財愛護の観点から実際に京北で活動している市民グループに焦点をあててみていきたい。

(2) 京北地域における市民グループの活動

京北地域における市民グループやサークルの数は、文化的事業にかかるものに限ったとしても、京北文化協会加盟団体のほか個人的な趣味のグループなど無数にあり到底筆者らにその全貌を把握することはできない。しかしながら、近年はインターネットによって、グループ・サークルが自らの活動内容を広く発信している場合も少なくなく、皆見に触れることのできたグループも存在する。甚だ網羅的ではないが、それらのうちで文化財保護や愛護に活動の主眼を置いているグループをみると、京北の文化財を守る会と周山城址を守る会を挙げることができる。

京北の文化財を守る会は、昭和52年(1977)に「京北町文化財を守る会」として発足した。発足当初から活字印刷の会誌『京北の文化財』を発行しており、40年余りたった今日も継続している。これはその間長きにわたって会活動を継続してきた証でもある。

元会長米津健市氏は、その創刊号に次のような「発刊の辞」を寄せている（米津 1979）。米津氏は京北町が府下でも「有数の文化財の宝庫」であるにもかかわらず、これまで十分な調査研究がなされなかつたために、「価値ある文化財の散失、破壊、盗難という結果をまねいた」という。そのうえで、文化財の価値を評価できる「基礎的常識」や「眼」を持つことが、文化財の保全に役立つと述べている。これは、同会の活動の方針やその後の活動状況を端的に語るものである。実際、同会は、毎年管内研修・管外研修を実施し、年1回発行の会誌は会員相互がもつ文化財に関する知識・情報を提供しあう場となっている。

次に、周山城址を守る会については、筆者のうちの一人である宮尾が、同会会長の栗山元伸氏に面談し聞き取りを行うことができた。以下、この聞き取りに基づいて、近年の活動状況について記す。

周山城址を守る会は、平成7年(1995)に発足した。当初は京北の文化財として周山城と常照寺に焦点を当てて、その顕彰・愛護のために活動を始めたのであるが、その後、会員が減少したことなどがあり、活動自体が停滞していく。しかし、令和2年(2020)放映のNHK大河ドラマが明智光秀を主人公にするものであることが決定されると、令和元年(2019)ごろから丹波地方では地域活性化への期待とともに一種の光秀ブームともいいくべき盛り上がりがみられるようになった。これを背景に、再び会員の関心が周山城に集まつたのである。そして、令和元年10月8日に「再開に向けた総会」を開催した。現在の会員数は70余名である。

この総会において、今後取組むべき事業が具体的に決められた。すなわち、「①山城や周山城址に造詣の深い識者を迎えた講演会の開催、②地域の方々とともに城址をみてもらうための登頂、③地域住民の方々に、周山城址の価値や「会」の活動を知つてもらうための取り組み」が事業内容として確認された。

①については、令和2年4月19日にNHK大河ドラマの時代考証責任者を務めた研究者による記念講演会の開催が予定された。②については、令和元年11月16日に周山城登城会を催した。③については、周山城に関して地域



図38 草刈り作業直後の状況

住民が知らない、関心が低いという現状を踏まえたうえで、これを地元の文化として根付かせたいとの思いを明文化したものであろう。

①・②は③に基づく具体的な事業ということになるが、これ以外の活動として、この総会以前からも取り組まれていた事業がある。同会が開催した「周山城址特別展」である。これは、令和元年7月に京都市京北合同庁舎1階京都銀行京桑支店で、同年9月に京都府立北桑田高校で、同年11月に京都府立セミナーハウス「あうる京北」で、それぞれ開催したものである。筆者のうちの一人である木許は11月にセミナーハウスでの展示を見学した（図39）。

2階の多目的スペースにおいて、4m×5m程の区画を展示ボードで区切り、そこに解説文、写真、図などのパネルを中心で展示するものであった。しかしそれだけではなく、周山城の立体模型の出陳や、床面に養生テープで城の縄張りが表現されるなど、観ていて飽きない工夫がなされていた。栗山氏によれば、こうした取組は、地元の人に周山城のことを知ってもらうためで、北桑田高校で開催するのは、大人だけでなく地域の若年層にも知ってもらいたいという想いがあるからだといふ。

また、栗山氏は「地元が動かないと行政は動かない。指定も受けられない。まずは地元の人達が周山城という文化財に関心を持つことが大事」という。さらに、全国から大勢の人に来てもらうことも視野に入れた上で、安全に見てもらえるよう保全に力を入れていきたいが、その出発点は地元の地域住民にあるという認識をもって、これから積極的に働きかけていきたいと話された。栗山氏が目指す文化財保護とは、地域の人々が自らの手で、その土地の文化財を守りたいと願うこと、その大切さをこれからも伝えていきたいということである。

以上、周山城址を守る会の活動状況をみた。同会の活動の特徴は、それが会員相互の研修や親睦にとどまらないで、地域住民に対しての啓発を活動の中心に据えていることである。そして、実際に、特別展示、登城会、講演会という事業を計画し、すでに実施したものもある。さらに同会の活動は周山城への登山道の整備も視野に入っていることもわかる。これらはいずれも通常は行政が取組むべき課題であるから、任意団体の市民グループが取組んでいる事例として特筆するべきである。

(3) 「地域との連携」の模索

地域において、史跡等を保存活用するためには、地域住民の理解と連携が不可欠である。上中城跡においては、現状では、少なくとも周山城でみられたような市民グループとの関係性は構築されていないと思われる。しかし、京北地域全体で文化財保護や愛護に主眼を置いている市民グループを見たところ、京北の文化財を守る会は40年以上の実績があり、現在も活動を継続している。また周山城址を守る会は、文化財の地域住民への普及啓発を活動の中心に据えている点で特筆されるものであった。いずれもその活動の背景には強い郷土愛や郷土への誇りを感じられ、郷土の文化財の愛護を根幹として新しいコミュニティの創生や地域の活性化を目指していると見える。

ここで改めて上中城跡の保護について考えたときに、これらの既存の市民グループが、直ちに上中城跡に関わるというものではないだろう。しかし、これらの事例から、京北地域には郷土の文化財を愛して力強く活動している市民グループが存在していることがわかる。つまり、京北地域には、文化財保護のために地域と連携できる土壤が存在していると言えるのではないか。そうであれば、行政としては、これら既存の市民グループの協力を得ながら、改めて上中城跡のほか域内に存在する様々な文化財を保護するという目的のために、地域と連携できる方法を模索する必要がある。

3. 環境整備事業案

(1) 環境整備事業の意義と本案の位置づけ

史跡等の環境整備とは、『史跡等整備のてびき』（文化庁2005、以下『てびき』という）によれば、遺構を地下に保存した後に、「史跡等に関する正確な情報を来訪者に提供し、さらには来訪者が快適に史跡等を見学できるようにすること」として、「復旧」だけではない概念として用いられたという（文化庁2005、『I 総括編・資料編』25頁）。



図39 周山城址特別展の様子

一方、文化庁は、史跡等の中・長期的な保存活用の視野に立った「史跡等・文化的景観のマネジメント」においては、次のような「循環過程（サイクル）」が必要であるとしている。すなわち、まず①基本情報の把握・明示、②保存・活用・整備に係る計画の策定、③保存のための各種の方法・施策の実施（予算確保を含む）、④活用のための各種の方法・施策の実施（予算確保を含む）、⑤整備のための各種の方法・施策の実施（予算確保を含む）、⑥体制の運営・整備、関係者・部局・機関との情報共有・連携、⑦自己点検を含む経過観察」の各項目が挙げられ、①から⑦を経て再び計画の見直し・再策定を行うという循環である（文化庁 2015、20 頁）。

史跡等の環境整備事業は、このうちの⑤に当っている。つまり、当然ながら環境整備はそれだけで事業が成立し完了するものではなく、持続的な史跡の保存活用の一部分を占めるものである。また、⑤の整備に至るまでは①～④の段階が必要なのであり、綿密な基礎調査や長期的な活用計画がない状況で、整備計画だけを策定できるものではない。その意味では、本章で提示する環境整備案は地に足のつかない不安定な議論であることは否めない。しかしながら、上記の循環過程の概念によれば、現状で考えられる整備案は、さらなる基礎調査の進展や活用計画の策定などを経て、おのずから見直されるべきものと位置づけられる。本章で提示する整備案は、このような認識に基づいて、現段階で考え得る整備の姿を示すことにある。のことにより、今後必要とされる調査や保存活用計画の策定に、方向性を与えるようとするものである。

（2）上中城跡環境整備案

上中城跡の環境整備について考えるにあたって、現状ではどのような手法が一般に用いられているのであろうか。『てびき』には、史跡の環境整備事業を完遂するための技術として、各段階に分けて詳しく解説されている。すなわち、「保存のための管理に関わる技術」・「復旧に関わる技術」・「環境基盤の整備に関わる技術」・「遺跡の表現に関わる技術」・「管理運営および公開・活用に関わる技術」である。そのそれぞれについて検討していく必要があるが、ここでは、主に活用に関わる技術として「遺跡の表現に関わる技術」（文化庁 2005、『Ⅲ 技術編』218-261 頁）と「管理運営および公開・活用に関わる技術」（文化庁 2005、『Ⅲ 技術編』264-298 頁）について検討する。本章では、『てびき』で解説された両技術に関わる各種の手法のほか、『てびき』には触れられていないが近年各地の史跡で実用化されている VR・AR の手法を参照して、上中城跡の環境整備事業について考える。

現在、上中城跡には「説明板」「水飲み」「ベンチ」「縁陰」の設備があるが、来訪者に上中城跡がどのような史跡であるのか分かりやすく伝えるための設備が「説明板」のみであるのは少なすぎる。また、既存の「ベンチ」が壊れていますことや「便所」がないことは問題であろう。そこで、現在ある設備に加えて、どのような施設・設備を設置していくべきであるかを考えた。ただし、今回は復元建物の建築を前提としなかった。それは前述のように、現状では史跡の発掘調査が進展しておらず、郭内の空間利用のあり方が不明で、建物の構造や規模等についてまったく不明であるからである。また、復元建物を建てる場合、重量物となるため遺構保護のために一定の厚さがある盛土施工が必要になる。今回は、保護層の施工についても極力少なくてすむ方向性を考えた。そのような検討の結果として図 40 に史跡の環境整備イメージ図（案）を提示する。以下は、図 40 を説明する体裁をとりつつ記述を進める。

①上中城跡の価値を伝える施設・設備

上中城跡がどのようなものなのかという情報を来訪者に提供するための設備として、遺構を表現することは有効な整備方法である。

上中城跡にあっては、復元展示の手法としては、堀と土塁を復元し展示するのが適当と考える。堀は、現状でも史跡の外郭として明瞭な痕跡を残している。このうち、南端部の一角に長さ 20 m 程の範囲を設定して堀を復元するものである。堀の復元は、図 41・42 のような弥生時代の環濠をイメージすることができる。しかし、現在の上中城跡における堀の痕跡は周囲の住宅の生活道として利用されているため、現状のままであれば、この生活道を完全に封鎖することが困難である。ただ、図 40 に示した南端の一角は、その外側に住宅が存在せず水田に隣接しているので、将来的にもこの地点の民地に何らかの建造物が建つ可能性は低いであろう。ここに遺構を復元することは、郭の外側を自動車等で周回することができなくなり周辺住民に一定の制限を課すことになる。しかし、十分な安全対策を施す必要はあるが、そのことで極端に生活に支障をきたすことはないであろう。また、堀の復元のためには、堀の規模に関するデータが不十分であるから、改めて発掘調査を実施することが必須になる。その際に、堀埋土等の残存状況によるが、堀埋土の土層断面転写パネルを作成することは有効な記録方法である。また土層断面転写パネルは後述するガイドンス施設の展示資料としての活用が期待できる。

土塁は、現状では郭の北端部に基底部付近が残っていることが観察できる。この上に盛土を施してかつての土塁の姿を復元するものである。ただ、その際に、遺構として残っている部分を盛土で覆い隠してしまうことに一つの難点がある。この場合、残存遺構と盛土の区別を、土層断面を転写して展示する手法が考えられる。整備時にその断面を転写したパネルを作成して、ガイダンス施設に展示すれば施設内でも土塁の高さを体感することが可能であろう。今一つの難点は、土塁がかつてどのように郭をめぐっていたのかが判然としないことである。現状の地表に痕跡を残す部分以外にも、土塁が延びていたのであれば、部分的な復元は来訪者が史跡のかつての姿をイメージするときに誤解が生じるおそれがある。

こういった問題に対応する方法の一つがVR・AR技術を利用したCGによる遺構復元である。前述のように、現状では上中城跡では発掘調査が進展していないので、郭において建物を復元することが難しい。このことについてもVR・AR技術を利用することで一定程度は補うことが可能である。

近年、VR・ARによる遺構復元の手法が拡大しつつある背景には、利用端末として来訪者自身が所有するスマートフォンを活用できることが背景にあると思われる。ただ、VRを利用する際には、ヘッドマウントディスプレイを使用した方が、CGで再現された仮想現実についてより質の高い体験ができる。その場合には、後述するガイダンス施設に一定の設備を備えておく必要がある。来訪者自身のスマートフォンを利用する場合は、簡易ゴーグルを使用するのも方法の一つである。簡易ゴーグルは、厚紙にプリントし切り込みを入れたものを利用者に配布することで、利用者が簡単にそれを作ることができる（図43）。比較的安価で製作できるので無料で配布することも可能であろう。



図40 上中城跡 環境整備イメージ図（案）



図41 大阪府池上曾根遺跡の環濠の復元



図42 奈良県唐古・鍵遺跡の環濠の復元



図43 史跡長岡宮朝堂院公園で配布されている簡易ゴーグル

い。虎口の構造なども不明である。また、土壘とは異なる堀の存否や、その形状など確認しなければならないことは多い。

基礎調査としては、このような資料を得るために発掘調査に加えて類例調査が必須であるが、ある程度情報が収集できれば、VR・AR技術を利用した遺構復元は有効な手法であると考えられる。将来的な発掘調査によって新たな成果があった場合に、比較的安価に素早く情報を訂正することができるといったこともあるからである。

次に公開・活用に関わる手法としてガイダンス施設について考える。まず用地について検討する。ただ、上中城跡の周囲はいずれも宅地か農地として利用されている民地であるから、新規施設の建設予定地を求めるることは容易ではない。ここでは諸般の事情はまったく加味しないで、あくまでも立地条件上の好地を示すものである。

ガイダンス施設は指定地外の近隣地に建築することが望ましい。現状では、上中城跡へのアプローチは、図40に見えるように、北西部と南東部の2箇所の出入口がある。このうち南東部の出入口の東側の農道を挟んで東にある水田に、図40ではガイダンス施設として記した。当該地は史跡範囲の外側に当たり、その東辺が国道162号線に面している。これは自動車を利用した来訪者には利便性が高い。また、当該地は平成6(1994)年度に行われた範囲確認の発掘調査(人魯1995)では、トレンチは設定されていないが、比較的近い地点の7トレンチや8トレンチでは遺構が確認されていない。この時の調査成果によれば、遺構が検出されたトレンチは上中城跡の北側にあって、標高が高い地点になる。標高の低い地点に設けたトレンチは湧水が著しく、遺構も検出されない状況であった。当該地は、当時のトレンチ設定地点よりもさらに一段低い場所に位置するから、元は谷地形のようになっていて遺構等が存在しない可能性が考えられる。これらを勘案すれば、新規にガイダンス施設を建設するのであれば、当該地が一つの候補地になるであろう。

ガイダンス施設の面積は、『てびき』では、床面積300m²程度との目安が示されているが、当該地では、250m²程度の建築が可能であろう。遺跡の規模からしてむしろその程度が妥当と考える。ここでは、上中城跡から出土した遺物や、上述した堀や土壘の土層断面転写パネルなどの展示、VR・AR利用にかかる設備・簡易ゴーグルの貸出しや配布、啓発パンフレットの配布などができるほか、史跡の維持管理拠点ともなり得よう。また、このガイダンス施設が便益施設を兼ねることになる。ここに休憩設備と便所を設ける。上中城跡周辺は公共交通機関が発達していないため、車で来訪する見学者が多いことが想定されるので、ガイダンス施設の敷地内に駐車場を設置することとする。

(3) 環境整備事業実現への模索

上に提示した環境整備案では、比較的規模が大きい建設事業を作り、周辺の用地取得にまで言及した。これを実現しようとすれば相当なプロセスを経る必要があるのは言うまでもない。しかし実現へのハードルが高く困難性が際立つてしまうと、まさに絵に描いた餅になってしまう。

現状で少しでも前進しようすれば、ここで取り上げたVR・AR技術に可能性を感じる。もちろん、その場合でも基礎調査としての発掘調査や類例調査が必須であることは前述の通りである。一方で基礎調査を経たうえであれば、

また史跡に応じたデザインをプリントできるので、簡易ゴーグル自体を入手したいという需要も生じ得る。これについてもガイダンス施設での配布が想定できる。

以上、遺構復元について考えたが、これらはたとえ小規模な復元であったとしても、基本設計に際しては、発掘調査による遺構の正確な情報をておく必要がある。このことはデジタル技術を利用した場合でも何ら変わることはない。堀や土壘に関するデータは、第1次調査(人魯1994)である程度得られているが、小規模なトレンチ調査であったため、遺構復元の資料としては十分ではない。例えば、土壘は、上記のように、本来どのように郭の外郭に築かれたのか細部が明確ではない。

上中城が機能していた頃の空間利用のあり方や景観の復元が一定程度可能になるであろう。その情報を、現実の遺構復元によってではなく、C Gによって来訪者に提供するという考え方である。

その際に、来訪者に対しては、上中城の歴史的意義を同時に伝える必要がある。それには一定のガイダンス施設が必要である。しかし、そうした施設を新設するのは予算面などを考えると困難なことが多いであろう。そこで、上中城跡の周囲で既存の公共施設をみると、直線距離で西に 350 m 程の地点に、京都府立ゼミナールハウス「あうる京北」がある。当該施設は、前章で見た周山城址を守る会が特別展を開催した会場でもあり、2階ロビー横には 7 m × 8 m 程の多目的スペースがある。期間を限ればこの施設を利用して上中城の調査成果を展示公開することは可能であろう。また、前述のように VR 体験は、来訪者自身が所有するスマートフォンによるとしても簡易ゴーグルがあったほうがよい。簡易ゴーグルや各種の文化財啓発パンフレットをゼミナールハウスで配布することができれば、史跡とゼミナールハウスのいずれか一方の来訪者が、他方をも訪れることに動機付けができるよう。上中城跡には現状では適切な休憩所や便所がないが、史跡の来訪者にとっては、ゼミナールハウスが便宜施設としての役目も果たし得よう。

このような活動のために、府市や所管の境界を越えた連携が望まれる。

4. 京北全体での活用案

(1) ストーリー作成の意義

文化財を活用するためには、文化財が持っている潜在的な魅力を引き出したうえで、より多くの人にその魅力を知ってもらうための情報発信が必須である。そして、そのような魅力を引き出すために、当該文化財を地域における歴史文化の「ストーリー」に位置付けるという考え方がある。

各地域には、時代も類型も多様な文化財が群として存在している。文化庁は、歴史文化基本構想の策定指針において、「関連文化財群」を「有形・無形、指定・未指定にかかわらず様々な文化財を歴史的・地域的関連性に基づき一定のまとまりとしてとらえたもの」とした（文化庁 2012、8 頁）。そしてその解説として、関連文化財群の考え方方は「文化財の魅力を高めるとともに、魅力的な形でかつ分かりやすく価値を伝えていくための効果的な方策の一つである」とし、その際に「ストーリー」が重要であることを説いている。すなわち、文化財を「地域的関連性を示すストーリーに欠かせないモノとして捉えること」が、国民に分かりやすく文化財本来の価値を伝えることになるとしている（文化庁 刊行年不詳 a）。この考え方方は、史跡等の保存活用にかかるマネジメント事業においても、計画策定期の課題への対応策として示されている（文化庁 2015、29-30 頁）。さらに平成 30 年（2018）の文化財保護法改正により制度化された文化財保存活用地域計画にも踏襲されている（文化庁 2019、8 頁）。

また、「ストーリー」の概念を前面に押し出しているのが、日本遺産の制度（文化庁 刊行年不詳 b）である。日本遺産は、文化庁の説明にもあるように、「新たな規制を図ることを目的としたものではなく、」「地域活性化を図ることを目的としている」ものである。そして、その事業の方向性として「①地域に点在する文化財の把握とストーリーのパッケージ化、②地域全体としての一体的な整備・活用、③国内外への積極的かつ戦略的・効果的な情報発信」の 3 点が挙げられている。この 3 点の方向性は、「活用」に限って言えば有用であると考える。問題は、日本遺産の上記の目的が、これまで、文化財保護は保存と活用の両輪であるとしてきた文化庁の施策との整合性がなく、この制度に限定すれば文化財の保存に配慮していないことにあろう。しかしながら、住民をはじめ地域外からの来訪者が文化財を通じてその地域により魅力を感じるのであれば、そのことが文化財の保存や保全に直接つながり得ると考えられるから、こうした新たな価値の情報発信は重要であろう。これは従前の歴史文化基本構想の指針等で示されたことに、結果的に合致する。

そこで、本章では上中城跡を含む京北全体を対象にしたストーリー案を提示したうえで、地域の文化財情報マップを作成した。

(2) 「ストーリー」案

京北地域に所在するさまざまな時代・類型の文化財を一括りにすることは容易ではない。しかし、この地域の歴史文化を見ていくと、この地が各地を結ぶ交通の要衝として発展してきたことがわかる。ここでは、周山街道などの街道を「陸の道」、桂川などの河川を「川の道」として、この「2つの道」が紡いできた京北の歴史文化の「ストーリー」案を提示する。

各地を結ぶ2つの道—陸の道と川の道—

①交通の結節点

京北は京都市右京区にあり、旧丹波国の中端部に当たる。旧京北町は、周山・弓削・山国・黒田・細野・宇津の町村が合併して発足した。

この地は早くから交通の要衝として栄えた。京北を南北に貫く周山街道は、若狭と京を結ぶ鯖街道の一つとしても著名な物流の幹線道である。この街道から周山で分岐して、北東に花背街道をとれば近江を経て伊勢にまで及び、南西にすれば八木・亀岡を経て摂津に至る。この道は山国街道とも呼ばれている。現在、周山街道は国道162号線として、花背・山国街道は国道477号線として整備され、今を生きる人々の生活を支えている。

京北には、この陸の道とは別に「川の道」ともいるべき道がある。周山街道沿いを南流する弓削川は、花背街道沿いを流れてきた桂川（大堰川）と周山付近で合流する。桂川は一旦西に大きく湾曲して亀岡盆地を流れたのち、再び東に向きを変えて洛西に至り、淀川に注いでいる。この川の流れは、さながら京北と京・大阪を結ぶ川の道となっているのである。つまり、京北には街道と河川の2つの「道」があって、周山付近が各地に伸びる道の結節点に当っている。京北の歴史はまさにこの2つの道に育まれてきたと言える。

②在地勢力

京北は、平野部は狭小であるものの豊かな山林と清流に恵まれて、美しい自然の景観が守られている。古来、人々はその平野部を中心に集落を営んできた。そこにはいくつもの在地勢力の榮枯盛衰が見られるが、その展開は、京北と外界を繋ぐ陸の道・川の道を背景にするものであった。

弥生時代中期には下弓削に扁平鉢式袈裟襷文銅鐸が埋納された。銅鐸の埋納により広域な集落間の交流が想定される。集落遺跡では、塔遺跡からは近江系の土器や丹後や河内からの搬入土器が出土している。また周山1号墳や愛宕山古墳の築造、周山廐寺の造営などは、古墳時代から飛鳥・白鳳時代の在地勢力の存在を示している。周山廐寺からは大和の川原寺式のほか近江に類似のある丸瓦が出土している。

さらに、周山街道を望む上中城が、北面の武士の一人によって築かれたという伝承は、皇室とも関係する在地有力者の存在を物語っている。一方、天正年間に明智光秀が築城した周山城もまた、東に花背街道と桂川を、北に周山街道と弓削川を睨んでいる。周山城は、上洛を果たした織田信長が丹波攻略のほか丹後・若狭からの攻撃に備えるための拠点とした城である。

これらの遺跡は、京北が、若狭・丹後・丹波・近江・山城を結ぶ要衝であることを如実に示している。

③京との繋がり

山国には皇室の直轄地である禁裏料があった。その始まりは、長岡京・平安京の遷都にあたり、内裏造営の用材を供出したことにあるとされる。山国は木材は、川の道を使って都に運ばれたのだ。川の道はその後も京北の林業を支えた。そして、山国は禁裏料として、皇室との関係を保ってきた。川の道は京北と皇室を結びつけたが、今一つ重要な川の産物に鮎がある。渓流で獲れた鮎が、水を張った桶に入れられ途中何度も水を入れ替えながら、夜間に陸の道を急ぎ皇室に献上されたのだ。これは明治初年まで続いた。

14世紀には北朝の最初の天皇である光厳が、法皇となった後に常照皇寺を開いた。南北朝の動乱に翻弄された法皇が最期の安息の地をここに求めたのは、山国と皇室の関係によるのであろう。

幕末には、戊辰戦争に際して、明治政府の募兵に応じた人々が山国神社に集まり、83人で出陣式を挙行した。これが山国隊である。山国神社では、戦いの後に凱旋したその隊列にちなんで毎年10月に山国隊軍楽保存会による行進が行われている。山国隊は、平安神宮の時代祭の行列先頭を行く維新勤王隊列のモデルでもある。

京北から陸の道・川の道をたどれば、皇室との関係も見えてくる。

(3) 文化財情報マップ

啓発事業としてストーリーを提示するのではあれば、それを裏付ける文化財とその位置が明確にならなければならない。本節ではこのような考えに基づいて、図44として「文化財情報マップ」を作成し提示する。

文化財情報マップ

（上）中城跡 中世（市史跡）
中城を守っていた人は北面の武士の末裔であったとい
う。岡山町直を望む要衝に立地している。跡を
元を保つ現の新町が残る。

奈良時代では瓦器類や白磁が出土している。
3種禮器 奈良時代 瓷像 3躯 (国重文)
奈良時代 瓷像 5躯 (市美術工芸品) サクラ (市
天然石によると、和銅4年(711)の創建で、弓
削町時代に鐘楼を再建したとされ、道鏡の供
物が五輪塔が七輪塔である。

4.下弓削鋼錠 生生時代後半
平治元年(1188)、御物文様。傳承の順位に下弓削村山の老木根から出土した。現在は西宮市立の辰巳考古資料館に保管されている。

6. 中堂寺 仏像1躯(目術文) 仏像5
頭(工房美和 芝原) 本尊(工房美和 芝原)
社伝によると、天平勝宝3年(751)に創建された。かつては八幡宮社の神宮寺であった。阿彌陀如来坐像・藥師如來坐像・十一面觀音菩薩坐像等が安置される。元は元は本尊社として祀られていたものである。

7周山城 安土桃山時代 明智光秀によって築かれた山城。標高480mの大丸川(川の道)への展望がよい。

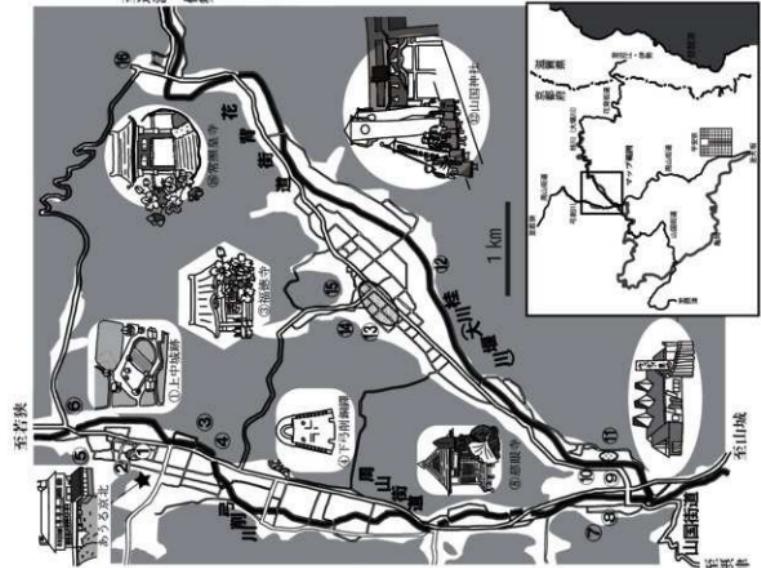


図44 文化財情報マップ

5.まとめ

市跡指定史跡となって公有化されている上中城跡の「保存」は、文化的景観に関してはなお課題を残すものの、一定の到達点にあるといえよう。その一方で、現状では文化財としての「活用」がうまくなされているとはい難い。本稿の出発点はここにあった。

しかし、京北地域には文化財保護・愛護の意識が高い市民グループが存在することからみると、市民・地域と連携して文化財の保存活用を図り得る土壤があると言える。一方で、上中城跡の環境整備事業を具体的に考えると、まだまだ先が長いというのが実際のところであろう。だからといって、大掛かりな建設事業を伴う環境整備事業の完成を待つばかりでは、活用は遅々として進まない。基礎調査は継続していく必要があるが、それと並行すれば様々な手法を用いて今以上の活用を進めることは全く不可能ではないと考える。本稿では、デジタルコンテンツの利用や既存の公共施設の活用などを提言した。また、上中城跡に関する情報が乏しいのであれば、地域全体の文化財をいわば「総動員」して、地域の魅力を発信するのは一つの方法である。上中城跡は地域の文化財の一つとして、その一翼を担い得るという考え方もある。このような考え方のもと、地域を文化財でつなぐストーリーを作成し、文化財情報マップを併せて提示した。

観光資源として文化財を活用することを、すべての文化財に適用していくとすればおのずから限界があろう。京北地域の文化財は、その豊かな自然が文化的景観となり、一体のものとしてそこに現存している。ここに所在する文化財群は、その魅力をさらに引き出していくことで文化財が今以上に地域の活性化に寄与し得ることを示し得よう。

補註

(1) 本遺跡の史跡としての指定名称は、旧京北町の「文化財（指定）」台帳には「上中城址」と記されている。したがって、この台帳を引き継いだ京都市においても「京都市指定史跡・上中城址」が正式な名称である。しかし、京北町が刊行した本遺跡の発掘調査報告書では、史跡指定以前ではあるが、遺跡名称を「上中城跡」としている（人魯亨 1994・1995）。京都市については、後掲の京都市が運営する「京都市指定・登録文化財」のWebページ（京都市情報館—京都市指定・登録文化財一史跡一右京区）では、トップページには「上中城址」と記されるが、そこからリンク先を開くと「上中城跡」と表記されている。このほか、京都市が刊行している文化財啓発書（京都市文化財保護課編 2008）や、京都市が設置した現地の説明板にも「上中城跡」と表記されている。このように、本史跡の名称の表記には行政においても混亂が見られる。本来は、指定台帳によって統一するべきと考えるが、本稿では、標題および以降「上中城跡」の表記とする。

京都市H.P.「京都市内の文化財件数と京都市指定・登録文化財」

<https://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/page/0000005493.html> 2020年2月24日閲覧

(2)『京北の文化財』は2004年8月刊行の第53号までには年に2冊が刊行されていたが、2005年以降は年に1冊の刊行になっている。

(3) 2020年1月26日、ウッディー京北において聞き取りを行った。

(4) VR・ARの概念の整理は曾根俊則氏の説明（曾根 2016）がわかりやすいので引用する。

VR : Virtual Reality　仮想現実　人工現実　仮想物（人工物）のみによって情報、空間、世界を構成して表現する。

AR : Augmented Reality　拡張現実（感）　現実世界に仮想物を付加して表現する。

また、曾根氏は、遺跡・史跡ではそれらの技術が次のように活用されたとした。VRについては「CG等で作られた仮想現実を体験する。仮想物のみで構成された光景を体験者の視野に映し、あかも現実の世界のような風景として体感できる」、ARについては「現実世界にCG等で作られた仮想物を反映させて体験する。現実の風景にCGや写真等の画像を重ねたり文字情報を表示させることで、実際に見ている光景以上の情報が付加された光景として体験できる」というものである。

〈参考文献〉

- 京都市文化財保護課編 2008『袖の国—京北・文化財のしおり一附 第25回京都市指定・登録文化財』（『京都市文化財ブックス』第22集）
- 曾根俊則 2016『遺跡におけるVR / AR技術利用の現状』『デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用』（『平成27年度 遺跡整備・活用研究集会報告書』）奈良文化財研究所
- 人魯亨 1994『上中城発掘調査概報』（『京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書』第4集）
- 人魯亨 1995『上中城第2次発掘調査概報』（『京都府京都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第5集）
- 文化庁 2005『史跡整備のてびき—保存と活用のために—』

文化庁 2012 「『歴史文化基本構想』策定技術指針」

文化庁 2015 『平成 25 年度「記念物・文化的景観」マネジメント支援事業 史跡等・重要文化的景観マネジメント支援事業報告書』

文化庁 2019 『文化財保護法に基づく文化財保存活用大綱・文化財保存活用地域計画・保存活用計画の策定等に関する指針』

文化庁 刊行年不詳 a 「『歴史文化基本構想』策定ハンドブック」

文化庁 H.P. 「『歴史文化基本構想』について」で PDF を閲覧可能

<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/rekishibunka/pdf/handbook.pdf> (2019 年 8 月 29 日 閲覧)

文化庁 刊行年不詳 b 「日本遺産」(パンフレット)

文化庁 H.P. 「『日本遺産 (Japan Heritage)』について」で PDF を閲覧可能

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/ (2020 年 1 月 6 日閲覧)

米津健市 1978 「刊行の辞」『京北の文化財』創刊号

第 4 章の「ストーリー」および図 44 に係る参考文献

李銀眞 2019 『周山庵寺』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2018 ~ 6)

石田茂作・三宅敏之 1959 『丹波国周山庵寺』

梅原未治 1926 「下弓削発見ノ銅鏡」(京都府史蹟勝跡調査会報告第 7 号)

奥村清一郎 1983 「愛宕山古墳跡調査概報」(『京都府京北町埋蔵文化財調査報告書』第 2 集)

京都市文化財保護課編 2008 「袖の国—京北・文化財のしおり— 附 第 25 回京都市指定・登録文化財」(『京都市文化財ブックス』第 22 集)

京都市文化財保護課編 2010 「飛鳥白鳳の甍～京都市の古代寺院～ 附 第 27 回京都市指定・登録文化財」(『京都市文化財ブックス』第 24 集)

京都市埋蔵文化財研究所 刊行年不詳 「京都散策マップ 29 京北 周山 弓削 山国」

<https://www.kyoto-arc.or.jp/heiansannsaku/jurakudai/img/29keihoku.pdf> 2019 年 9 月 1 日閲覧

國下多美樹 2015 「シリーズ京北の歴史 なぜ? なぜ? なぜ? に! 京北考古学探求 (1)」(『あうる京北友の会だより』No.158)

國下多美樹 2016 「シリーズ京北の歴史 なぜ? なぜ? なぜ? に! 京北考古学探求 (2)」(『あうる京北友の会だより』No.159)

國下多美樹 2016 「シリーズ京北の歴史 なぜ? なぜ? なぜ? に! 京北考古学探求 (3)」(『あうる京北友の会だより』No.161)

京北町誌編さん委員会編 1975 『京北町誌』

小池寛 1993 「祇園谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第 52 号)

小池寛 1995 「塔遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第 64 号)

坂田聰編 2009 『禁裏御山国花』

人魯亨 1994 「上中城発掘調査概報」(『京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書』第 4 集)

人魯亨 1995 「上中城第 2 次発掘調査概報」(『京都府京都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 5 集)

高橋成計 2019 「明智光秀の城郭と合戦」(『日本の城郭シリーズ』⑩)

辻川哲朗 2013 「丹波・周山 1 号墳出土埴輪について」(『同志社大学歴史資料館報』第 16 号)

福島克彦 2019 「明智光秀と近江・丹波一分国支配から「本能寺の変」へ」

山村安郎 2010 「禁裏御山国花の鉢献上」『丹波』12 号

吉岡拓 2016 「近世後期地域社会における天皇・朝廷權威 - 丹波国桑田郡山国郷禁裏御料七ヶ村の鉢献上(編役)を事例に -」『恵泉女学園大学紀要』第 28 号

龍谷大学文学部考古学実習室 2013 「2012 年度周山古墳群測量調査報告」(『考古学実習』No. 9)

龍谷大学文学部考古学実習室 2015 「2014 年度上中城測量調査報告」(『考古学実習報告』No.11)

龍谷大学文学部考古学実習室 2016 「上中城跡第 5 次発掘・測量調査報告」(『考古学実習報告』No.12.)

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻 2018 「上中城跡第 6 次調査報告」(『考古学実習・文化財実習報告書』第 1 集)

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻 2019 「上中城跡第 7 次調査報告」(『考古学実習・文化財実習報告書』第 2 集)

木許 守 (文学部教授)

加藤勇太 (文学部歴史学科文化遺産学専攻 4 回生)

西村早織 (文学部歴史学科文化遺産学専攻 4 回生)

宮尾 李 (文学部歴史学科文化遺産学専攻 4 回生)

中世前期城館研究の問題点と上中城跡

福島克彦

はじめに

近年、京都府域では『京都府中世城郭分布調査報告書』1～4（京都府教育委員会 2012～15）が刊行されるなど、中世城館跡に関する基礎的な研究が蓄積しつつある。一方、考古学においても、各中世遺跡において城館跡が発掘されており、貴重な成果が披露されている。これらの成果は、纏豊期に視線が注がれやすかったが、少なくとも京都府域に限るならば、最近中世前期（12～14世紀）の城館遺構が集積しつつある点が重要である。本稿では、畿内・近国における中世前期の城館研究の問題点をまとめ、その上で、丹波上中城跡を含めた同時期の遺構を概観したい。なお、本来は、居館と称するべき遺構もあるが、防御施設が多少なりとも構築されているため、城館の範疇に入れて評価する。

1. 中世前期城館研究への視座

一般に、中世前期の城館といえば、『一遍聖絵』などの絵巻物に描かれた方形館のイメージが強い。すなわち、中央には主殿と広場、隣接して持仏堂、外縁には馬場や厩がある。そして周囲を堀と塀で囲繞し、出入口には櫓門を置いた施設となっている。このイメージについては後述するとして、これが堀と土塁で囲まれていた平地の方形館と同列で捉えられ、長らく中世前期の城館として認識されていた。

地域史では、この方形館跡の存在と、古代末・中世前期の在地領主制の伸長が合わせて考えられてきた。その際、方形館と領主制（武士団）との関わりはどのように認識されてきたのであろうか。以下、中世前期の研究者の視角を個別的に取り上げ、考えてみたい。

①戸田芳実「中世の封建領主制」『岩波講座日本歴史』旧 中世2 1967

平安時代初期の史料には、地方農村に「宅」と呼ばれる施設ないし経済体のあったことが、種々のかたちで出てくる。この宅は地方土豪である「富豪層」の屋敷であるが、土豪の本貫にかまえた本宅を意味するものであった（略）。

屋敷と開発地はつぎのようなかたちで結びついた。（略）譲状に「件の村御屋敷の近辺なり、早く浪人を招き寄せ、御下知の状に任せて、勤農あるべきなり」と書き記した。屋敷の存在と開発・勤農実施がこのように一種の因果関係でとらえられていることは、領主の論理として興味を引く。（略）

宅の近辺で合法的にえられた荒地は、ただちに本宅敷地の延長として、觀念上のあるいは現実の堀垣で囲われた、開発・勤農の成果が安定した所有権・支配権として結実する可能性をもつ好適地だったといえるであろう。（略）

ここで戸田芳実氏は、地域における領主制の進展を考えるにあたり、平安時代における排他的な経済体の屋敷地「宅」に着目した。すなわち、古代末・中世前期の富豪層が支配権を広げていく起点として、彼らが私的権限行使できる「宅」が中核となった。これらの敷地は国衙や荘園領主の検断権も及ぶことができず、免税地と位置づけられる一方、その「宅」を中核に周囲に支配権を拡大し、彼らの譲状にも屋敷の存在と勤農、支配がセットで捉えられていたとする。

こうした領主の動きをモデル化したのが、次の石井進氏である。

②石井進『中世武士団』小学館 1974

（略）中世の武士団の所領支配の構造を公式化してみよう。いまコンパスを使って三つの同心円を描いてみる。そして、そのもっとも内側の円を武士の館・家・屋敷とする。あとにくわしくみると、実際には四角形のばあいが多いけれど、説明のつごう上、円で代表させておこう。周囲には土塁をめぐらし、堀でとりかこむのがふつうなので、土居（土塁のこと）とか、堀の内とよばれる。ここが武士の所領支配の中核をなす部分で、同時にイエの主人の支配権が貫徹しているところ

である。

その外側の円は武士の居館のすぐ周辺部にひろがっている直営の田畠を意味している。当時は佃・正作・御手作などともよんでいるが、主人に従属する度合の強い下人や所從などの隸属民たちを使役して耕作させており、莊園領主や国司に対しては租税が免除されているのがふつうだった。館のすぐ門前にあるところから、門田・門畠とよばれることも多く、「堀の内については検注のとき、かつて馬の鼻を向けられたことがない」、すなわち検注使の立ち入らぬ検注免除の地とされていた（中略）。

さて第三のもっとも外側の円が、莊や郷・保などとよばれ、地頭の設置されている地域単位をさしている。（中略）このイエの主人にとってはもっとも支配権の薄弱な部分であって、さればこそ地頭などの職種にもとづいてかれらの支配を補強しようとしているのである。



図 45 中世武士の所領支配の構造

石井進氏は領主側の家父長制的支配権の空間的な広がりを、「イエ」支配の論理を使って、方形館を考察するモデルを組み立てている（図 45）。ここでは領主（武士）の館を中心にして、同心円状に支配権を考え、周囲の直営田、さらにその外に広がる莊・郷・保などの地域単位を位置づけている。特に重要なことは、このモデルによって、実際の平地城館跡と小字・通称に残る館、城、堀内、佃、門田など、館周辺の地名などを位置づけることが可能になった点である。発掘調査の乏しい状況下、こうした地名を位置づけることになった点は歴史地理学的な視点として注目され、各地で地方における武士団の小世界を明らかにしようとする動向につながった。同時に、方形館跡と言えば、在地領主、すなわち地方の武士団の存在が一般に意識されるようになった。

③小山靖憲「東国における領主制と村落」『中世村落と莊園絵図』1987

私は、当時の武家屋敷の堀は農業用水の安定化のためにこそ存在したと考える。それは、単に不安定な小河川の改修であるだけでなく、冷水の温水化あるいは旱魃の防止のための溜池としての機能を備えるものであったと思われるからである。この推定は、当時の武士の館が平地に多く、堀の幅も二~三メートル程度のものが普通であって、「その本質は要塞にあらずして住宅である」という指摘からも首肯されよう。かかる形での用水の安定化は、在地領主が勧農機能を媒介として農民を自己の支配下に包摂する最も現実的な方式であったのであり、少なくとも上今郷では中世的集落の成立をも意味した。

今までの研究者が宅や居館をアブリオリに武士による支配装置と捉えていたのに対し、小山靖憲氏は城館跡の堀の機能に着目する。すなわち、農業用水を堀に溜め、冷水の温水化、あるいは旱魃防止に役立ったと推定する。武士たちは、こうした勧農機能を媒介にすることによって、農民たちを支配下に置くことができたと指摘した。小山氏は、関東地方の事例を素材に、地籍図や江戸時代の絵図から、居館跡や農村景観を復元的考察され、堀の水が孤立した存在ではなく、河川や水路と接続し、周囲の水田とつながっていた点を強調した。それによって、こうした用水の視点を見出されたことになる。

④橋口定志「方形館はいかに成立するのか」

峰岸純夫編『争点日本の歴史』4 中世 新人物往来社 1991

（略）中世前期にさかのぼる文書類のなかに、基本的に「居館」ないし「館」という用語が現れないことも注意される。武士の居住施設といえども「屋敷」なのである。（略）とりわけ「堀内」と「方形館」の短絡から始まる議論は、その前提自体の吟味が不充分であった点で問題を残している。（略）近年の考古学的知見によれば、現況地表上で確認できる「方形館」の土壙・堀のような城館遺構の大部分は、中世後期以降の構築物であり、中世前期まではさかのぼりえない。さらに中世後期の城館でさえも、近年に至る間に何らかの改変を受けている場合がままみられることが多い。

踏まえて、城館自体の構造分析を行うべきである。

今までの研究者は、土塁・堀を持つ方形館を中世前期の存在として認識していた。これに対して、中世考古学の橋口定志氏は、遺構論から時間軸が議論されなかった点を問題とする。すなわち、今までの文献史、城郭史研究が、現存する土塁・堀を残す方形居館を中世前期の古いタイプに位置づけようとした点に警鐘を鳴らした。これは、近世期の絵図面、近代の地籍図を使った研究についても、傾聴すべき指摘であった。実際、前述した『一遍聖絵』などに描かれた居館イメージでは、周囲は垣や竹藪で、土塁が描かれておらず、基本的には宅地に近い存在であったと位置づける（橋口「絵巻物による居館」『生活と文化』2 1986）。そのためにも、橋口氏は、城館研究には考古学による構造分析が不可欠であることを強く指摘した。実際、土塁が現存するタイプを中世後期まで下らせて考察すべきという意見は、近年はほぼ首肯されている。

さらに橋口氏は、中世前期の関東の遺跡から、新しい「堀内」論を提示している（橋口「中世東国居館とその周辺」『日本史研究』330 1990）。ただし、これらが、新しい中世前期の居館跡・堀内のイメージとして定着したかは現段階では疑わしく、いまだ類例が乏しい状態である。さらに近年は鎌倉などの政治都市における武家居館の土塁遺構などは中世前期に存在をしていたとして、農村部と都市部の峻別も図っている（橋口「中世前期居館の展開と戦争」『戦争』I 青木書店 2004）。

一方、中井均氏も、畿内・近国や北陸の発掘事例を取り上げて、中世前期まで遡及できる城館を改めて検討しており、部分的には土塁の存在も否定していない（「中世城館の発生と展開」『物質文化』48、1987）。こうした地域差の問題も議論する必要が出てきたことになる。

以上のように中世前期の城館研究は着実に進展してきたが、次の二点で問題を残してきたと考える。第一に、中世前期の屋敷地、城館を地方の在地領主（武士団）による勢力伸長のセットで議論されてきた点である。これは、戸田、石井、小山氏、さらに時間軸は相違するものの、橋口氏にも共通すると考える。しかし、元来有力権門の膝下にあり、莊園を強く保持していた畿内・近国では、十分に城館跡と地域の武士の議論がなされていなかった。換言すれば、莊園制下における城館跡の発達が対象外になっていたと考える。

第二に、前述した地域差の問題である。関東地方の場合、鎌倉御家人の居館跡が伝承のまま、無批判に位置づけられてきたこともあり、後世の改変や拡張を受けている視点が十分に検討されてこなかった。そのため、前述した橋口氏の視点は比較的受け入れられる部分があったことは想像に難くない。しかし、畿内・近国では、そもそも地域社会において、中世前期の平地城館跡の遺構自体が少ないとされ、鎌倉武士との関係を示す城館跡の伝承もほとんどなかった。遺構自体がない以上、やはり発掘調査事例に頼らざるを得ない側面が強い。

こうした課題を認識しつつ、どのように中世前期の城館を考察すればいいだろうか。以下、考察を深めたい。

2. 政所屋敷論という視点

(1) 革嶋城跡の考察

今まで城郭史研究の分野では、前述してきた在地領主制の議論を莊園制と反比例的に捉えてきた。しかし、近年は、職能としての武士論が提示され、武士の在京性、あるいは公家の親近性が主張されるようになってきた。

特に畿内・近国では、権門寺社による莊園制の問題も包含して考察が必要となってきた。そこで、鎌倉期まで遡及できる武士として西岡の革嶋氏とその城館跡について考察してみた。まず、この概略をまとめておきたい。

革嶋氏は、近衛氏領革嶋南莊の下司職として現地莊園を經營し、14世紀には幕府御家人となった國衆である。近世期には「牢人」身分として、土塁・堀で囲繞された革嶋城跡に居住し続けた。『革嶋家文書』には元禄15年（1702）などの近世期の革嶋城跡の絵図類が残っており、その平面構造が確認できる。これらの近世絵図から居館の正確な位置を確認し、地図上に落とし込んだ。これによって、嘉暦元年（1326）2月「革嶋南庄差図」における「御所カキ内」の空間と重複していた点が明らかとなった（図4 福島克彦「戰国期畿内の城館と集落」『新視点中世城郭研究論集』新人物往来社 2002）。その後、発掘調査では、ほぼ絵図通りに土塁・堀が検出され、これらが15～16世紀に築造されたことが確認された（『京都市内遺跡発掘調査報告』平成21年度 2010他）。さらに近世期の由緒書では、当空間を本所である近衛氏の「下屋敷」と認識しており、近世期「牢人」として在住した革嶋氏は、城跡に在住する

にあたり、常に近衛氏との関係に言及していた。革嶋氏は鎌倉時代後期から同荘の下司職に赴任していたことを勘案すれば、「御所力キ内」は同荘の政所屋敷と考えられる。革嶋氏は、近衛氏領革嶋南莊の政所屋敷を次第に自らの居館に転化していくことで、同地の支配権を確立していくと考えられる（福島克彦『中世方形館研究の問題点』『城館史料学』4 2006）。

なお、革嶋城跡の東に隣接して、西岡の幹線用水である桂川用水（寺戸用水、今井用水）が流れている。この用水路は、元禄15年、革嶋氏の領域を区切る境界となっていたが、構造的に用水を堀へ引き込む意思が見られない。また、革嶋集落の南西部に用水が複数分岐する樋口が見られるが、革嶋城跡は、この箇所とも空間的に離れている。近世絵図面によれば、革嶋氏の居館に四周する堀の水は、革嶋集落内部を流れた排水路（悪水）から入れており、用水路とは区別している。したがって、革嶋氏が堀の水を自らの支配権のために使用した可能性は、きわめて低いと思われる。

筆者は、中世城館における堀の用水使用を認めていないわけではない。物集女城跡（向日市）の東側の堀のように、近隣における一部の水田に使用されたことは考えられよう。ただ、物集女城跡の西側が空堀であるように、堀の機能は四周を囲繞して隔絶性、防御性を高めることが目的であり、用水使用は、その副次的要素と考える。

(2) 中世期に描かれた居館絵図

次に注目される点は、中世期に描かれた堀に囲繞された居館の図面である。現在、中世期に描かれた絵図類は、2点残っている。個々を取り上げる。

第一に「新見莊内屋敷敷図」（図47『東寺百合文書』サ 寛正4年1463）があげられる。これは、備中新見莊の百姓谷内氏の屋敷図として認識されていたが、谷内氏の主殿が堀で囲繞された空間Bの外に位置していた。そして客殿や庫裏がある空間Aが別個にあるため、これが政所屋敷と評価されている。重要なことは、管理している谷内氏が囲繞された堀の外側に生活空間を置いている点である。政所屋敷という公的な空間（A）と自らが生活を営む空

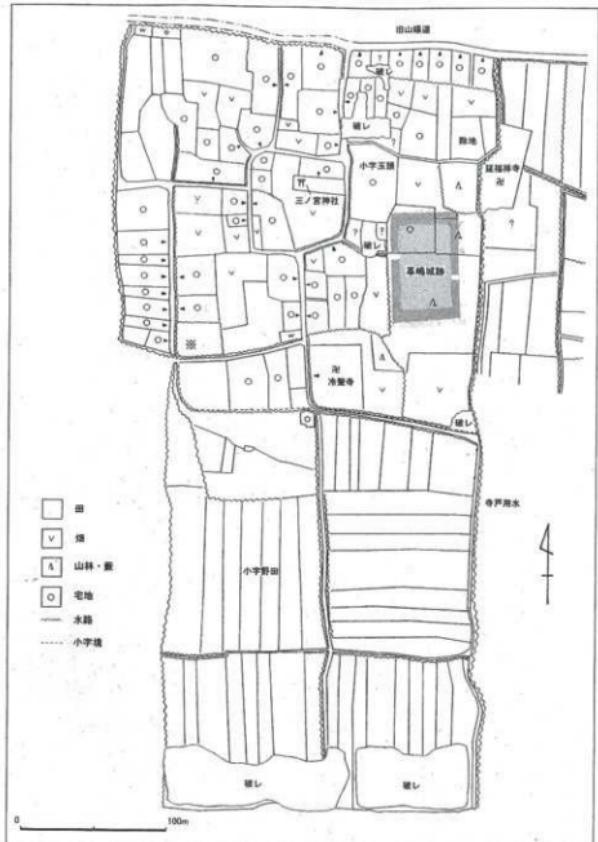


図46　革嶋城跡周辺地籍図（明治31年）

間(B)を分けていた事実が理解できる。絵図では堀のみならず、柵を四周されており、虎口には門や橋が設置され、防御機能も兼ね備えていた。

第二に「勝龍寺近隣指図」(『九条家文書』永正2年1505)があげられる。同図は、九条家領小塩荘の代官職香西氏と直務支配を望む九条氏の抗争の場となつた神足館の図示した資料と考えられている(図48『九条家文書』)。これも、方形の堀で囲繞された区画であり、内部には建物らしい表現が見られる。代官と本所が年貢をめぐって刃傷沙汰の場になつてゐたことを想起すれば(百瀬ちどり「九条政基の『小塩莊下向付』を読む」『長岡京古文化論叢』2),やはり、当施設は九条氏領小塩荘を現地で司る政所屋敷だったと推定される。

このように、現存する2点の居館の中世絵図類においても、その機能は政所屋敷であったと考えられる。土塁の存在は不明であるが、両者は方形区画を有し、周囲を堀で取り巻いていた。さらに1~2ヶ所の虎口を設置していた。

このように考えると、政所屋敷という莊園經營の中核だったからこそ、外部者に対して排他的な構築物を築いたと考えられるであろう。城館という防御施設の成立は、単に在地領主の伸長や彼らの武芸といった職能の問題だけではなく、年貢収納や算用状の管理といった現地における莊園經營と深く関わっていたと見るべきであろう。換言すれば、こうした地域社会における中世前期の城館跡は、政所屋敷だった可能性が高く、こうした遺構を研究、分類していくことは、莊園制の実態を見る上でも有効な遺跡と考えられる。

3. 級内・近国における発掘事例

(1) 各城館遺跡の考察

ここで改めて注目されるは、近年級内・近国において、中世前期

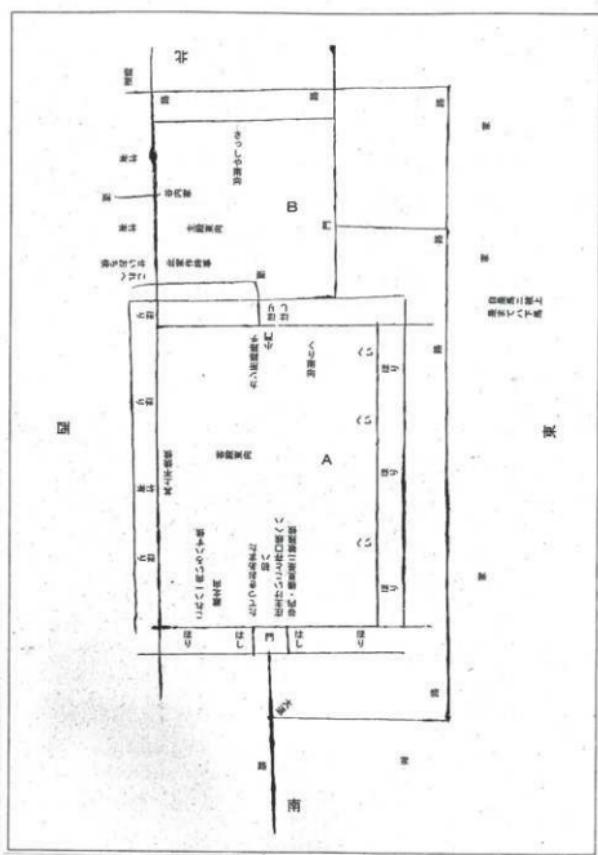


図47 新見莊地頭方百姓谷内家指図(『東寺百合文書』サ399 寛正4年)

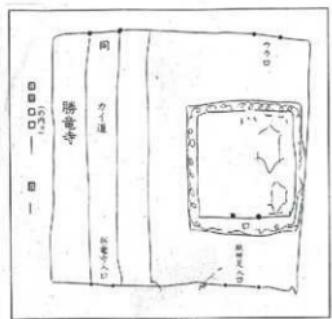


図48 勝龍寺近隣指図(『九条家文書』)

の居館跡の発掘事例が集積されている事実である。特に京都府域では、12～14世紀の遺構が多数検出され、その多様な様相が明らかになりつつある。ここでは、これらを順に紹介していきたい。

①大内城跡（福知山市）

大内城跡は福知山盆地の南の台地上に位置する居館遺跡である。中世期は六人部莊にあたり、当城跡はこれを見下ろす立地であった。六人部莊は、土師川流域にあたり、広域な莊域を誇っていたが、この大内城跡は、その中核的存在であった。

六人部莊の初見は大治3年(1128)6月付の平資基屋地去渡状(『九条家文書』)である。これによれば、平資基が父資孝から相伝した所領のひとつに「丹波国六人部御庄」が登場する。

寿永3年(1184)4月5日、源頼朝は、平清盛の異母弟頼盛を赦した際、平氏没官領のうち、頼盛の所領を本人に還付している。これは、頼盛の母であり、かつて頼朝を助けた故池禪尼の「恩徳」に報いるためであった。その際、丹波六人部莊を含む10の莊園は、本家として王家領莊園の八条院領に組み入れられ、頼盛は、その下の領家職を担つたようである(『吾妻鏡』)。したがって、六人部莊は、12世紀後半、平氏管轄下の莊園として維持されていたことになる。その後、六人部莊は龜山天皇皇子守良親王(五辻宮)に譲与された。この時、嘉暦3年(1328)9月27日付の五辻宮領注文案(『海住寺文書』)には「六人部莊内」として「大内村」の名が現れる。

貞治5年(1366)5月には、鎌倉將軍家の流れを組む五辻宮祥益が故光明親王の菩提のため、六人部莊を天龍寺に寄進している(『天龍寺重書目録』)。さらに応永17年(1410)2月には、南禪寺正眼院に寄進された(『天龍寺重書目録』)。このように京都の有力禪宗寺院において、莊園が繼承されている点を見ても、同地が京都と緊密な関係にある土地であったことがうかがえる。しかし、以後も天龍寺領は存続し、応永27年(1420)4月の丹波守護細川満元遵行状において、天龍寺領の「六人部九ヶ村」他の村落に対して、臨時課役・守護役の停止を伝えている(『天龍寺重書目録』)。同年5月、天龍寺領六人部莊九ヶ村の沙汰人、名主、百姓が、天龍寺へ起請文を提出しているが、大内村には「大内 立垣判」「大内 堀判」「大内 小林入道判」が据えられており、複数の有力者が在住していたことがわかる(応永27年5月12日付「丹波國六人部莊沙汰人名主百姓等起請文案」「天龍寺文書」)。このうち注目されるのは、大内に堀という名字の有力者がいた点である。中原康富は文安6年(1449)5月19日、大炊察領今安保(福知山市)に向むる際、丹波土師宿に到着した。その際「即向天田郡々司堀孫次郎顕而謁之」と記し、近隣の堀孫次郎顕に出向いている(『康富記』)。前述の史料によって、堀氏が立垣、小林入道とともに大内に在住していたことがわかるため、天田郡の堀孫次郎も大内に居館があった可能性が高いと考える。

以上の点から、六人部莊が12世紀後半に平頼盛、八条院領、さらに14世紀からは天龍寺領として存続していた

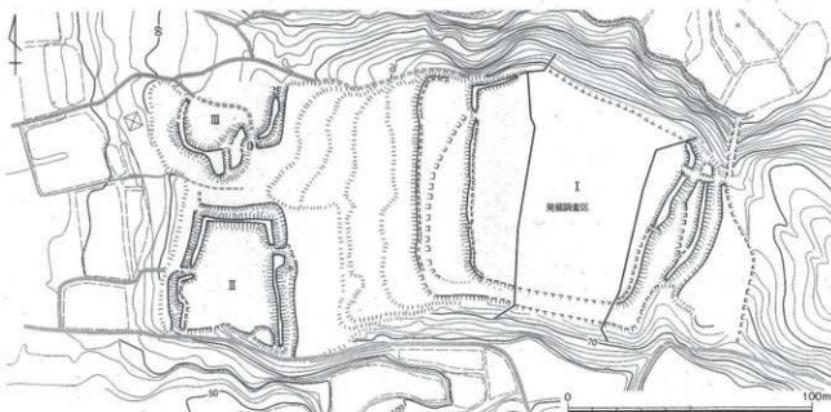


図49 丹波大内城跡概要図

こと、15世紀前半から中葉にかけて、大内周辺に天田郡司堀氏の居館があったことが推定される。

大内城跡は、大内地区の東の台地上にあり、遺構はⅠ～Ⅲ区の三つに分かれる(図49)。最も高い位置にある空間Ⅰは一辺100メートルを計り、周囲は微高の土塁と堀で区画されていた。このⅠは発掘調査が実施され、大型の掘立柱建物、雜舎が複数検出されている。多量の遺物が出土しているが、そのなかには舶来品の中中国製陶器も多数確認され、日宋貿易が行なわれていた往時の様相を知ることができる。遺物の時期から、盛期は平安時代末から鎌倉時代初期、および鎌倉時代初頭の二時期が推定されている(<財>京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書』第3冊 1984)。

なお、Ⅰは戦国期の遺物は少くなり、ほとんど使用されていないという。一方、西側40メートルの台地先端には、未発掘の土塁・堀組みの方形跡が2基(Ⅱ、Ⅲ)残存している。これは高さ2メートル弱の土塁と堀が取り巻き、双方とも折れを作り、櫓台と虎口が看取できる。これらは明らかに中世後期の15世紀以降の遺構と考えられる。前述したように堀氏は、15世紀中葉に天田郡代としても活動したと言われば、大内城跡は同郡の守護所の一端を担っていた可能性がある。

このように、大内城跡は中世前期から後期に連続と統一していった貴重な遺跡である。前期は発掘された遺構Ⅰ、一方後期は地表面で現存する遺構Ⅱ、Ⅲと、空間的にも変遷していったと考えられる。さらに、六人部荘の拠点(政所屋敷)が、次第に天田郡代の居館に使用された点も注目される。

②上ヶ市遺跡(福知山市)

由良川に南にのぞむ広域の台地上に構築された遺跡である。同地は松尾社領鶴御荘のほぼ中央に位置する。

鶴御荘の名は、養和元年(1181)9月16日付の丹波國宛官宣旨(『松尾神社文書』)に初めて登場し、寛治5年(1091)11月、天田郡前貫首丹波兼定の寄進によって、松尾社領となった。

嘉祐4年(1238)10月に地元の地頭政所屋敷の補修をめぐり、松尾社主掌僧覺秀と地頭で在京武士だった大宅光信との相論が起こっている。新しく赴任した地頭方の莊官は「地頭庄屋」(地頭政所)の「草屋」のうち、「本宅」を「薪」にしてしまう一方で、「新造五面三面式屋」を築こうとしたという。これに対して、現地百姓は政所屋敷を築くことは「百姓之大營」であると認めつつも、新儀の建設には難色を示した。一方、大宅光信は以前政所屋敷が破損した場合、百姓が対価を捻出し、公文の家を買い取って庄屋を作った事例をあげ、こうした現地施設の補修、改築が在地において恒常化していた実態を主張し、今回の構築が新儀行為ではないと反論している。この相論は、結果として松尾社側の主張が採用されたが(嘉祐4年<1238>10月19日付、六波羅裁許状『松尾神社文書』)、注目されるのは、在地社会が旧來の「草屋」風の政所屋敷、地頭方莊官が新規造作の「新造五面三面式屋」と対置的に捉えたことである。特に地頭方の建造物を華美な存在として主張した点は注目されよう。莊園の中心施設に対するイメージが、現地側と地頭方で相違していた点は重要である。

さて、この上ヶ市遺跡では、複数の時期のうち、第4期にあたる平安時代後半から鎌倉時代前半までの時期が盛期にあたる。

この時期の遺物としては、土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器などが出土している。建造物では、総柱となる掘立柱建物群、堀、溝、井戸などが確認されている(図50 福知山市教育委員会『福知山市文化財調査報告書』21 1993)。特に重要なことは、台地上に



図50 上ヶ市遺跡概要図

おいて溝で囲繞された方形区画があり、その内部に複数の掘立柱建物群が確認された点である。建造物は、溝の区画の北側に位置し、南側は空闊地となっている。この点から、この遺跡の建物は南向きであった様相がわかる。前述した大内城跡¹と立地的には類似するが、同遺構が地形を活かして縁辺部に土塁・堀を設けて方形区画を指向していたのに対して、上ヶ市遺跡は地形の縁辺部を活用せず、台地上の広い平坦地に約70メートル四方の方形区画を築いている。ほぼ100メートル四方の平坦地に、こうした区画が複数配置されており、遺物から察しても、在地社会とは離隔した空間が維持されていた。思い切った言い方をすれば、方形で区画された建造物群を並立して配置した建造物群の遺構といえよう。

さらに注目したいのは、台地の付け根にあたる北縁には、長さ60メートルにも及ぶ堀切、横堀が確認された点であろう。これは、台地の背後を遮断する存在であり、前述してきた台地上の建造物群を仕切る存在となっている。

前述したように雀部莊では、当地を経営する政所屋敷の維持管理をめぐり、松尾社と地頭方が対立を続けていた。両者は政所屋敷を別個に造成して対抗するのではなく、一つの空間をめぐって抗争が続いた。これが上ヶ市遺跡と一致するか、否かは明確にはわからないが、同遺跡が長期に存続していたこと、雀部莊を眼下に見下ろせる場所であることから、やはり莊園と関連する遺跡と考えられるだろう。

③上中城跡（京都市右京区京北町）

同地の京北町は、近年京都市右京区と合併したが、もともとは丹波国桑田郡に属した地域である。上中は、大堰川（桂川）の上流にあたる弓削川上流に位置する。周囲は平安末期より後白河院の長講堂領弓削莊と呼ばれた区域である。建久2年（1191）10月付、長講堂所領注文（『島田文書』）には、弓削莊が公事務として、御饗、京筵紫賛、節器物などを貢納して、賦役を務めていた。暦応4年（1341）光嚴上皇が院宣を下し、天龍寺に領家職、地頭職を寄進している（『天龍寺造営記録』）。以後、弓削莊は「年貢料木」を本所に納めていたが、文和元年（1352）10月12日、出雲社の上分と称して丹波国眼代が「宿野河」（場所不明）に新闇を設置して半分を取ろうとしたため、將軍足利義詮が丹波守護仁木頼章に命じて取り締まっている（『天龍寺重書目録』）。貞治4年（1365）4月29日にも丹波目代宗覺が、弓削莊の年貢と木材、山国莊の榎用木に対して、「宿野河」、大谷（南丹市）、野々村莊（南丹市）、保津（亀岡市）で半分や川手、関貸をとろうとしたという。そのため、やはり將軍義詮が丹波守護山名時氏に対して、取り締まりを命じている（『天龍寺重書目録』）。以上の点から、弓削莊が天龍寺の木材供給源になっていたことが理解できる。文明17年（1485）12月には、天龍寺が弓削莊の年貢が減少したため、天龍寺が支払う必要のあった本所の大光明寺、藏光庵への本役が減じることを通告している（『蔭涼軒日録』）。この点から、応仁・文明の乱を契機に弓削莊からの年貢納入も大きく滞り出した様相がうかがえる。天文21年（1552）11月の細川京兆家奉行人飯尾元運奉書（『記録御用所 古文書』上）には、野々村莊を拠点に持つ川勝左京亮に対して「弓削庄上下」の知行が認められている。このように、16世紀中葉に入って、近隣の国衆による直接介入が見られるようになった。

一方、在地側の動向については、一次史料から確認することはできない。そこで近世の地誌『丹波志桑田記』には、以下抜粋してみたい。

『丹波志桑田記』（江戸時代）

草木氏

橋姓、天仁年中鳥羽院上北面藏人太夫正平五代孫國直、弓削ノ庄司ニ成ル、弓削中村ノ内西宮惣ト云田ノ中ニ居城ス、國直後孫越前守頼泰、光厳院法皇當都御座ノ時勤仕シ、徵慮ニ叶ヒ、草木ノ苗字ヲ勅許アル、天正年中越前守守親代迄連綿相続スルノ所、此時ニ至テ明智光秀周山ノ城ヲ築ノ頃、守親三十二才ニテ死、

（略）

往古弓削氏、今草木氏、本家庄右衛門、先祖ノ城跡本丸今田地ト成ル、字ニ城屋敷ト云、東西十七間、南北四十間計、北ノ方へ片寄テ、幅三間、堅十五間斗ノ土手アリ、此所御除地ナリ、杉ノ古木一村生タリ、中ニ小社アリ、先祖ノ靈ヲ祭爾、城主權現ト云、屋敷廻り幅四間計リノ堀ノ形アリ、今ハ田地トナル、字ヲ堀ト云、近キ田地ノ字ヲ城上・城下・城ノ元ト云、今ニ城屋敷・城主權現ノ社、代々草木家支配ナリ、

これは、弓削在住の草木氏に関する記述である。これによれば、弓削莊には天仁年間（1108～10）に鳥羽院のも

とで北面の武士に属する藏人大夫正平の五代後の国直が、弓削の「庄司」になったという。彼は弓削荘の中村の西宮と呼ばれる水田に居館を構えたと伝える。この国直の孫の頼泰は、14世紀に光嚴院から草木氏の名字を認められたとする。

一方、城跡の様相も記しており、「城屋敷」と呼ばれる地名と東西よりも南北に長い長方形区画が解説されている。この区域は草木氏の支配となっていたが、北側の土堀は徐地になっていたという。周囲には堀跡がめぐり、外部には城上、城下、城之元、堀などの地名があったとする。

上中城跡は、弓削川の西側に位置し、水田地帯に残存する平地城館である(図51 昭和前期)。地籍図でわかるように同地は、方一町の条里型地割が広がった水田地帯である。ただし、城跡部分は比較的安定した地盤と考えられる。城跡からは12~13世紀の土器が出土しており、鎌倉時代までの構築物と考えられている。また、周囲の長細い一定幅の区画が取り巻いているが、発掘でも堀跡が確認されている(京北町教育委員会『上中城跡発掘調査概報』1994)。

本城跡の特徴は、周囲の条里型地割に規制されずに、斜行した状態で遺構が築造されている点である。楕円形の区画、周囲には堀(幅5メートル、深さ1メートル)、北辺に高さ1メートルの一文字状を呈する土堀が見られる。中世前期の遺構ながら、地表面に土壙を残す貴重な事例といえよう。この土壙は徐地として近世期は保護されてきたが、その構築時期が前述の遺構時期と合致するか、気になるところである。

城跡部分は小字「城」が残り、周囲には維持主体の影響下の水田と考えられる「城ノ下」「勝山田」「太田」、さらに城の東側には、南北に続く街道があり(現在の国道162号線)、かつては城の東側の勝山田で屈曲していた。街道沿いのうち、城の北東には「制札」、南東には「古札場」の地名がある。城が近隣にあったことを想起すれば、外部に伝達するような場だった可能性がある。

一般に平地城館は、周囲の条里型地割に規制されて築造されている。しかし、上中城跡は、この地割に斜行して築かれており、規制を受けていない。今後、城跡と周囲の水田地割の切り合い関係が注目され、古代、中世前期の土地開発を考える上でも貴重な遺跡である。

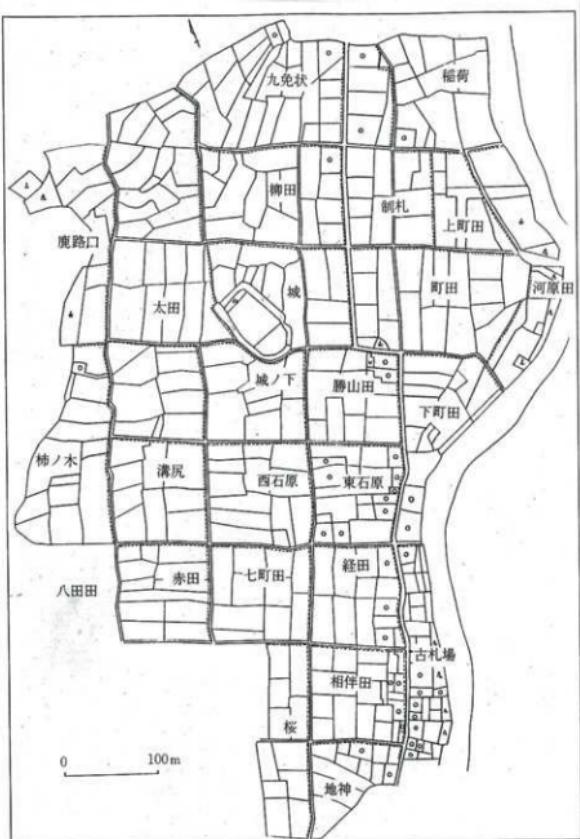


図51 丹波上中城跡周辺地籍図(昭和前期)

④犬飼遺跡（亀岡市）

犬飼遺跡は現在の犬飼集落の南側の水田地帯に位置する中世遺跡である。当地は北側の法貴谷川が形成した扇状地の北端に位置する。遺跡の北側は段丘崖となり、犬飼川の氾濫原となっている。

当地の中世前期の様相は不明であるが、法貴村周辺と言われる曾我部郷の召次保には名の進退を管掌する役職として「桑田郡司」の存在が指摘されている（飛鳥井拓「文献史料に見る丹波の中世城館と領主」第144回埋蔵文化財セミナー 2020）。

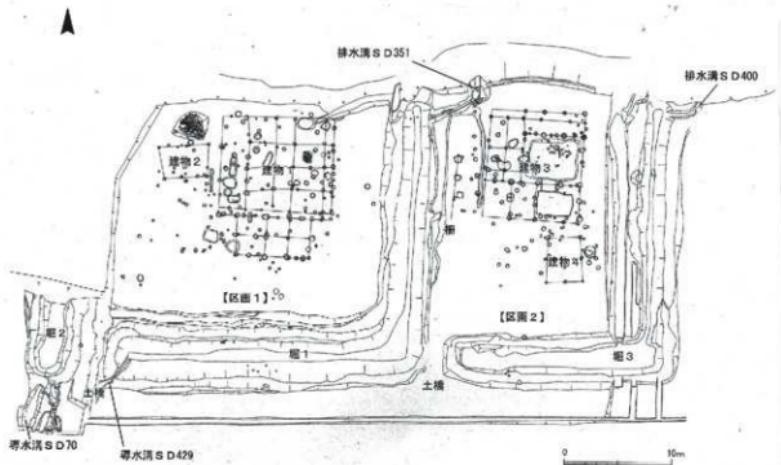


図 52 犬飼遺跡概要図

発掘調査によれば、区画1と区画2という二つの曲輪が確認された。基本的に方形区画を指向しており、周囲の条里型地割に規制された存在である（図52）。各々南、西、東の三方に堀を設け、外部からの隔絶性を高めている。また、北側はともに段丘崖となっており、一種の後堅固の立地となっている。中核となる区画1には主屋となる総柱型掘立柱建物があり、周囲の細かい柱穴から、板張りの床が推定されている。一方、区画2の主屋は土間が残存していたと考えられている。さらに区画1の堀は深さ2メートル、幅8メートル、区画2の堀は深さ1.5メートル、幅6メートルを測る。なお、区画（曲輪面）の外縁は柱穴が少なく、空闊地となっているが、土壁があつた可能性は低いと考えられる。ただし、区画1の西側などに竹の地下茎が確認され、竹藪敷地や生垣による画定も推定されている。

各々の曲輪の南西隅に土橋を設置し、通路を確保している。ともに、防御的に不適な隅角部に築かれている点は注目されよう。うち区画1の土橋には北から流れてくる水路が堀に注がれよう導水溝が敷設されている。堀の水は区画1、2ともに北東隅の側面に排水溝を設け、崖下へ流していた（桐井理揮「堀の内には誰が住んだのか？」第144回埋蔵文化財セミナー 2020）。

内部の建造物配置と土橋の関係と北側の段丘崖を勘案すれば、やはり区画1、区画2ともに南向きの建造物と考えられる。

外来系天目茶碗、中国製緑釉陶器、漆器椀、常滑・瀬戸の壺など出土しており、13世紀後半～14世紀前半が推定されている。

当遺構の最大の特徴は、複郭で構築されている点であろう。規模やプラン的には区画1の方が優越しているが、建造物の規模などは、ほぼ同格であり、主従関係というよりも、並立している雰囲気が強い。一般に、こうした館の

並立バターンは、16世紀における領主の同名中が横並びとなった際に説明されてきたが、13世紀後半～14世紀前半段階で、こうした構築物が完成していた点は注目される。

^⑤下海印寺遺跡（長岡京市）

小泉川の左岸(北)の河岸段丘線に立地する(図53)。約50メートル四方の区画で、堀の深さ1.5メートル、幅4~5メートルである。内縁には柵列が検出され、堀の内側を囲繞していた(『京都府遺跡調査報告書』150<財>京都府埋蔵文化財調査研究センター 2012)。西辺中央に土橋(石積み付隨 後世か?)があり、柵列が途切れていることを評価するならば、城館の開口部と考えられる。これは普請にかかる構造と作事の遺構が合致した貴重な事例であろう。内部には掘立柱建物2棟が検出され、11~12世紀の遺物が出土から、平安時代末期の居館と考えられ

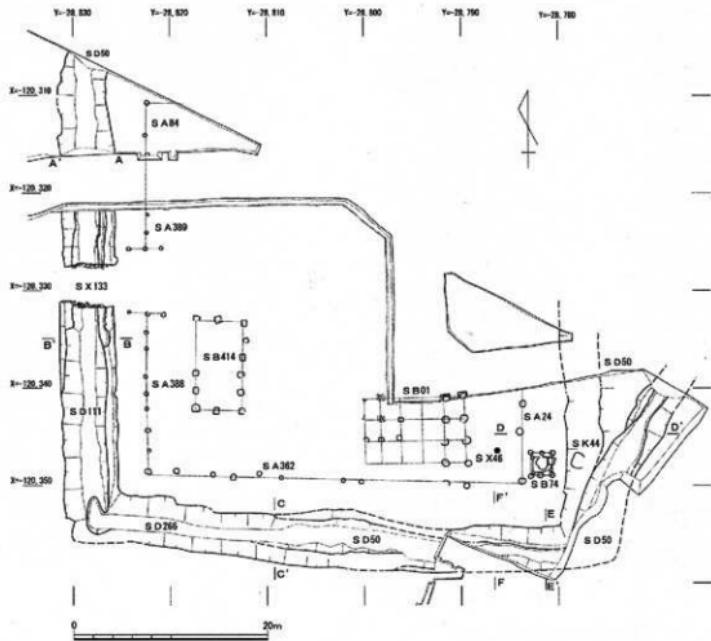


図 53 下海印寺遺跡概要図

ている。

11～12世紀という、きわめて古い遺構であるが、段丘崖という立地、堀の囲繞、土橋の存在から、外部に対して隔絶性の高い構築物である。また、方形化を指向した施設としても重要な存在である。

⑥楠葉中之芝遺跡（枚方市）

淀川左岸に立地した河内国楠葉における中世前期の居館跡、および建物群跡である(図54)。中世期遺構が検出されたのは、おもに1区と2区で、行基建立と伝える久修園院の北西にあたる。1区西側には、幅2.3～3.1メートル、深さ1メートルの堀が逆L字形を呈して検出された。堀内部から土師器皿、瓦器椀、瓦質土器の鍋、青磁、下駄(12世紀後半～13世紀前半)などが出土しており、13世紀前半に築造したものと考えられる。なお区画から井戸1基

が確認されているが、これらの内壁は船底木枠で補強されていた。淀川沿岸の立地から勘案すれば、船航に関わる施設だった可能性がある。一方1区の東側には、二つの東西溝（道路）と宅地区画が確認されている。このルートは東西路で、延長すると前述の淀川沿岸の堀で区画された空間につながるため、関連施設と考えられる（「楠葉中之芝遺跡 第64次調査 現地説明会資料」枚方市教育委員会 2013）。

図54 楠葉中之芝遺跡概要図

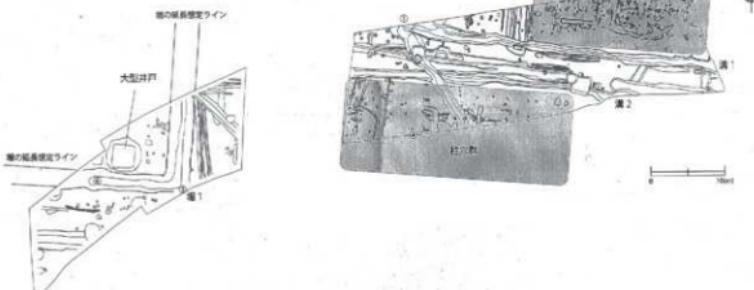


図54 楠葉中之芝遺跡概要図

当地は、山城国橋本（京都府八幡市）と河内国楠葉（大阪府枚方市）の境界にある。その際、中世前期においても橋本津で水路閘を設置しようとした動きがあったこと、楠葉閘所が14世紀頃まで興福寺・春日社による閘所が断続的に立地したことが指摘されている。これは、やはり摂閑家の殿下渡頭として存続した楠葉牧との関係が深かったことが起因するといわれている（大村拓生「楠葉閘・禁野閘の領主と地域社会」『枚方市史年報』18-2016）。また、13世紀前半は対岸に後鳥羽院の水無瀬離宮が造成されており、この楠葉中之芝遺跡も、その渡河地点として重要視されていたと考えられる。

当遺跡は、淀川沿岸という立地とともに、鎌倉時代前期の居館跡と道路、集落跡がセットで検出された、きわめて珍しい存在と位置づけられる。近年、畿内・近国での武士団の活動は、流通などとも強く関連していたことが強調されている。立地や遺構・遺物から察して、当時の武士団と淀川舟運との関わりも考えられる遺跡である。

⑦日置荘遺跡（堺市美原区）

興福寺領鈎物師の拠点であり、かつ中世後期は室町幕府御料所であった河内日置荘の居館跡である（図55）。遺物から、堀の掘削時期は13世紀中頃といわれ、15世紀ころに廃絶したと推定されている。重要なことは、囲繞された堀の内縁が空闊地となっている点である。そのため、土壙の基底部と推定されており、13世紀中葉まで土壙構築が週及するか、注目される遺構である。

(2) 中世前期城館の構造的特質

以上、畿内・近国における中世前期の城館跡について考察



図55 日置荘遺跡概要図

してきた。以下、大まかではあるが、概観してみたい。

第一に、自明であるが、近年の発掘調査によって、畿内・近国においても平安時代後半から鎌倉時代の遺構の類例が増加したことが理解できよう。当該期における各々の地域史は改めて検討していく必要があるが、一般には山城、丹波、河内は権門寺社の勢力が強く、当然莊園制も維持されていた。その点を勘案すれば、在地領主側の伸長という要素だけでなく、莊園経営の拠点という意味合いの方も十分視野に入れていく必要がある。特に今回の遺構は、楠葉中之芝跡を除き、周囲の莊園の中心、あるいは視界を収める台地上に位置しており、地域支配とも関連していたと考えられる。

第二に、各遺構とも立地、及び構造が多様であると理解できよう。今まで、城郭史の分野では単純な中世前期の方形館から、複雑な中世後期の城郭へ、という流れで考察されてきたが、今回取り上げた遺構のように、中世前期の城館の立地、構造は、実に多様な存在であることが確認できたと思う。

そうしたなかで、大内城跡や海印寺跡のように台地上、段丘縁という条里型地割に規制されない立地にも関わらず、方形プランを指向していた点で注目される。一般に平地の城館は条里型地割による規制によって、屋敷地が方形を指向すると言われている。しかし、今回のように方形を指向する動向が耕地、開発地に關係なく築かれていた。一方、条里型地割の中にありながら、これに斜行する形で築かれた楕円形の構造の上中城跡も特徴的である。

第三に、中世前期において、土塁の構築事例が存在したことがあげられる。大内城跡、上中城跡、日置莊跡では、外部と画する土塁が構築されている点で注目される。前述してきたように、中世前期の方形館では土塁構築が稀と認識されていたが、改めて地域を絞って検討すると、こうした遺構が頗るに確認できたと考える。なお、大内城跡、日置莊跡が四周を囲繞する構築方法を探るのに対して、上中城跡は北側のみの構築であり、背後を遮断する意味合いが強く、山城などに見られる堀切機能と色彩が似ている。

第四に、堀の用水機能については、頗著な遺構は見られなかった。犬飼遺跡では、南から水田をめぐった排水が各々の堀に流入している様相があり、かつ堀の北端は土手で閉じられているため、一定の貯水機能が期待できる。ただし、それは土手の形状から貯水量は限定的であった。また水路（導水溝、排水溝）と土橋（通路）との分化が進展しておらず、用水機能に特化しようとした工夫は見られない。また、堀底における貯水機能なども見られないため、現状では各遺跡の堀における用水機能は低いといえる。

台地上や段丘崖に城館が築かれたことを想起すれば、四周の堀の機能は、やはり外部への隔離性（防御性）を高めることが第一義であり、用水は、あくまでも副次的な機能と言わざるを得ない。

第五として、中世前期から後期への連続性の問題がある。今回、発掘調査で確認されたように、大半の遺構は14世紀までには機能を失っている。これらは、現地における莊園経営の消長や質的な転換があったものと考えられる。一方で13世紀末の近衛氏領革嶋南莊の「御所力キ内」は、15～16世紀に成立した革嶋城跡と重複し空間であった。このことから革嶋城跡は、現地の政所屋敷を繼承したと考えられている。さらに、六人部莊の拠点だったと推定される台地上の大内城跡1も、15世紀前半以降には西麓の方形館2、3へと拠点が移転したと考えられる。つまり、こうした遺構場所の合致性や移転範囲の近接性から、現地から莊園を考察する視点が成立し得ると思われる。

おわりに

本稿では、近年の中世前期の城館遺構の研究史と、畿内・近国における発掘事例を概観してきた。そうしたなかで、条里型地割に規制されず、かつ土塁を残存する上中城跡は、かなり貴重な事例と位置づけられる。周囲には、領主支配に関わる小字名なども残存しているため、今後は城館そのものの検討とともに、村落景観のなかで位置づける作業が必要となると考える。

また、畿内・近国における当該期の城館遺構が、きわめて多様な特徴を持つことも確認できた。台地上という立地、方形化の指向、土塁・堀などの囲繞する施設の築造、曲輪に複郭化など、中世後期でも見られたような動向が指摘し得た。今後は、こうした多様性を活用し、分類を進めることによって、各々の特徴をまとめていく必要がある。遺構的な多様性に着目することによって、むしろ中世前期における地域社会の変動、たとえば権門側の莊園経営と在地領主（武士団）の協同、対峙などの議論へ発展化できると思われる。こうした視点については、今後に期したい。

図説 周山盆地西部・弓削川低地の地形と上中城跡の立地条件

中塚 良

1. 緒言

嵐山、保津峡、亀岡を経て、桂川の上流を丹波山地の谷沿いに辿ると、川は北と北東にV字に二股に別れ、それぞれに奥行きある盆地に行きつく。西の弓削川と、東の本川の上桂川が貫流する周山盆地である。本稿の主目的は周山盆地西部・弓削川低地の地形と今回研究報告される中世上中城の立地条件の関係について、自然地理学的に検討をくわえることにある。特に後者の検討を要請されている。ただし地理学のスタンスであれば、まずは俯瞰からアプローチしたい。「断層地塊」(植村 1995)としての丹波高地における盆地の性状、盆地内部の地形面構成と変動履歴、さらに、城跡周辺の微地形にかかる各種主題図を用意した。縮尺順に図説、図解を試みる。

2. 地域概観 - 丹波高地における周山盆地 - (図 56)

地形・地質条件図(a)に、丹波高地(若丹山地)における周山盆地(図中コード: SZB)の位置を示す。産総研地質図・空中写真編集図(産業技術総合研究所 2021)に、『近畿の活断層』(岡田・東郷編 2000)に示される活断層配置をレイヤする。東ないし東南東走向で、南部において南東走向に遷移する活断層群(三峰 MTF・殿田 TNF 断層帯)が盆地を通過することがわかる。東西圧縮場における左横ずれ断層帯が形成される。地質は大陸縁辺における海洋底の沈み込みにともなうプレート境界堆積物としての中生代付加体堆積物(頁岩・砂岩・チャート主体)で構成される。侵食前地形モデル図としての、谷を埋める埋積切峰面図(b)(井本・清水 1989)では、標高 300 m コンターで閉じる盆状構造が確認できる。図(a)における桂川・弓削川合流点以北の平面V字状地形に加え、西・南に凹地が広がりをみせる。東西・南北各約 15 km の規模である。盆地の北西・南東側が相対的に低位であり、それぞれ、かつては由良川に集水されたといわれる胡麻川系(植村 1995)と保津峡に流下する清滝川系との間に、標高 500 m 程度の低い分水界をもつ。

3. 周山盆地西部・弓削川流域低地の地形条件 (図 57・58)

図 57(a)に弓削川主流路を中心におく地形図、(b)に同縮尺で空中写真展開図を配し、上中城跡の位置を四角で囲う。(a)には後述、地質露頭確認地点をプロットする。

図 58(a)は空中写真実体視による段丘面・沖積低地面を対象とした地形面区分の結果を写真上に示す。(b)は各地形面の名称をコードで示す。地形面は形態的特徴と高度分布にもとづき、段丘地形を 3 面(高位面:H、低位面:L、未区分面[H/L 間間]:*)、沖積低地を上・下 2 面(1 面:AL1、2 面:AL2)に区分した。さらに低位段丘面と沖積面の間の緩斜面に対し扇状地面(AF)として区分した。高位段丘面は連続性、保存性ともによくない。また、盆地中央・西岸域において分布が欠落する。未区分面については当初、形態的特徴から高位面として区分、抽出したが、後述縦断面図作成過程において不連続面となるものを除外した。沖積低地 1・2 面は一部低崖状の落差をともなう。盆地北部の1面は北北東向きの条里地割をともなう。他方、2面は流路状のパターンを確認できる。

[高位段丘面高度分布(図 c)] 残存する高位面の分布は、面形成後の「古弓削川」による広範な侵食作用の履歴を物語る。他方、上述、埋積切峰面図において認識される広域の盆状地形は侵食性の組織地形であると同時に断層帯の存在とあわせ活構造である可能性が示唆される。高位段丘面の高度分布パターンについて検討する。

弓削川・桂川合流点と上流の支流との合流点を結ぶ軸線を基準に、高位段丘面と沖積低地面の高さを投射し、プロットされた各面間を曲線でつなぎ縦断面プロファイルを描く。流路に対し右・左岸(各 W・E コード)で段丘面プロファイルを分ける。傾向として、段丘 W8 ~ W11、E7・9 付近における凸形、南北両サイドにむけて凹形配置をなすことがわかる。全体的には波状パターンを描く。高位面形成期以降の橈曲性の上下変動の履歴が記録されるものと解釈される。前述、活断層配置(図 56a・上)との関係では、たわみ落ちる範囲が断層群の延長の間あいに相当するよう見える。注目すべきは、現地形とは逆傾斜に向にある段丘 E5 ~ E8 直下の沖積低地 1/2 面境界に低崖群が

図説 周山盆地西部・弓削川低地の地形と上中城跡の立地条件

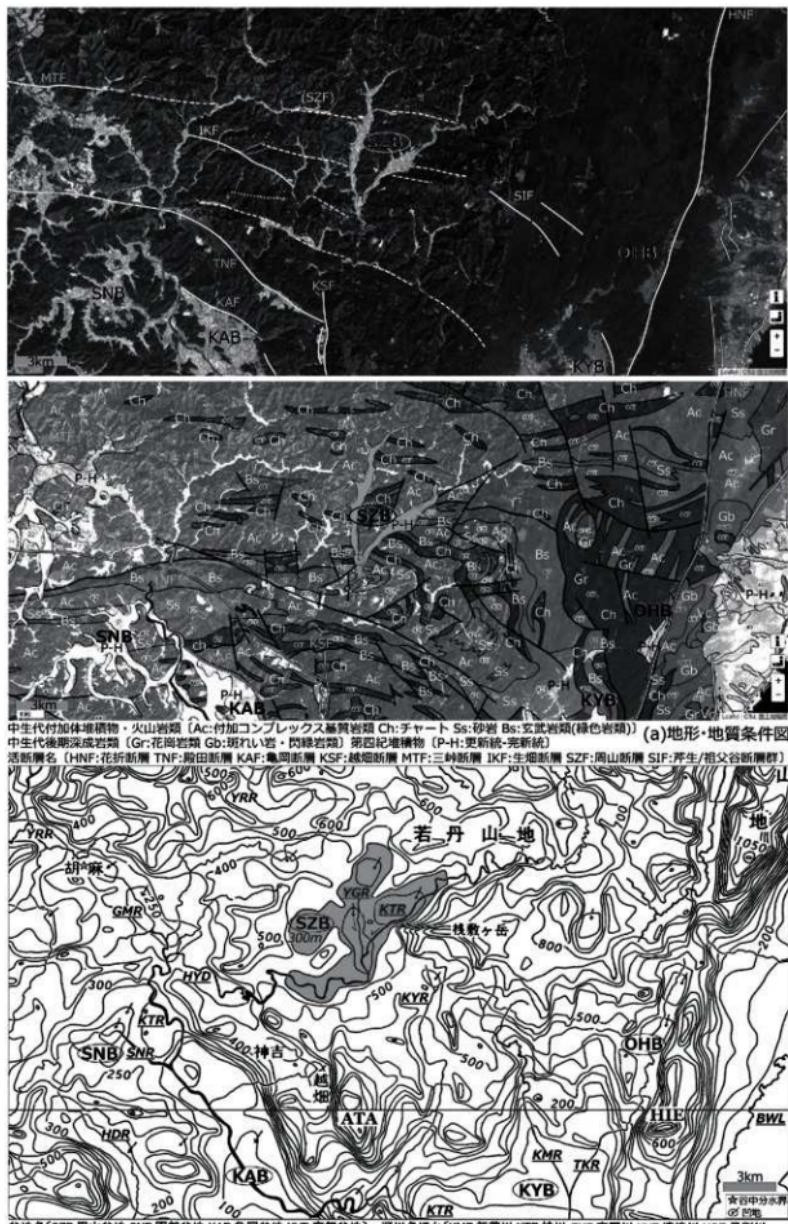


図56 周山盆地周辺地域概観図

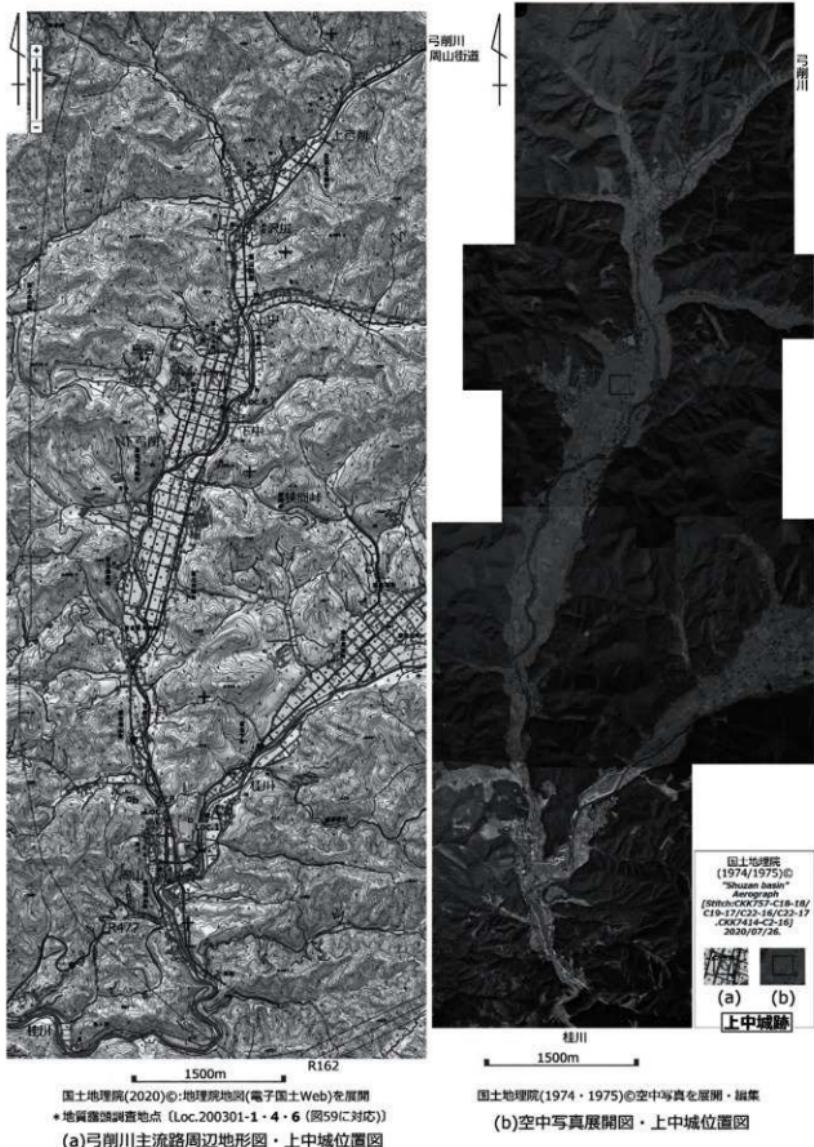


図 57 岡山盆地西部、弓削川水系地形図・空中写真展開図

形成される点である。崖の形成要因として地盤の相対的隆起の可能性が示唆される。沖積低地面形成過程において、なお撓曲的変動が継続する可能性を指摘しておきたい。

4. 段丘・沖積低地の露頭と景観(図 59)

観察地点⁽¹⁾がぎわめて限定され、結果、各地形面構成層の情報がとぼしく「地形面区分図」は予察図の域を出ない。上中城跡トレンチについても未実見であるが、本誌における記載から判断し扇状地前線の遺跡基盤は更新統相当と推測される。

〔周山古墳群北・高位段丘面(E15,Loc.0301-1)〕黄橙・淡黄褐色の虎斑状を呈する強風化礫層(亜角大礫主体、硬質)と下位シルト質層の層界付近の断面である。

〔周山市街北東・弓削川左岸・低位段丘面と基盤岩の不整合(Loc.0301-4)〕頁岩類基盤岩と低位段丘礫層の不整合(図 b1)。礫層は大礫>巨礫、大礫主体、大礫混じり小礫層の上方細粒化。海汰が悪いが一部に斜交葉理と覆瓦構造を認め、流路堆積物と判断される。層厚2~3m程度。南方に続く露頭において段丘礫層下位に断層破碎帯(黒色頁岩・粘板岩)を確認する(図 b2・3)。断層走向N68°~72°Wの西北西トレンド。走向延長の右岸側に、鞍部を作り分離丘が存在する(図 57 (a) Loc.4-b 地点表記)。断層地形と推察される。なお、破碎帯は全体で幅10m程度あり、例えば花折断層同様の長い活動歴をもつと考えられる(大原盆地北端露頭例)。

〔上中城跡南東・弓削川左岸・沖積低地1面下部礫層(Loc.0301-6)〕地質図には表現されない推定石英斑岩質岩巨礫をはじめる大礫主体の斜交葉理・覆瓦構造をともなう流路構成層である。露頭深度から1面下部層とみているが、2面か、それ以降の年代の流路堆積物の可能性ものごと。

5. 上中城跡の立地条件、遺跡周辺の地形条件について(図 60)

図(a)は上中城跡を中心に図 58 地形面区分図を切り出し、遺跡周辺の地形条件に間わりをもつと考えられる小字地名を本文冒頭図2から選択・転記する。「河原田、下河原、鳴滝、洲崎」の各地名が沖積低地2面また1/2面境界付近に確認できる。沖積1面の「赤田」の「赤」は水でみそぎをするの意味であろうか(白川 2003)。「ヤタ田」は「谷津」「谷地」が転じたか。

図(b1)も同じく本文図2微起伏図を引用、オーバーレイして空中写真のトーンを強調する。沖積低地1面/扇状地面の傾斜変換線が標高277m付近とわかる。上中城跡は扇状地末端に位置し、傾斜方向と併行する向きに施設を配置している。扇状地は流路の集合、即ち流路帶で構成される。気象条件の急変によって仮に久保谷から不意の出水が生じても、抵抗なく受け流せる、出水・洪水リスクマネジメントの配置を考えたい。一方、扇状地末端は地下水を浅層で得やすく、居住・戦闘時を問わず水の確保の点で有利であろう。なお、弓削川右岸、沖積低地1/2面境界の崖はセンターで表現、強調したいところである。

図(b2)は遺跡の周縁を取り巻く条里地割域において、特に暗色を呈する方格状のゾーンの区分を試みた。実体観によって周辺から一段さがるように観察され、また前述センター図は凹みの一部を表現している。分帶同様の幅をもつ水田が西側道路に沿って存在する。保護対象遺跡の外縁部であり、限られた発掘情報から推測すれば、北西主軸の現存する内郭に先行し、北北東向きの条理型地割方位に整合する施設の存在を想定できないであろうか(竹下ほか 1996)。例えば扇状地周縁における奈良時代以降の施設構築面への切り盛り工の痕跡が微地形に表現されている可能性である。施設変遷の存否について留意したい。

6. 結語

丹波高地の変動地形的発達史の観点から周山盆地を俯瞰し、盆地西部を構成する弓削川低地域において地形面分布を把握し、地形の変形・変位に関する分析によって断層活動に起因する変動が今なお継続する可能性を指摘した。マクロな自然地理学的分析結果に相当する。

図説後半、今回調査研究対象である上中城跡と周辺域に対し、地形面とそれを構成する微地形オーダーでの分析をおこない、突発的な出水被害リスクをかかる扇状地面末端部における地形・水文条件への対応の工夫、また、現存城郭遺跡に先行する方格状施設の存在の可能性に論及した。施設の改変・改造の存否の検証がまたれる。発掘成果は上中城跡の年代を遺構に伴う資料から13世紀後半下限を示すが、文献研究成果から今後12世紀代に遡及する可能

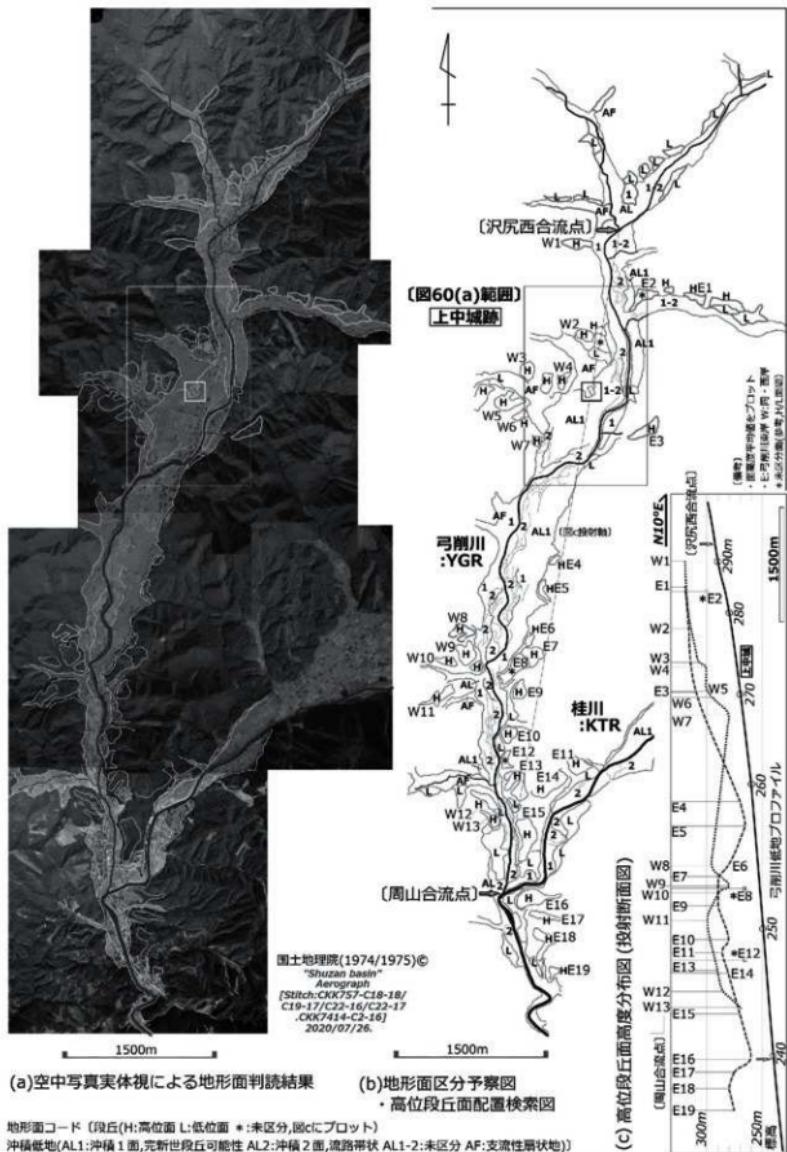


図 58 周山盆地西部、弓削川水系地形図地形条件図

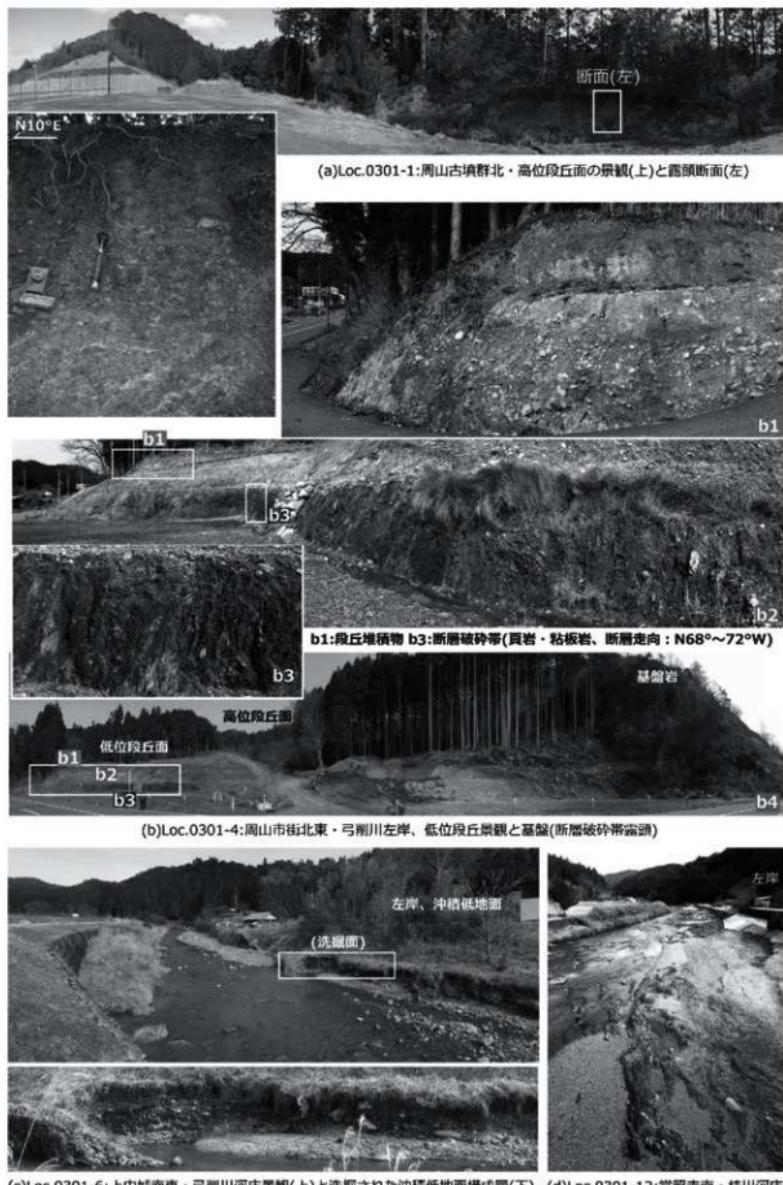
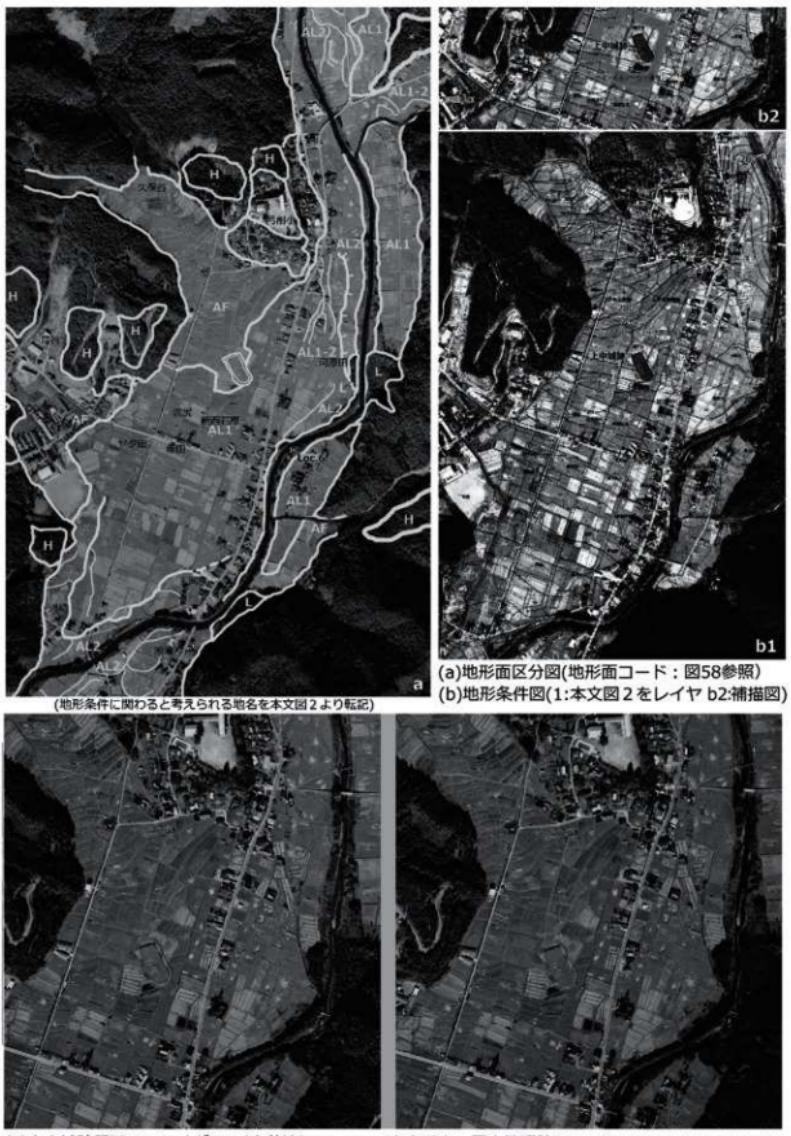


図 59 岡山盆地の景観と堆積物・断層露頭



空中写真：国土地理院(1975) CKK757-C20-16・15

図 60 上中城跡周辺地形条件図

図説 周山盆地西部・弓削川低地の地形と上中城跡の立地条件

性を指摘している。重ねて強調するが、地形判読成果にたって、保護対象遺跡の周縁域における調査の展開によって施設の先行利用履歴についての検証を期待したい。また、地形形成過程研究、ここでは遺跡周辺の地形条件変化の解説に不可欠な遺跡層序資料のあらたな入手、今後の資料的充実をのぞむところである。

〔註〕

- (1) 各地面形の形成年代について、堆積物に年代指標を確認できず記載しない。筆者のメインフィールド、京都盆地におけるこれまでの知見から類推すれば、高位段丘面露頭層(E15, Loc.01)は花折断層末端吉田山の上面や瓜生山東縁斜面に貼りつく赤色風化顕著な段丘堆積物に類似する印象をもつ。京都盆地北部の大坂層群からなる丘陵背面に載る堆積物に対比し凡そ20~40万年前の時期でみておきたい。低位段丘は後述註(3)に類比の印象を記すが、3万ないし5万年前後か。沖積低地Ⅰ面は上中城跡周辺の考古学的調査による遺跡の確認成果から古墳時代初期以前にその骨格が形成されたといえる。沖積Ⅱ面は上中城時代と重なる可能性があるが、現況不詳である。既存調査資料の再確認も要す。上中城跡の立地する扇状地面の年代的所見は後述註(5)にまとめて記す。
- (2) 段丘面蘚断層プロファイル作成によって、緩やかな扇状地的な勾配をもつ谷底低地プロファイルとの併行・斜交性の検証をおこなうが、盆地形成軸と蘚断層群が概ね直交関係にあることで波状構造が形成されたと推察される。基盤層の付加体コンプレックスの地質条件に従うおそらく選択的侵食による盆地輪郭の組織地形の形成と、ネオテクトニックな変動両者が今日の周山盆地の景観に表現される。なお、沖積段丘の性格をねびる沖積低地Ⅰ・Ⅱ面境界低崖について、形成因が河床の水理的特性に由来するのみならず、内陸盆地の断層活動域において変動地形的要因を考慮しうる可能性を知り得た点は大きい。
- (3) 2012.3.1、國下多美樹先生との巡査・踏査地点に相当。地形面構成層確認点を選択的に提示する。巡査地点を列記する。Loc.2:高位段丘面南端・周山古墳群(古墳時代須恵器壺資料を表面採集)、Loc.3:周山庵寺辺(工事現場にて低位段丘層露頭を観察。長岡宮北部低位面構成層との類似を想起)、Loc.5:上中城周辺(出水ボテンシャルをもつ久保谷筋と卯方位の関連性を「流れと舟」の整合関係に例えて議論。弓削川河床観察。大躍クラスでチャート>頁岩>砂岩類。石英斑岩なし半閃綠岩質頁岩巖礁点在)、Loc.7:周山街道(佐々江下中線交差点(下中市街、上中城郭主軸延長と交差点=辻の通間。國下先生の想定)、Loc.8:上中城西方「久保谷用水」、Loc.9:丹波マンガん記念館(冬季休館)、Loc.10:常照寺庭園、Loc.11:常照寺参道切通の層状頁岩露頭。東西走向的な葉理の屹立と折りたたみ状の褶曲。図59(d)写真提示のみのLoc.12(桂川河床の基盤岩侵食面)の垂直断面観察可能地点に相当する。なお、踏査から本リポート作成に至る過程について、デジタル版として再構成を試みた。URLを提示する。
https://youtu.be/awf3E9jGA_4
- (4) 「ヤ」、谷、谷津、谷地また谷口(ヤト)は水の浸潤して来る侵食地形、例えば開析谷を指す。「ヤタ田」は鳥谷谷口の扇状地前縁の凹地の地名であり、空中写真は暗色を呈し南の「洲崎」の沖積低地2面に連続する。「洲」は砂礫洲の景観を示唆か。
- (5) 上中城が構築される扇状地面AFの構成層について、①土累遺構基盤(國下・廣富ほか2018)、②城郭北縁~北方(竹下・奥村・石井1996)における記載がある。①は基盤をシルト~懶貯シルトの「段丘相当層」と区分する。層相は例えば京都盆地西縁域・中海道遺跡の低位段丘層に類似するという(國下私信)。②は調査区範囲に「地山」と軟弱地盤の境界の存在を記す。低位段丘層である更新統上部以後の堆積物が積層する地形面と解せる。

〔文献〕

- 植村善博 1995『都をさえた奥座敷 丹波』『日本の自然 地域編5近畿』128-138頁、岩波書店
- 産業技術総合研究所 2021「活断層データベース」https://gbank.gsj.jp-activefault/index_gmap.html
- 岡田篤正・東郷正美編 2000『近畿の活断層』、東京大学出版社
- 國下多美樹・廣富亮太ほか 2018「上中城跡第6次発掘調査報告」「考古学実習・文化財実習報告書」第1集、20~32項、龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻
- 井本伸宏・清水大吉郎他 1989『京都西北部の地質』、地質調査所
- 白川静 2003『常用字解』366頁、平凡社
- 竹下士郎・奥村清一郎・石井清司 1996「上中太田遺跡発掘調査概報」「京都府遺跡調査概報」第70冊、21~34項、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

中塚 良(向日市埋蔵文化財センター)

抄 錄

ふりがな	かみなかじょうせきのけんきゅう					
書名	上中城跡の研究					
副書名						
巻次						
シリーズ名	龍谷大学文学部考古学実習調査報告書					
シリーズ番号	第1冊					
編著者名	國下多美樹（編集）・木許守・伊野近富・花熊祐基・神所尚輝・清水真好・市川勇樹・吉兼千陽・芦塚亮太・永田丈一郎・加藤勇太・西村早織・宮尾李・金田明大・熊井亮介・福島克彦・中塚良					
編集機関	龍谷大学文学部考古学実習室					
所在地	〒600-8268 京都府京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1					
発行年月日	2021年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	北緯	東經	調査期間	調査面積	
市町村	遺跡番号	~	~			
かみなかじょうせき 上中城跡 第4次	京都市右京区 京北町城下町 37-1、37-2	261008 C1906 2048	N35° 11'56.0"E E135° 38'01.9"	2014年 8月6日 ~8月12日	8550m ² 7m ² 17m ² 16m ²	
第5次				2015年 8月6日 ~8月12日		
第6次				2017年 8月14日 ~8月22日		
第7次				2018年 8月20日 ~8月30日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
上中城跡 第4次	城館	中世	郭・濠・土塁	なし	測量調査。全体を再測量して規模・形態を修正した。	
第5次		古墳・ 奈良・鍾倉	土坑・ピット・溝	土師器・須恵器・瓦器	上中城跡の土塁の構造を明らかにし、石敷き遺構、竪穴状遺構、ピット、溝など郭内の利用についての情報を得た。上中・太田遺跡間連の縄文時代・古墳時代遺物を入手した。	
第6次		古墳・ 平安・室町	竪穴状建物・集石遺構・溝・ピット・土塁	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・石製品		
第7次		弥生～古墳・中世	溝	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器		

上中城跡の研究

龍谷大学文学部考古学実習調査報告書 第1冊

2021年3月12日 発行

編集・発行 龍谷大学文学部考古学実習室

〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1

印刷・製本 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 300